

# 成田新高速鉄道・北千葉道路 埋蔵文化財発掘調査報告書2

—印旛郡印旛村小原第1遺跡・小原第2遺跡・堀尻第2遺跡—

平成21年3月

成田高速鉄道アクセス株式会社  
財団法人 千葉県教育振興財団

# 成田新高速鉄道・北千葉道路 埋蔵文化財発掘調査報告書2

—印旛郡印旛村小原第1遺跡・小原第2遺跡・堀尻第2遺跡—



## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第620集として、成田高速鉄道アクセス株式会社の成田新高速鉄道・北千葉道路建設事業に伴って実施した印旛郡印旛村小原第1遺跡・小原第2遺跡・堀尻第2遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代後期と古墳時代中期の集落や、奈良・平安時代の方形周溝状遺構が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 福島義弘

## 凡　例

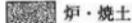
- 1 本書は、成田高速鉄道アクセス株式会社による成田新高速鉄道・北千葉道路建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印旛郡印旛村瀬戸ほかに所在する小原第1遺跡（遺跡コード325-010）、小原第2遺跡（遺跡コード325-011）、堀尻第2遺跡（遺跡コード325-013）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、成田高速鉄道アクセス株式会社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、北部調査事務所主席研究員 宮 重行が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、印旛村教育委員会、成田高速鉄道アクセス株式会社、千葉県北千葉道路建設事務所ほか多くの方々からの御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行地形図1:50,000「成田」N1-54-19-10（平成6年）、「佐倉」N1-54-19-14（平成10年）

第2図 印旛村市役所発行都市計画図1/2,500「印旛村11」

第5図 国土地理院発行地形図1:25,000「小林」N1-54-19-14-1（平成12年）

- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成19年1月撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、全て座標北である。測量位は小原第1遺跡、小原第2遺跡は日本測地（IX）系、堀尻第2遺跡は世界測地系である。
- 11 本書で使用した遺構番号の略号は、以下のとおりであり、遺構ごとの通し番号をふった。  
S I : 竪穴住居跡 S K : 土坑・陥穴 S M : 周溝状遺構 S D : 溝跡 S H : ピット  
S X : その他
- 13 図面等におけるスクリーントーンおよび記号等の凡例はそれぞれに明示した。



炉・焼土



粘土



赤彩

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 気候に至る経緯	1
2 調査の方法	5
第2節 遺跡の位置と周辺の環境	6
1 遺跡の地理的環境	6
2 遺跡周辺の歴史的環境	6
第2章 小原第1遺跡	12
第1節 遺跡概要	12
第2節 旧石器時代	14
第3節 縄文時代	15
第4節 奈良・平安時代	21
第5節 中・近世	23
第3章 小原第2遺跡	25
第1節 遺跡概要	25
第2節 縄文時代	26
第3節 弥生時代、奈良・平安時代	33
第4節 中・近世	35
第4章 堀尻第2遺跡	41
第1節 遺跡概要	41
第2節 縄文時代	42
第3節 弥生時代	53
第4節 古墳時代	58
第5節 奈良・平安時代	68
第6節 中・近世以降	70
第5章 まとめ	74

## 挿 図 目 次

第1図 路線と遺跡位置	1	堀尻第2遺跡	
第2図 遺跡の周辺地形	4	第26図 堀尻第2遺跡上層調査区と検出遺構	41
第3図 小グリッド構成	5	第27図 堀尻第2遺跡下層調査区	42
第4図 標準土層	5	第28図 土坑（SK-001, SK-002）	44
第5図 周辺遺跡分布	8	第29図 土坑（SD-004）	45
小原第1遺跡		第30図 グリッド出土縄文土器（1）	46
第6図 小原第1遺跡下層調査区	12	第31図 グリッド出土縄文土器（2），土製品	48
第7図 小原第1遺跡上層調査区と検出遺構	13	第32図 グリッド出土縄文時代石器（1）	50
第8図 石器集中地点	14	第33図 グリッド出土縄文時代石器（2）	52
第9図 縄文土坑	17	第34図 SI-001とその出土土器	54
第10図 グリッド出土土器（1）	19	第35図 SI-002とその出土土器（1）	56
第11図 グリッド出土土器（2），土製品	20	第36図 SI-002出土土器（2），石器	57
第12図 グリッド出土石器	21	第37図 グリッド出土弥生土器	58
第13図 奈良・平安時代遺構と出土遺物	22	第38図 SI-003	59
第14図 土壘，溝	24	第39図 SI-003出土土器	60
小原第2遺跡		第40図 SI-003出土土製品，石器	61
第15図 小原第2遺跡確認調査区	25	第41図 SI-004	63
第16図 小原第2遺跡上層調査区と検出遺構	26	第42図 SI-004遺物出土状況	64
第17図 土坑（1）	27	第43図 SI-004出土遺物（1）	65
第18図 土坑（2）	28	第44図 SI-004出土遺物（2），土製品，石器	66
第19図 縄文時代遺物分布	29	第45図 SM-001	68
第20図 グリッド出土縄文土器（1）	31	第46図 SM-001出土土器	69
第21図 グリッド出土縄文土器（2），石器	32	第47図 中・近世溝跡，奈良・平安時代以降グリッド出土遺物	71
第22図 グリッド出土弥生土器，土師器	34	第48図 中・近世溝跡出土遺物，平成20年度調査グリッド出土遺物	73
第23図 溝跡（1）	38	第49図 堀尻第2遺跡古墳時代土器集成図	75
第24図 溝跡（2）	39		
第25図 溝脇周辺出土陶器	40		

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	9	第3表 石器集中区出土石器組成表	15
小原第1遺跡		第4表 縄文土器出土量表	18
第2表 石器集中区出土石器一覧表	15	第5表 土製品計測表	18

第6表 縄文時代石器計測表	21	第13表 縄文土器出土量表	47
第7表 奈良・平安時代土器観察表	22	第14表 縄文時代土製品計測表	51
第8表 遺構一覧表	23	第15表 縄文時代石器計測表	51
小原第2遺跡		第16表 弥生時代石器計測表	58
第9表 土器出土量表	33	第17表 SI-003出土土器観察表	62
第10表 石器計測表	33	第18表 SI-004出土土器観察表	67
第11表 土器観察表	40	第19表 奈良・平安時代以降土製品・石器計測表	67
第12表 遺構一覧表	40	第20表 SM-001及び周辺出土土器観察表	70
堀尻第2遺跡		第21表 遺構一覧表	72

## 図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版15 グリッド出土縄文土器(2), グリッド出土石器, 土師器, 陶器
小原第1遺跡	図版16 グリッド出土弥生土器 堀尻第2遺跡
図版2 遺跡遠景, 調査区遠景, 確認調査状況	図版17 調査区近景, 調査風景
図版3 下層拡張区調査風景, 石器集中地点全景, セクション	図版18 SK-001・007
図版4 SK-001~007	図版19 SI-002, SI-003遺物出土状況
図版5 SI-001, SD-001	図版20 SI-003
図版6 SX-001	図版21 SI-004
図版7 石器集中区出土石器, グリッド出土縄文土器(1)	図版22 SM-001
図版8 グリッド出土縄文土器(2), 土製品, 石器, SI-001出土須恵器	図版23 SD-001~003, SD-005
小原第2遺跡	図版24 縄文時代遺構出土土器
図版9 調査区近景, 確認調査状況	図版25 グリッド出土縄文土器(1)
図版10 ローム層断面, トレンチ内遺構検出状況, 縄文土器集中地点	図版26 グリッド出土縄文土器(2), グリッド出土土製品, 弥生土器
図版11 SK-001~SK-003, SK-005, SK-006, 拡張区弥生土器出土状況	図版27 グリッド出土縄文時代石器
図版12 SD-001, SD-002・003, SK-010, SK-014	図版28 弥生時代出土遺物
図版13 SK-008~016, SH-001・002, SD-003・004	図版29 SI-003出土遺物
図版14 グリッド出土縄文土器(1)	図版30 SI-004出土土器(1)
	図版31 SI-004出土土器(2), 土製品, 石器
	図版32 SM-001, 奈良・平安時代以降出土遺物, 平成20年度調査出土縄文時代遺物

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査に至る経緯

現在印旛地区から都心へ直接向かう鉄道として、現在印旛日医大駅から小室駅を経て京成高砂へ続く千葉NT線・北総線が営業しており、その側道部分を利用して千葉県東葛地域と成田地域を結ぶ幹線道路として機能する延長47kmの一般国道464号北千葉道路が併用されている。この度、成田空港の都心へのアクセス向上のため、都心から直接成田空港に至る成田新高速鉄道整備事業が具体化し、印旛日医大駅まで開通している路線を延伸し成田空港に至る19.1kmの区間について、成田高速鉄道アクセス線（印旛日医大前駅～土屋間10.7km）・成田空港高速鉄道線（土屋～成田空港駅間8.4km）として建設が行われることとなった。また同時に路線に並行する北千葉道路（印旛～成田間は延長約13.5km）も一体として整備される（第1図）。これら的一体的な整備は空港アクセスの大幅な改善にとどまらず、地域の活性化、交通処理能力の向上、物流効率化、成田市街地の交通円滑化、広域道路ネットワーク・救急医療・防災機能の強化などにも大きく寄与することが期待されている。



- 1 松虫陣屋跡 2 小原第1遺跡 3 小原第2遺跡 4 犀戸第2遺跡 5 木橋第2遺跡 6 立田台第2遺跡  
7 松崎外小代内小代遺跡 8 松崎山ノ台遺跡

第1図 路線と遺跡位置 (1/100,000)

この成田新高速鉄道・北千葉道路整備事業の実施にあたり、埋蔵文化財の有無と取扱いについて平成16年9月に千葉県土木整備部道路計画課が千葉県教育委員会・印旛村教育委員会に照会した結果、用地内には印旛地区には小原第1遺跡ほか6遺跡の存在が確認されたことから、その取り扱いについて関係機関による慎重な協議が重ねられた。その結果、事業の性格上計画の変更が困難なため、やむをえず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、調査は成田新高速鉄道アクセス株式会社から、財団法人千葉県教育振興財團に委託された。

印旛地区の調査は平成18年10月から開始し、その年度は松虫陣屋跡、小原第1遺跡、小原第2遺跡、堀尻第2遺跡、木橋第2遺跡、立田台第2遺跡の一部について調査を行い、松虫陣屋跡では中世の城館跡、堀尻第2遺跡、立田台第2遺跡では古墳跡、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡などの遺構が検出された。翌平成19年度には、立田台第2遺跡の前年度に調査ができなかった現道部分及び小原第1遺跡、小原第2遺跡の隣接地の追加調査を行った。平成20年度には、堀尻第2遺跡の未着手の追加調査を行った。

整理作業は平成19年度から平成20年に実施し、その内、今回は小原第1遺跡、小原第2遺跡、堀尻第2遺跡についての成果を報告する。

小原第1遺跡、小原第2遺跡、堀尻遺跡の発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

#### (発掘作業)

##### 小原第1遺跡

###### 平成18年度

期 間 平成18年10月10日～平成18年12月15日

担当職員 北部調査事務所長 古内 茂

主席研究員 雨宮龍太郎・官 重行

内 容 発掘調査 対象面積 11,595m<sup>2</sup>

上層確認調査 1,615m<sup>2</sup>、下層確認調査300m<sup>2</sup>

本調査なし

###### 平成19年度

期 間 平成19年12月03日～平成19年12月10日

担当職員 北部調査事務所長 豊田佳伸

上席研究員 沖松信隆

内 容 発掘調査 対象面積 285m<sup>2</sup>

上層確認調査28.5m<sup>2</sup>、下層確認調査 7 m<sup>2</sup>

本調査なし

##### 小原第2遺跡

###### 平成18年度

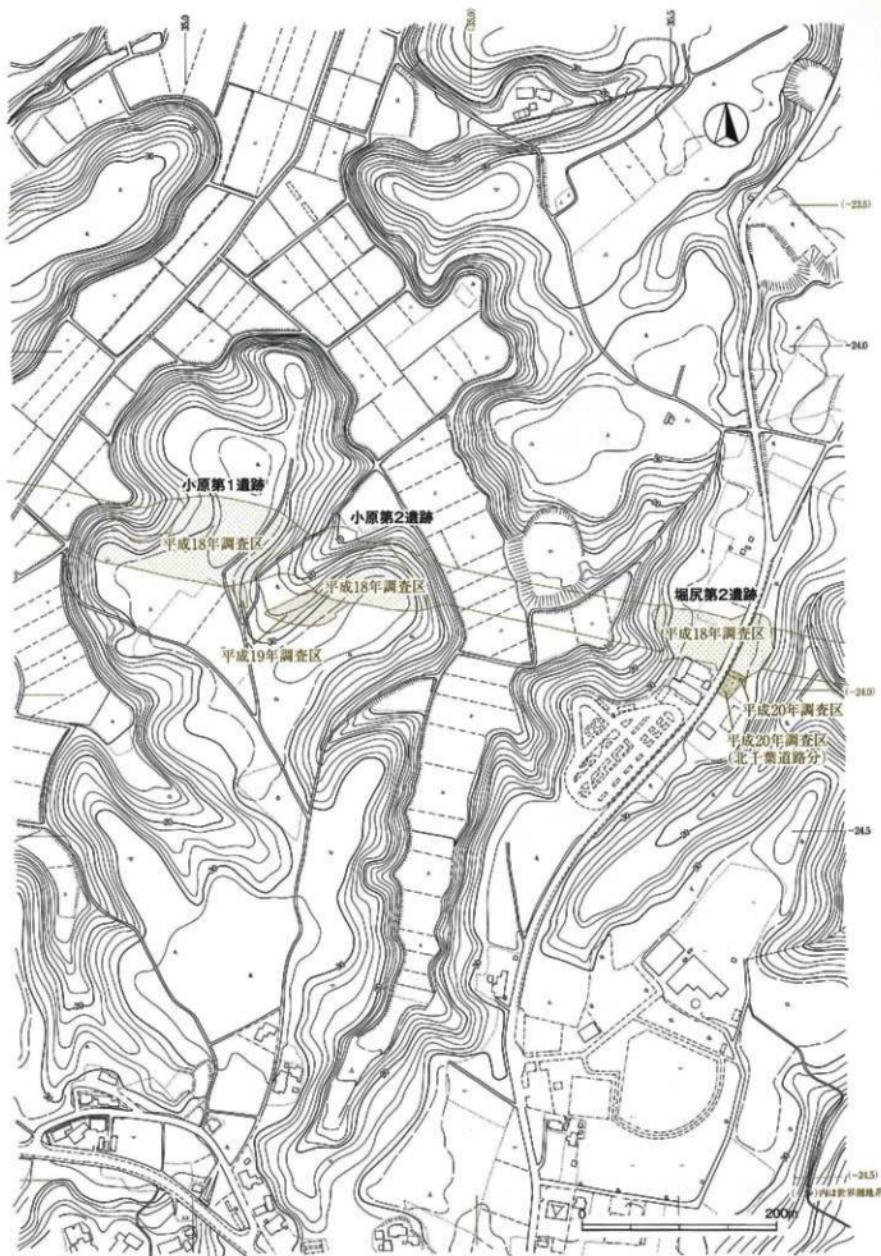
期 間 平成18年8月17日～平成18年10月23日

**担当職員** 北部調査事務所長 古内 茂  
**主席研究員** 宮 重行  
**内 容** 発掘調査 対象面積 4,640m<sup>2</sup>  
 上層確認調査910m<sup>2</sup>、下層確認調査96m<sup>2</sup>  
 本調査なし  
**平成19年度**  
**期 間** 平成19年12月11日～平成19年12月27日  
**担当職員** 北部調査事務所長 豊田佳伸  
**主席研究員** 沖松信隆  
**内 容** 発掘調査 対象面積 1,650m<sup>2</sup>  
 上層確認調査 160m<sup>2</sup>、下層確認調査 40m<sup>2</sup>  
 上層本調査 150m<sup>2</sup>  
**堀尻第2遺跡**  
**平成18年度**  
**期 間** 平成18年10月1日～平成12年12月26日  
**担当職員** 北部調査事務所長 古内 茂  
**主席研究員** 雨宮龍太郎  
**内 容** 発掘調査 対象面積 5,485m<sup>2</sup>  
 上層確認調査 1,072m<sup>2</sup>、下層確認調査 156m<sup>2</sup>  
 上層本調査 874m<sup>2</sup>  
**平成20年度**  
**期 間** 平成20年8月1日～平成20年8月12日  
**担当職員** 北部調査事務所長 豊田佳伸  
**主席研究員** 宮 重行  
**内 容** 発掘調査 対象面積 64.64m<sup>2</sup>  
 下層確認調査 2 m<sup>2</sup>  
 上層本調査 64.64m<sup>2</sup>  
**期 間** 平成20年8月18日～平成20年8月27日  
**担当職員** 北部調査事務所長 豊田佳伸  
**主席研究員** 宮 重行  
**内 容** 発掘調査 対象面積 250m<sup>2</sup>  
 下層確認調査 8 m<sup>2</sup>  
 上層本調査 250m<sup>2</sup>

(整理作業)

小原第1遺跡・小原第2遺跡・堀尻第2遺跡

平成19年度



第2図 遺跡の周辺地形

期 間 平成19年4月1日～平成19年7月31日  
 平成19年10月1日～平成20年3月31日  
 担当職員 北部調査事務所長 豊田佳伸  
 主席研究員 宮 重行  
 内 容 整理作業 水洗・注記から原稿執筆の一部

平成20年度  
期 間 平成20年11月1日～平成20年12月26日  
担当職員 北部調査事務所長 豊田佳伸  
主席研究員 宮 重行  
内 容 整理作業 原稿執筆の一部から刊行、

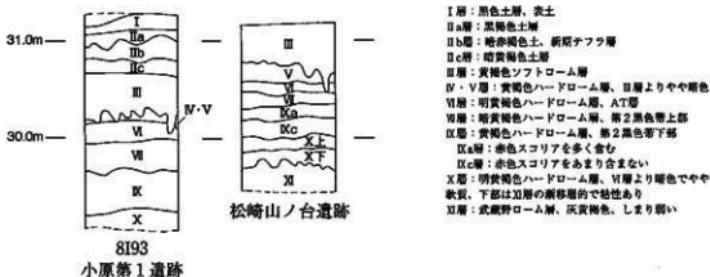
第3図 小グリット構成

## 2 調査の方法

調査区の設定は、調査対象範囲全城に、公共座標に合わせて東西南北に40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南にアルファベットの大文字でA、B、C、……とし、西から東へ1、2、3……として、これを組み合わせて使用し、大グリッド内には4m×4mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00、01、02……として南東隅を99とした（第3図）。小グリッド名はこれにより、2A12のように表記される。

調査当初に遺構の分布範囲、遺物の出土状況、土層の堆積状況を調べ、本調査範囲（表土を広範囲に除去し本格的に調査する範囲）を確定するための確認調査と、確定した範囲内を精査する本調査との、2段階の方式での調査を実施した。

上層の確認調査では、縄文時代までの遺構の検出のため、調査開始当初に幅2mの確認トレンチを対象面積の10%に設定し、重機を併用して遺構確認面（主にソフトローム層上面）まで下げ、把握する作業を行った。下層の確認調査では、上層の本調査終了に引き続いて、旧石器時代の遺物の検出のため、1辺2mの方形グリッドを、調査対象面積の2～4%を基準に、重機を併用して武蔵野ローム層直上まで掘り下



第4図 構造十層

げて実施した。上層本調査では、重機により遺構検出面まで表土を除去した後、遺構を精査した。

なお、検出した遺構を調査する際の番号は、遺構種別毎に通し番号を付した（凡例参照）。遺物はグリッド・遺構毎に、通し番号で取り上げた。

## 第2節 遺跡の位置と周辺の環境

### 1 遺跡の地理的環境（第2・5図、図版1）

小原第1遺跡・小原第2遺跡は、千葉県印旛郡印旛村瀬戸字小原807-3ほか、堀尻第2遺跡は印旛村瀬戸字下湯屋2042-1、吉高字木橋419-1ほかに所在する。遺跡の周辺は谷地や印旛沼沿いに水田が広がり、台地上は畑地や林の展開する田園地帯である。

遺跡の位置は大きくみると関東ローム層（第4図）により形成された北総台地上にあり、U字形に湾曲する印旛沼に舌状に突き出した部分に位置している。その台地はさらに印旛沼に注ぐ川の小支谷により開析されている。行政区では北側は本塙村、西側は印西市と境界を接し、印旛沼を間に介し南側に佐倉市、東側に成田市、酒々井町と面している。標高は32mほど、印旛沼旧湖岸からの直線距離は約1.5kmである。遺跡と水田面との比高差は約23mある。

調査前現況は、小原第1・第2遺跡は山林、堀尻第2遺跡は駐車場（旧畠地）・山林である。土層観察から小原第1・第2遺跡はもともとは畠であったと思われる。時代をさかのぼった弥生時代・古墳時代には、墓域や集落域だったことが判明しており、各時代によって土地の利用形態が変遷している状況がうかがえる。また遺跡直下の現在水田となっている谷地部も、早い時期（おそらく弥生時代以降）に耕地化されていたと思われる。

### 2 遺跡周辺の歴史的環境（第5図、第1表）

#### 旧石器時代の遺跡

調査遺跡近辺での旧石器時代の遺跡分布は少ないが、これは、ローム層中まで及ぶ調査例が少ない為と考えられる。

今回の調査で小原第1遺跡でⅧ層、東側の立田台第2遺跡でⅢ層、Ⅵ層で検出があった。また瀬戸の井戸向遺跡<sup>1)</sup>ではⅢ層とⅣ層で1ブロックずつ検出している。

本遺跡から西側へ離れた千葉ニュータウン遺跡群の本塙村角田台遺跡<sup>2)</sup>、印旛村造谷の向辺田遺跡<sup>3)</sup>ではⅢ層からⅩ層で、本塙村荒野前遺跡<sup>4)</sup>ではⅦ層で石器群が検出され、現在整理作業中である。また平賀地区では油作第1遺跡<sup>5)</sup>で主にⅢ層からナイフ型石器、ポイントを伴った石器群が多数検出された。印旛村瀬戸のちばろく遺跡<sup>6)</sup>でもⅦ・Ⅸ層で検出されている。

なお40年ほど前、印旛沼捷水路工事の際に、堀尻第2遺跡の南東約1km地点にある市井橋の麓の低地でナウマン象ほほ1頭分の骨が発見されている<sup>7)</sup>。

#### 縄文時代の遺跡

草創期では瀬戸遠蓮遺跡<sup>8)</sup>で有舌尖頭器、隆起線文土器が出土している。立田台第2遺跡でも大型の木葉形先頭器の出土があった。

早期では撫糸文期の遺跡は至近では検出例はなく、やや離れて萩原株木遺跡<sup>9)</sup>、光明寺遺跡<sup>10)</sup>、向田

遺跡、本塁村式ト込遺跡<sup>11)</sup> があげられる。沈線文系土器は吉高浅間古墳<sup>12)</sup>、吉高家老地遺跡<sup>13)</sup>、光明寺遺跡<sup>14)</sup>での出土がある。条痕文系土器（茅山式）の時期になると、遺跡数が増加しており、吉高浅間古墳、吉高家老地遺跡、油作第2遺跡<sup>15)</sup>、打手第2遺跡<sup>16)</sup>、炭焼台遺跡<sup>17)</sup>、井戸向遺跡、古山遺跡<sup>18)</sup>等がある。遺構は炉穴が吉高家老地遺跡で5基、井戸向遺跡での26基、光明寺遺跡で17基、駒込遺跡<sup>19)</sup>で53基と、住居跡は吉高家老地遺跡、駒込遺跡で検出されている。

前期の遺跡は周辺では検出が少ないが、古山遺跡で花積下層から興津式にかけての土器の出土が、平賀の油作第2遺跡では諸磯期の住居跡があった。

中期は堀尻第2遺跡の南に隣接する細田台遺跡<sup>20)</sup>、尾山遺跡<sup>21)</sup>が加曾利E式の時期の集落跡になる。古山遺跡では五領ヶ台式から加曾利E式のかけての土器の出土が見られた。松虫丑むぐり遺跡<sup>22)</sup>・萩原長原遺跡<sup>23)</sup>では加曾利E期の住居跡が検出されている。

後・晩期は堀之内式土器が小原第2遺跡で、加曾利B式土器が小原第1遺跡、堀尻第2遺跡での出土があり、後者では遺構も伴っていた。吉高浅間古墳・萩原長原遺跡で後・晩期の土器が出土している。平賀では井ノ崎台遺跡<sup>24)</sup>、駒込遺跡で晩期の例がある。

なお陥穴状遺構はほぼまんべんなく、各所で検出されている。

#### 弥生時代の遺跡

小原第2遺跡で土器、堀尻第2遺跡、立田台第2遺跡で後期の住居跡群が検出された。他に弥生時代後期の集落に関しては吉高家老地遺跡、吉高大谷遺跡<sup>25)</sup>、山田源訪遺跡<sup>26)</sup>がある。吉高地区では、細尾根状の台地上にも分布しており、分布密度はそれほど濃くないものの、広範囲に検出される傾向がある。角田台遺跡、向田遺跡では台地縁辺部に集落を形成している。

#### 古墳時代の集落遺跡

堀尻第2遺跡、立田台第2遺跡では古墳時代中期の住居跡が検出された。北側に隣接した大竹遺跡<sup>27)</sup>でも確認調査で古墳時代の住居跡の存在が確認されているが時期は不詳である。

古墳時代前期集落は吉高地区台地の北端、印旛沼に南面した吉高家老地遺跡、吉高浅間古墳下遺跡<sup>28)</sup>、平賀地区の一ノ台遺跡<sup>29)</sup>、井ノ崎台遺跡で五領期の住居の例がある。

古墳時代中期の住居跡は平賀地区の一ノ台遺跡、仲ノ台遺跡<sup>30)</sup>に検出例がある。

古墳時代後期（鬼高期）の集落は至近での検出例はみられない。山田地区的光明寺遺跡、打手第2遺跡、山田源訪遺跡で集落が確認されている。また少し離れた平賀地区では細町遺跡<sup>31)</sup>、油作第1遺跡、油作第2遺跡、駒込遺跡等で規模の大きい集落がみられる。

#### 古 墳

古墳は、吉高・瀬戸地区の台地上、印旛沼に面し群集して見られる。堀尻第2遺跡から北側の吉高地区の台地には、向田古墳群さらに大谷古墳群、浅間古墳がある。また東から北東・北にのびる尾根状の細い台地上には、三角作古墳群、羽黒古墳群、家老地古墳群、山王古墳群、舟戸横穴群が所在し、吉高地区の大古墳群を形成している。これらの古墳群は対岸の公津原古墳群や龍角寺古墳群や山田・平賀地区的古墳群とともに印旛地区有数の古墳分布地帯をなしている。調査されたものでは、中期の埴輪を持つ前方後方墳で箱式石棺の主体部を持つ吉高山王古墳<sup>32)</sup>、円墳で粘土郭主体部を持つ吉高浅間古墳がある。

印旛沼に南面する地域では北面する地区と比べ古墳群が少ないが、瀬戸地区の大木台2号墳<sup>33)</sup>は径17mの円墳で、木棺直葬主体部を持ち、形象埴輪列が出土したことで知られている。



第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	所在地	種別	田石器	縄文	弥生	古墳	秦・平安	備考
1 小原第1遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡	石器1	加曾利B焼		住1		本報告書所収
2 小原第2遺跡	印旛村高戸	包装地		塙之内	後			*
3 碓尻第2遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡		秀山・加曾利B	後住2	中住2	方形周溝1	
4 袋虫塙跡	印旛村松戸	包装地、城跡						中世城塙跡 整理中
5 木橋第2遺跡	印旛村吉萬	包装地						整理中
6 立田台第2遺跡	印旛村吉萬	古墳地、集落跡	石器		後住5 土器箱	中住1 古墳5		施式石棺 整理中
7 吉高山王遺跡	印旛村吉萬	古墳地、集落跡						円筒埴輪(6C後半)、金環、柄頭刀子
8 吉高家老地遺跡	印旛村吉萬	集落跡		早原住1 伊弉5	後住5	古墳5 御住1	住II	茅山、三戸 円形周溝1、塙1
9 児戸横穴群	印旛村吉萬	後穴						
10 家老地古墳群	印旛村吉萬	古墳群						
11 羽庭古墳群	印旛村吉萬	古墳群						
12 三角作古墳群	印旛村吉萬	古墳群						
13 吉高淡間古墳	印旛村吉萬	古乳泉墓跡		田戸下・茅山加曾利B、宝行・鶴見		円墳1 五重住3		須恵器、馬具、滑石模造品
14 大竹遺跡	印旛村吉萬	古墳地、集落跡	石器6	福穴1		中住28、円墳4		確認調査のみ、方形周溝2、埴輪
15 吉高大谷遺跡	印旛村吉萬	集落跡				後住4		
16 大谷古墳群	印旛村吉萬	古墳群						
17 向田古墳群	印旛村吉萬	古墳群						
18 荘原桃木遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡	漆器	田戸下・西戸上・野鳥、加曾利穴	後住2	円墳2	住2、土坑方形周溝1	城跡、獨立・土坑
19 荘原長原遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡		中周2、2、塙穴2、3、6穴1	後住18	和泉住1	住4	弁差田戸下、加曾利E、称名寺塙之内、宝行
20 松虫丘ぐり遺跡	印旛村松戸	包装地、集落跡	尖頭器	中住1				加曾利E
21 向田遺跡	印旛村達道	包装地、集落跡	石器4	茅山住1・伊弉3、船穴1	後住13	住1		平成20年度刊行
22 武込遺跡	木幡村角田	包装地、集落跡	石器1	伊弉20、塙穴6、土坑2	後住3	前住6、塙穴1	住9、掘立	早期包合層
23 角田台遺跡	木幡村角田	包装地	石器多	塙穴・土坑	後住		住41、掘立5	整理中、「近傍部物多…」墨書き
24 寛前野邊遺跡	木幡村角田	包装地、集落跡	石器多	塙穴石集				整理中
25 ちばろく遺跡	印旛村高戸	包装地	漆器	塙・IV	伊弉1	後住4		塙2
古山遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡		土穴・伊弉19、石器群	住2	和泉住1	住1	野鳥・加曾利E・B 古墳・壇石・玉網彌・ガラス玉
26 遠戸遠篠遺跡	印旛村高戸	包装地		ポイント	草創期			縄文・陶文
27 岩焼台遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡	石器	伊弉穴6・土坑				確認調査のみ
28 岩焼台所在塙	印旛村高戸	塙						塙1
29 大木本2号墳	印旛村高戸	古墳		加曾利B		円墳2		2号墳：形象埴輪、木棺直葬、直刀、鉄頭、刀子
30 大木本古墳群	印旛村高戸	古墳群						
31 和田谷津塙	印旛村高戸	塙						塙1
32 井戸向遺跡	印旛村高戸	集落跡	Ⅲ・Ⅳ	伊弉26・土坑5	塙穴16		第1	野島～茅山上瓦場・近世層・道路・基下坑
33 和田谷古墳群	印旛村高戸	古墳群						
34 篠田遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡	石器	中周住、伊弉、塙穴・土坑				確認調査のみ
35 尾山遺跡	印旛村高戸	包装地、集落跡		加曾利E				
36 佐木作古墳群	印旛村高戸	古墳群						
37 ナツマ・農出土地	印旛村高戸							
38 山田瀬跡遺跡	印旛村山田	包装地、集落跡		田戸下・野鳥、塙穴	住1		住4	
39 打手第2遺跡	印旛村山田	包装地、集落跡				後住10	住11	板碑36、台地形状・土器羣
40 山田虎ノ作遺跡	印旛村山田	集落跡					住15	「吉」墨書き
41 光明寺遺跡	印旛村山田	包装地、集落跡		塙穴				
42 楠荷古墳群	印旛村山田	古墳群						
43 楠荷古墳群	印旛村山田	古墳群						
44 跳跡古墳群	印旛村山田	古墳群						
45 光明寺古墳群	印旛村山田	古墳群						
46 上園春古墳群	印旛村山田	古墳群						
47 井ノ崎台遺跡	印旛村平賀	集落跡		鶴ヶ鳥・伊弉17	後住3	前住2		唐～晚朝、南北開水系排水土器
48 平賀航行遺跡	印旛村平賀	包装地、集落跡	IV	塙穴			住16、土20	近世土塙基11
49 動堂古墳群	印旛村平賀	古墳群						
50 山ノ下古墳群	印旛村平賀	古墳群						
51 山ノ下10号墳	印旛村平賀	古乳泉・南跡		早住1	後住1		住1	
52 古井戸原高1遺跡	印旛村平賀	集落跡					多	元藤衛比定地
53 古井戸原古墳群	印旛村平賀	古墳群						
54 油作第1遺跡	印旛村平賀	包装地、集落跡	Ⅲ・Ⅳ	石器1	子持口、塙之内	後住42	住9	中世掘立土坑・板碑、腰平・永済
油作第1・II遺跡	印旛村平賀	包装地、集落跡					住10	中世・掘立4、腰平
平賀面町遺跡	印旛村平賀	集落跡					住42	住24・掘立
一ノ台遺跡	印旛村平賀	古乳泉・南跡	Ⅲ・Ⅳ	石器1	後住10	住7・中23・住1		吉井神寶
仲ノ台遺跡	印旛村平賀	集落跡	石器1			住9		
卯込遺跡	印旛村平賀	集落跡		早住2・伊弉33	後住1		住9	曉洋館
油作第2	印旛村平賀	集落跡	Ⅲ・Ⅳ	尖頭器	住1	住1・後44	住50・掘立30	「元家家」・「厨」墨書き

## 奈良・平安時代

平安時代に撰された和名類聚抄に見える、印旛郡吉高郷は、平賀や山田、吉高、瀬戸等を含んだかなり広い範囲とされている。遺跡近辺でのこの時期の集落は、域内での大規模古墳群の存在のため少例で、吉高家老地遺跡で11軒の住居が検出されている程度である。瀬戸の井戸向遺跡では瓦塔の破片が出土しており、寺院関係の遺構が存在する可能性がある。集落があるとすれば、瀬戸地区の南部側であろうか。また西側の松虫地区には寺伝に奈良時代の行基創建と伝える松虫寺がある。

一方、山田地区や平賀地区では山田虎ノ作遺跡、打手第2遺跡、山田源防遺跡が確認されており、広範囲な集落が存在している。山田虎ノ作遺跡では吉高の地名との関連を思わせる「吉」の墨書き土器が出土している。平賀地区では油作第2遺跡<sup>30)</sup>が總軒数50軒を出す大規模集落である。官衙などに特徴的な「厨」の墨書きが見つかっている。油作第1遺跡では隆平永寶、銅鈴の出土が特筆される。平賀細町遺跡、平賀惣行遺跡<sup>31)</sup>でも住居が多数検出されている。

## 中・近世

城館跡比定地として、小原第1・第2遺跡の対岸に、松虫陣屋跡<sup>32)</sup>がある。印旛沼から入り込んだ谷地に臨んだ地にあり、複数郭を有し時期は16世紀頃が主になる。

近世になると、湖岸には渡し船や、漁業のための河岸が多数存在していた。南端には佐倉から印西方面へ抜ける街道が印旛沼を横断するため瀬戸の渡しがあった。現在とは道路は変わっているが、尾根を通って台地を十文字に交差して走る道があった。遺跡がのる吉高・瀬戸の台の中心集落は瀬戸十字路近辺の郷地区である。道路網の発達と共に、現在とほぼ同様の旧村落が形成されていたとみられる。

道、村境、道路の要衝等には土手、堀、塚、石造物等が配されていた様で、今回の堀尻第2遺跡での調査でもその様子がうかがえる。

注1 糸原 清 1996 一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 印旛村大木台古墳群、井戸向遺跡、炭焼台所在塚、和田谷津塚 財団法人千葉県教育振興財団調査報告277

2 財団法人千葉県文化財センター 1996 千葉県文化財センター年報21－平成7年度－

香取正彦 2006 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XIII 本塙村角田台遺跡（弥生時代以降） 財団法人千葉県教育振興財団調査報告530

3 注2文献

4 財団法人千葉県文化財センター 1986 千葉県文化財センター年報12

財団法人千葉県文化財センター 1998 千葉県文化財センター年報23－平成9年度－

5 高橋 誠 1991 千葉県印旛郡印旛村 油作第1遺跡発掘調査報告書 印旛村立平賀小学校建設予定地内埋蔵文化財調査 財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第57集

6 喜多圭介 1999 印旛村村道瀬戸・師戸線道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査 千葉県印旛郡印旛村ちはらく遺跡 財団法人印旛都市文化財センター発掘調査報告書 第150集

7 印旛村 1984 印旛村史 印旛村瀬戸市ノ坪 印旛沼捷水路工事現場（市井橋の麓）から出土

8 鈴木道之助 1974 瀬戸遠薙遺跡 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書II 財団法人千葉県都市公社

9 野村優子 2000 千葉県印旛郡印旛村萩原株木遺跡 印旛村道ニュータウン・萩原線埋蔵文化財調査財団

- 法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第161集
- 10 進藤泰浩他 1994 印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第81集
- 11 香取正彦他 2008 印西市南西ヶ作遺跡・本埜村式卜込遺跡 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XX 千葉県教育振興財團調査報告 第591集
- 12 猪股佳二 1994 千葉県印旛郡印旛村 吉高浅間古墳発掘調査報告書 印旛村吉高地区土取工事に伴う埋蔵文化財調査 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第82集
- 13 三浦和信他 吉高家老地遺跡 1976 弥生・土師集落址の調査 吉高家老地遺跡調査会
- 14 注10文献
- 15 平賀遺跡群発掘調査会 1985 平賀 平賀遺跡群発掘調査報告書
- 16 注10文献
- 17 財団法人千葉県文化財センター 1996 千葉県文化財センター 年報No.21－平成7年度－  
注2文献
- 18 木内達彦他 1986 印旛村村道瀬戸戸戸線発掘調査報告書 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第2集
- 19 注14文献
- 20 注2文献
- 21 千葉県教育委員会 1997 千葉県遺跡分布地図 東葛・印旛地区（改訂版）
- 22 鈴木道之助 1974 松虫丑むぐり遺跡 注8文献
- 23 高橋誠他 2000 千葉県印旛村 萩原長原遺跡 猪谷塚群 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第162集
- 24 注10文献
- 25 鈴木弘幸他 1981 吉高大谷遺跡 吉高大谷遺跡調査会
- 26 注10文献
- 27 注2文献
- 28 注11文献
- 29 注14文献
- 30 注14文献
- 31 郷堀英司 1996 平賀細町遺跡－印旛村平賀細町地区土取事業に伴う埋蔵文化財調査－ 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第114集
- 32 三浦和信他 1977 山王遺跡 吉高山王遺跡調査会 印旛村教育委員会
- 33 注1文献
- 34 注14文献
- 内田理彦 1994 油作1-II遺跡発掘調査報告書 印旛村平賀小学校運動場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査 財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第95集
- 35 注10文献
- 36 千葉県教育振興財團 2007 千葉県教育振興財團文化財センター年報No.32－平成18年度－

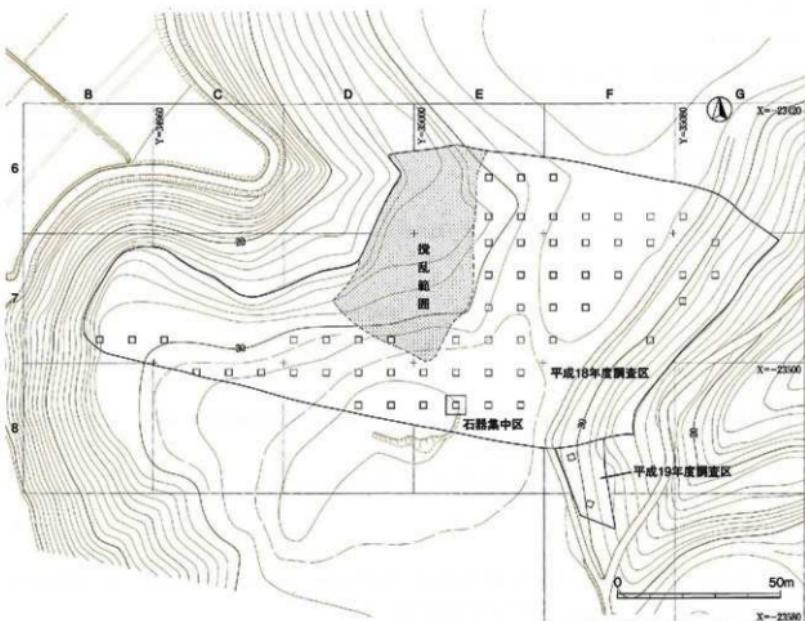
## 第2章 小原第1遺跡

### 第1節 遺跡概要

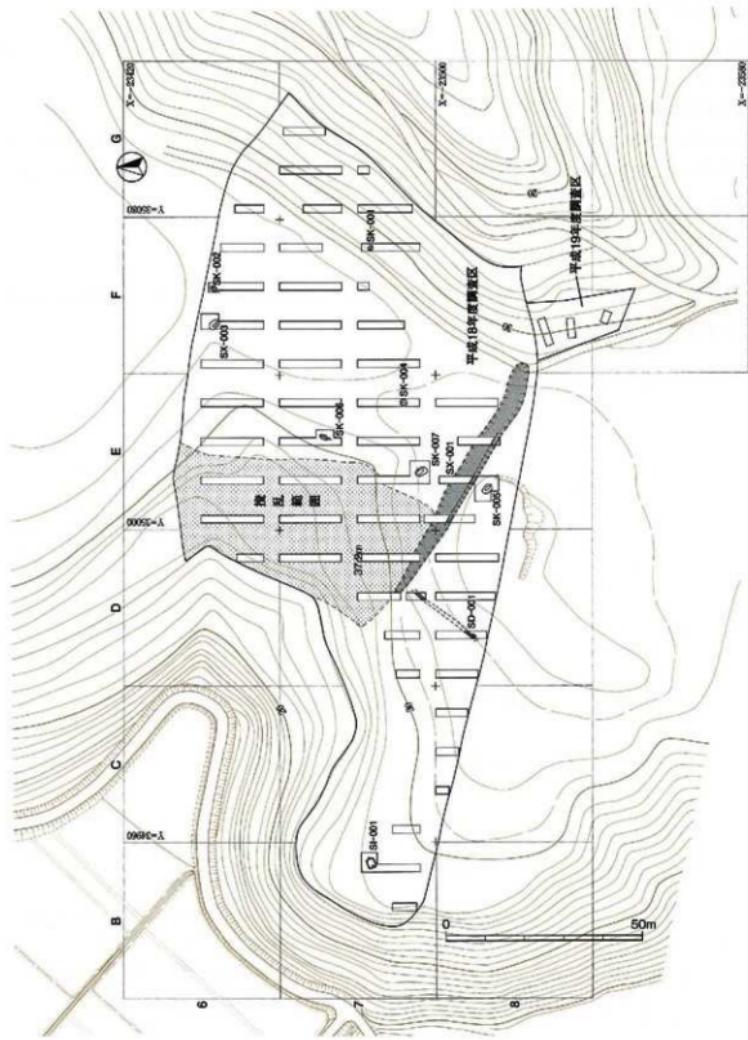
印旛沼に流入する松虫川により開拓されたほぼ南北に向いた谷の東岸にある。対岸は中世の城跡の松虫陣屋跡である。小原第2遺跡とは小さい谷を挟んで対峙しているが、地形を大局的に見れば、尾根部で繋がっており、同じ遺跡といえる。さらに南側には小原第3遺跡が国道付近まで展開している。

平成18年度は計画路線部分11,595m<sup>2</sup>、平成19年度には代替地部分285m<sup>2</sup>の調査を行った（第6・7図、図版2）。遺跡の現状は山林及び荒蕪地である。中央の谷部分は削土された上、山砂で整地されており、擾乱として調査範囲から除外した。また平成18年度斜面南東部および西側の斜面部は急傾斜地であり、遺構の存在が見込まれないのでトレーンチ・グリッドは入れていない。

検出した遺構は、旧石器ではⅦ層上部の石器集中区1か所（第6図）、縄文時代は平坦部から斜面上部にかけて、陥穴状遺構4基、土坑3基である。中・近世では、南側に遺跡を横断する形の溝を伴った土壙、その他溝1条であった（第7図、第8表）。



第6図 小原第1遺跡下層調査区



第7図 小原第1遺跡上層調査区と検出遺構

## 第2節 旧石器時代

### 検出石器集中区（第8図、図版7、第2・3表）

8E32・33グリッドで、Ⅶ層上部に5点を検出した。ブロック径は約1.0m×3.5m、出土層は0.2mの幅中に収まる。

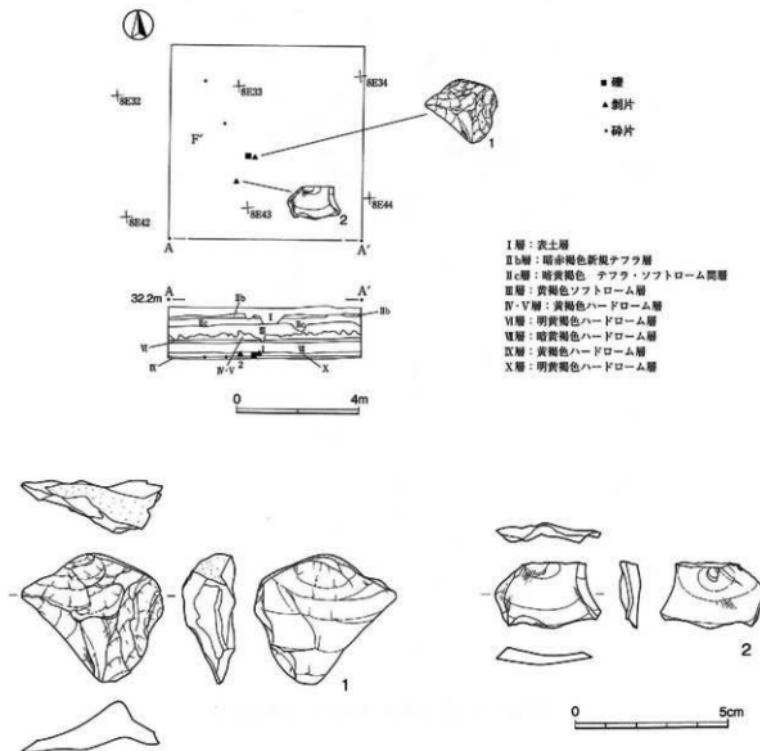
### 石器集中区出土石器（第8図、図版7、第2・3表）

1は打面調整剥で、石核の打面を形成するために大きく剥離されたものとみられる。断面三角形、低い三角錐形をなす。主剥離面は石材に節理があるため、不規則な割れ方をしている。灰色の緻密な安山岩を素材とする。

2は玉髓の小剥片である。

他に安山岩碎片が2点、チャート円盤片が1点ある。

出土した資料が少なく、断定はし難いが、碎片や打面調整剥片の出土状況からみて、周辺の調査区外に石器製作跡が存在する可能性が考えられる。



第8図 石器集中地点

第2表 石器集中区出土石器一覧表

検出回数	遺物名	大グリッド	遺物名	標高(m)	出土層位	器種	石 材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重 量(g)	備考
8	1	下鉢	5	30.557	IX	側片	安山岩	40.3	43.1	15.9	13.9	
8	2	下鉢	3	30.570	IX	側片	玉髓	20.8	32.8	6.2	2.3	
		下鉢	1	30.403	IX	碎片	安山岩	16.2	12.4	4.5	0.6	
		下鉢	2	30.404	IX	碎片	黒色安山岩	23.4	17.1	3.8	1.3	
		下鉢	4	30.398	IX	縫隙	チャート	23.3	22.3	7.6	6.1	

第3表 石器集中区出土石器組成表

	側 片	跡 片	縫隙 片	合計(点数)	(g)	%
チャート			1 6.1	1 6.1	20.0 25.2	
玉髓	1			1	20.0	
	23			23	95	
安山岩	1 13.9	1 0.6		2 14.5	40.0 59.9	
黒色安山岩		1		1	20.0	
		13		13	5.4	
合計	2 162	2 1.9	1 6.1	5 24.2	100.0 100.0	
%	40.0 66.9	40.0 7.9	25.2	100	100	

### 第3節 繩文時代

#### 検出遺構

##### SK-001 (第9図、図版4)

7F58・68グリッド、南東の斜面で検出した。平面形は開口部で長軸1.49m、短軸0.87m、底面で長軸1.18m、短軸0.59mのほぼ楕円形を呈する。長軸方位はN39°W、深さは0.81m、床はハードロームではほぼ平坦である。北側は木の根の擾乱が激しい。断面はU字形になる。

遺物は出土していない。時期は繩文時代と思われる。

##### SK-002 (第9図、図版4)

6F55グリッド、調査区北端で尾根状台地中央部で検出した。平面形は開口部で長軸1.40m、短軸0.90m、底面で長軸1.08m、短軸0.56mの楕円形を呈する。長軸方位はN74°E、深さは0.52m、床はハードロームではほぼ平坦であり、東側に小ピットがある。断面はU字形になる。

遺物は出土していない。覆土は暗褐色土であった。時期は繩文時代と思われる。

##### SK-003 (第9図、図版4)

SK-002の西隣、6F53・63グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸3.11m、短軸1.66m、底面で長軸2.31m、短軸0.39mの長楕円形を呈する。長軸方位はN41°W、深さは0.55m、床はほぼ平坦である。断面は逆台形になる。覆土は黄褐色の土が主体である。土層断面では、中心に一回り小さい断面U字形の土坑があり、周囲にローム土を充填した緩い立ち上がりの壁を持つ土坑と重複しているようにもみえる。

遺物は出土していない。時期は繩文時代と思われる。

##### SK-004 (第9図、図版4)

調査区中央、台地の平坦部中央で7E78・88グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸2.21m、短軸1.78m、底面で長軸1.04m、短軸0.66mの楕円形を呈する。長軸方位はN40°E、深さは1.18m、床は浅い皿状、

中央に径0.22m、深さ0.46mの小ピットを有する。断面は逆台形で、下半が筒形に、上半がラッパ状に広がる。

覆土は上部に黒色土、下位に黄褐色土、底面に更に薄い黒色土が見られるもの。遺物は出土していない。類例から、縄文時代陥穴と思われる。

#### SK-005 (第9図、図版4)

8 E32グリッドで、下層拡張時にⅢ層上面で検出した。台地が尾根状に最も細くなる個所である。平面形は開口部で長軸2.97m、短軸1.80mの楕円形、深さは2m以上あり、労働安全衛生上危険であることが判断し、下部の調査を中止した。深さ2.3mの時点で長軸1.83m、短軸0.58mの楕円形を呈する。長軸方位はN45°W、壁は垂直に近い立ち上がりになる。

覆土は上部に黒っぽい土があるが、中位以下は黄褐色土やロームブロックが主体の層となる。遺物は出土していない。時期は縄文時代と思われる。

#### SK-006 (第9図、図版4)

下層確認調査の際に西側斜面の7 E25・26グリッドで、検出した溝状の土坑である。平面形は開口部で長軸3.08m、短軸1.03mの不整長楕円形、底面は長軸2.96m、短軸0.18mである。長軸方位はN25°E、深さは1.41m、床は細いが平らであり、断面は長軸方向巾着形、横断面で深いU字形になる。

覆土は上部と床面上が暗褐色土、中位はロームブロック主体の黄褐色土になっている。遺物は出土していない。縄文時代の陥穴であろう。

#### SK-007 (第9図、図版4)

7 E83・93グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸3.01m、短軸2.06mの不整楕円形をなす。長軸方位はN36°Wになる。深さは2m以上になる。断面は逆台形である。掘り込みが深く危険なので、中途で調査を終了した。

覆土状況はSK-005と同様である。遺物は出土していない。縄文時代の陥穴であろう。

#### グリッド出土遺物（第4表）

##### 縄文土器（第10・11図、図版7・8）

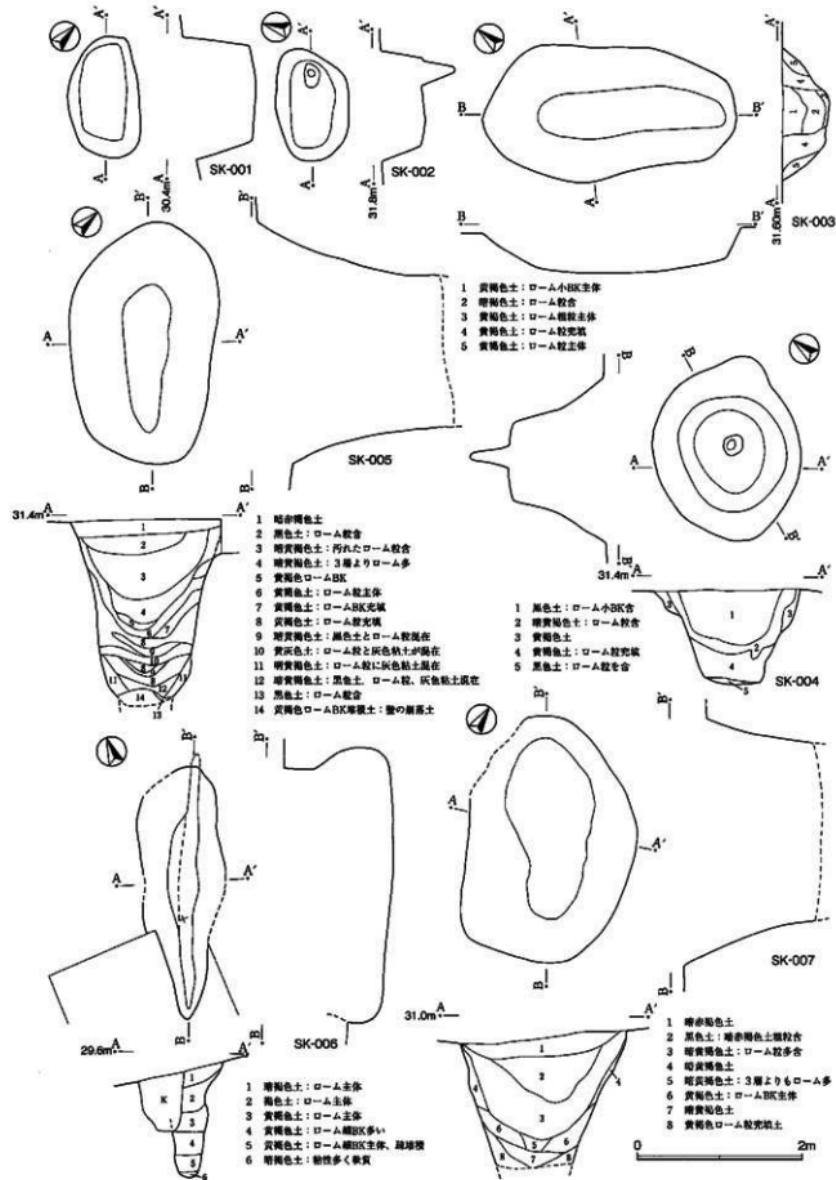
1・2は早期撚糸文系土器である。1は縦方向Rの撚糸文が見られる。胎土に白色礫が多い。2は条縦走RL縄文が見られる。

3～6は早期沈線文系土器である。3は縦区切りに斜方向の2本組沈線が見られる。4～6は横位の太め沈線が見られる。4・5は胎土に石英・長石粒が目立つ。同一個体と思われる。

7～11は早期条痕文系土器である。表裏面が条痕文施文され、胎土には纖維が含まれている。11は尖底となる底部片である。

12～15は中期加曾利E式土器である。12・14・15は微隆起線区画に縄文、無文部を配しており、E IV式になる。13は沈線で区画するもので、縄文は複節のものである。

16～25は後期堀之内式土器である。16～21・25は縄文を地文に曲線文が加えられている。22は直線、23



第9図 繩文土坑

は頸部付近か縄文施文部を横条線で区切っている。24は縄文地に縦条線を施す。25は下部は無文となる。

26~29は縄文のみが施文されている。26は捺りが緩めである。堀之内式になろう。27は口縁で、外縁斜、外面条横走に細かい縄文が見られる。28は内湾しており、口縁部と思われる。29は頸部付近か。これらは加曾利E式になろう。30は加曾利B式の浅鉢形土器破片で屈曲部から体下半部のもので、外面ケズリ痕が残る。

31は加曾利B式の波状口縁深鉢形土器で、口径約29.2cmである。口縁上端短刻列、上部縄文帯、頸部擬縄沈線、胴部緩い連弧条線、浅く施文。胎土には繭をほとんど含まず、軽い土質。

32・33は加曾利B式の波状口縁深鉢形土器で、口径約25.7cmである。口縁上端と頸部擬縄沈線を持ち、上部縄文帯、胴部は曲線区画に斜縄文充填された文様がある。下半部は無文になる。

34~37は縄文を地文に条線文が施文されるもので加曾利B式である。

38は条線下に斜縄文施文されている破片で、31と胎土が近似しており、同一のものだろう。

39は条が横送する縄文のみられるものである。

40・41は弧状条線文施文で、40は31と同一個体である。41は線が明瞭で深い。

#### 土製品（第11図、図版8、第5表）

42~44は不整な形をした土器片錐で、42・43は縄文中期の斜縄文施文、44は沈線文がみられる土器片を用いている。43は切り込みがしっかりしている。

#### 石器（第12図、図版8、第6表）

1は厚みがあり、打製石斧破片と思われる。石材は粘板岩か。両面から加工され、側面側は抉りが入る。途中で折れたものだろう。

2は不整形のホルンフェルス剥片で、若干二次調整痕がある。

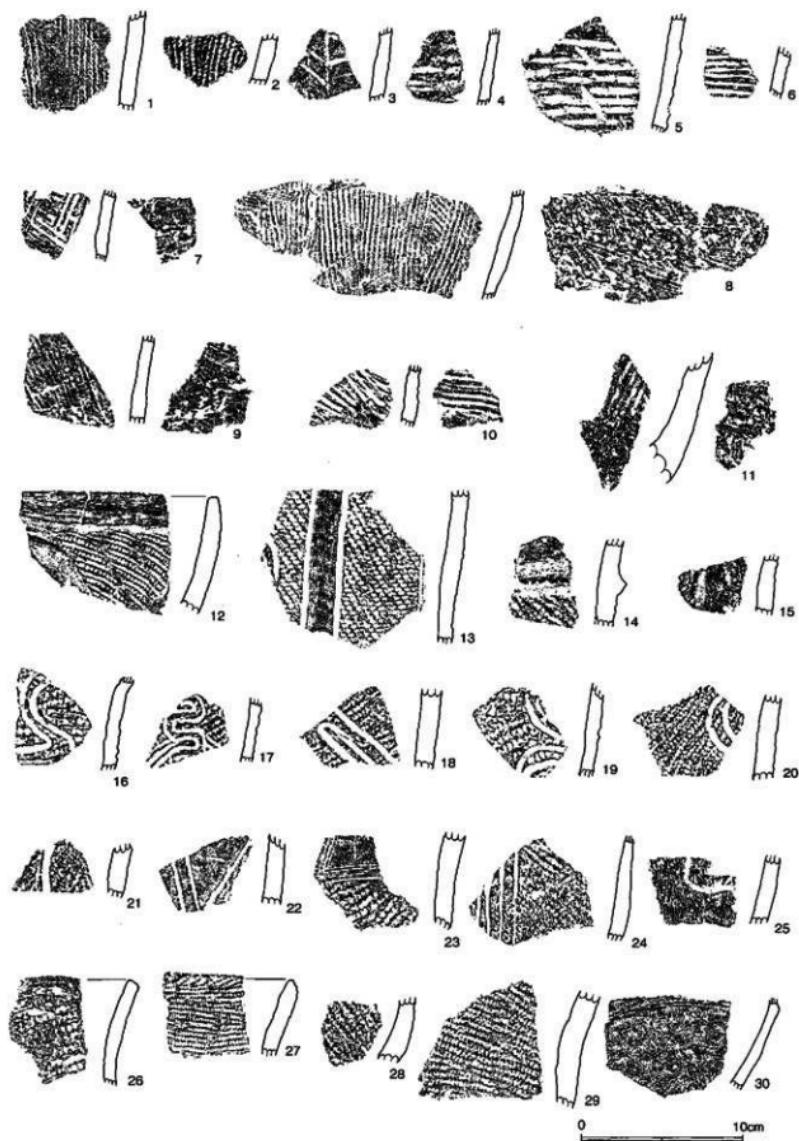
3は流紋岩の円錐で、ひびが若干入り、また一部表面が剥落している。被熱している。

第4表 縄文土器出土量表

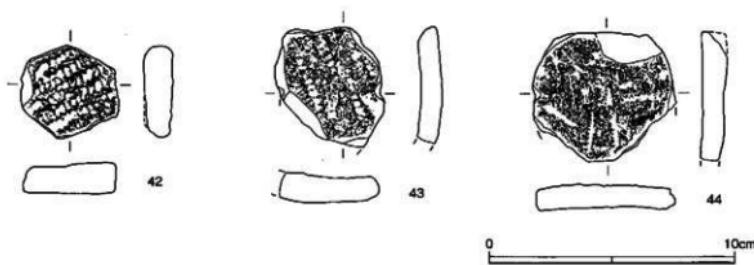
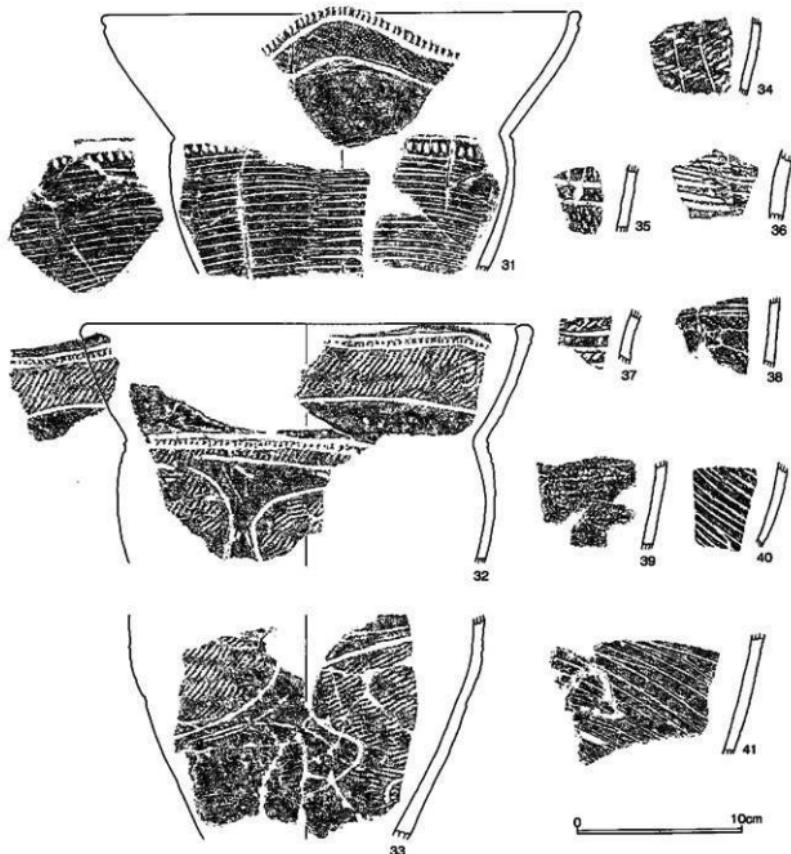
	部系	田下	縄文	織縄新文	前期縄縫	縄文	新文	中期初	中期	後期	土器品	計	その他
SI-001			1				1					2	
SX-001							2			5		7	
SD-001		1									1	2	土器片錐1
7B		3	9						1			13	
7C	1						1		1			3	
7D	1						1		1			3	
8D									1			1	
6E	1						1		3			5	
7E	3					6	5	6	2	1	23	円錐1	
8E						8	9	1	4			22	
6F	1	2				2		3	6	1	15	土器片錐1	
7F		1				2		1	1			5	
6G		2				5		4				11	
7G								4				4	
計		6	10	10	0	0	14	29	0	13	31	3	116 点数
比率		5.2%	8.6%	8.6%	0.0%	0.0%	12.1%	25.0%	0.0%	11.2%	26.7%	2.6%	100%

第5表 土製品計測表

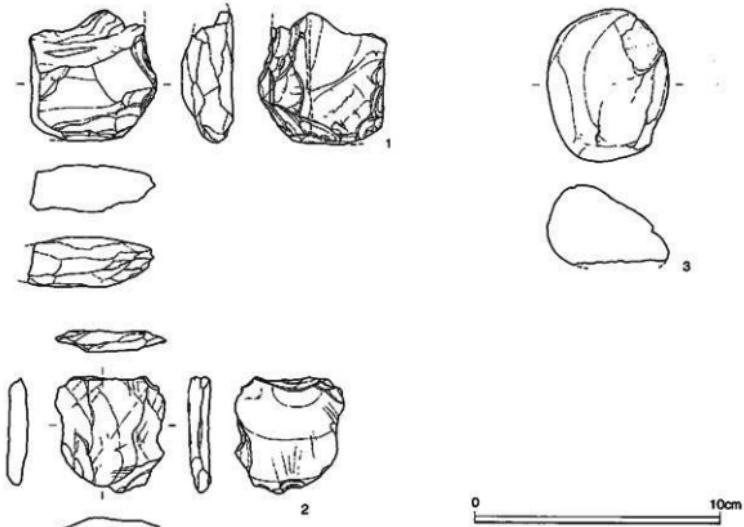
押印	番号	出土地点	遺物番号	器種	計測値 (mm) (g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
11	43	SD-001	1	土器片錐	(4.75)	4.1	1.0	(23.31)	
11	44	7E	1	土器片錐	(5.3)	5.6	0.8	(22.36)	微細砂多い



第10図 グリッド出土土器 (1)



第11図 グリッド出土土器（2），土製品



第12図 グリッド出土石器

第6表 桶文時代石器計測表

探査	番号	出土地点	遺物 番号	器種	母岩	色調	計測値 (mm)(g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
12	1	6F	1	打製石斧	ホルンフェルス	暗灰褐色	55.2	54.1	20.7	63.7	破片
12	2	8E	1	刮削器	粘板岩?	黑灰色	47.4	44.9	9.1	21.3	
12	3	7B	1	器	斑状岩	明橙褐色	63.1	49.8	33.1	117.0	完形破壊? 一部剥離

#### 第4節 奈良・平安時代

##### 検出遺構

SI-001 (第13図、図版5)

調査区西端の谷際でTB58・68グリッドで検出した。平面形は長軸長2.62m、短軸長2.12m（カマド張り出し部0.30mを含む）で、一辺2mほどの小さい方形を呈する。壁は急傾斜し少し住居内側に入り込むので、床面積は狭くなる。長軸方位はN71°E、深さは南壁で0.42mである。床は軟弱であった。

カマドが東壁に設けられていた様で、壁に張り出しがあり、焼土を含む土が堆積していた。袖部は左袖の砂質粘土痕跡が見られるので、カマドが壊されているものと考えたいが、竪穴の覆土中にはカマド砂がほとんど含まれていない。また炉床は確認されなかった。

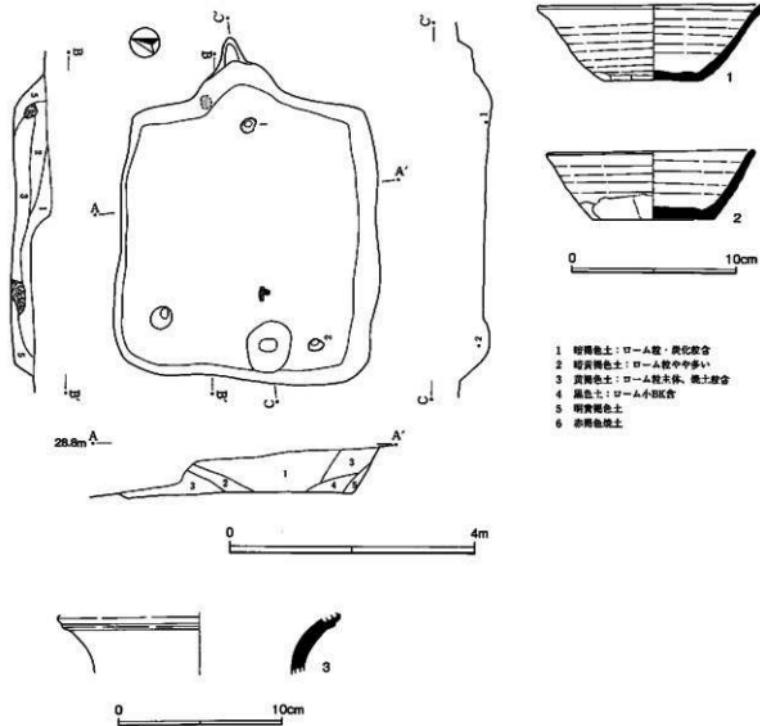
カマドの反対側の壁よりに浅い楕円形の凹み（0.35m×0.42m、深さ0.07m）があり、また西北コーナーに小ピットがあったものの、本格的な柱穴は検出できなかった。

覆土は、上部に暗褐色土、下部には焼土粒混じりの黄褐色土を主体に堆積していた。また部分的に焼土層がみられた。

カマド手前と南西コーナーで、床面から完形の須恵器杯が出土した。土師器、須恵器片各1点が覆土中で出土した。

SI-001出土遺物（第13図、図版8）

1～2は須恵器杯である。1は口径13.8cm、高さ4.7cm、2は口径12.7cm、高さ4.3cm。外側底面付近に回転ヘラケズリと、底裏に手持ちヘラケズリがなされている。胎土に白色礫・雲母を含む。



第13図 奈良・平安時代遺構と出土遺物

第7表 奈良・平安時代土器観察表

探査 番号	番号	遺物番号	遺物 番号	種別	器種	保存率	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	成形・調整	色調	胎土	備考
13	1	SI-001	1	須恵器	壺	完形	13.8	6.1	4.7	外側 内側 ロクロ目	灰色	白・石英 灰石・雲母	
13	2	SI-001	2	須恵器	壺	完形	12.7	7.2	4.3	外側 内側 ロクロ目 底外側 手持ちヘラケズリ	灰色	白・石英 灰石	
13	3	SE	1	須恵器	カメ	破片	-	-	-	内外面 ロクロ目	灰色	白・石英 灰石	

### グリッド出土遺物（第13図、図版8）

3は8Eグリッド出土の須恵器壺口縁部である。現存径17.2cm、口唇を欠く。胎土に白色礫・雲母を含む。上端に隆起線が巡っている。

### 第5節 中・近世

#### 検出遺構

##### SD-001（第14図、図版5）

上層確認トレancheで、7D86グリッド付近と8D14グリッド付近の2箇所で検出された。恐らく両者はつながるものだろう。幅0.7~0.6m、深さ0.5mである。長さは20m以上になることを確認している。断面はU字形を呈する直線的な溝である。SX-01から直角に近く曲がって延びる形になっており、その溝部と接続している可能性がある。畑の境の溝と思われる。

##### SX-001（第14図、図版6）

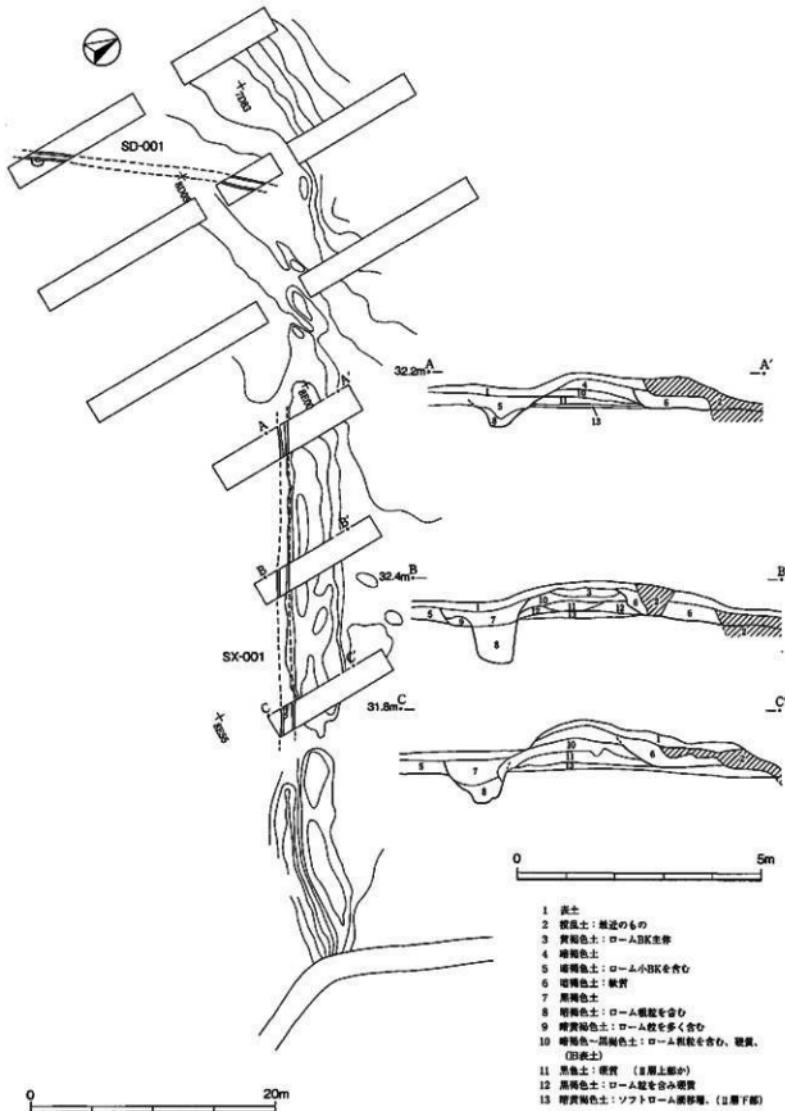
調査区の入り口部の道路脇から谷に向かって西北に延び、8F50から7D75グリッドを結ぶラインで、低い土手として検出された。長軸方位はN61°W。平面形は残存部で幅3.4m~5.0m、高さは0.40mから0.74mである。谷地へ向かって幅が狭く、高さが低くなる。総延長67mほどである。南側に溝を伴う。北側は擾乱が目立つ。溝部は幅0.58m~1.16m、表土下からの深さは0.63m~1.11cm、U字断面を呈する。土鍋の底部片と思われるものが1点、溝内で出土している。

幅2.4m~3.0mで旧表土・地山が残され、その上部に厚さ0.3m~0.4mほどに盛土がのっており、幅が広く低い土手状を形成している。土手の両脇はII層中位までいじられており、かつて耕作されていたことを示すものだろう。南側の溝は表土下から掘り込まれており、その時期は耕作地化より後とみられる。

土手としては低いが、削平されていて本来の高さがなくなっているか。あるいは削り残しの結果、畦状に残ったものに更に盛土され出来たものか、判断に苦しむ。いずれにしても耕作地の境をなしたもので、時期は中世以降のものであろう。

第8表 遺構一覧表

遺構名	種別	地 点	時 期	平 地 形	新 地 形	長 軸 方 位	長 度 (m)	幅 (m)	深 度 (m)	備 考
SI-001	竪穴住居	7B58・68	奈良・平安	方形	逆台形	N71°E	2.62	2.12	0.42	
SK-001	土 坑	7F58・68	绳文	横円形	U字形	N39°W	1.49	0.87	0.81	
SK-002	土 坑	6F55	绳文	横円形	U字形	N74°	1.18	0.59		
SK-003	土 坑	6F53・63	绳文	長横円形	逆台形	N41°	1.08	1.08	0.52	
SK-004	縦 穴	7E78・88	绳文	横円形	逆台形	N40°E	2.21	0.66	1.18	
SK-005	竪 穴	8E32	绳文	横円形	筒形	N45°W	1.04	1.8		
SK-006	竪 穴	7E25・26	绳文	不整長横円形	U字形	N25°E	1.83	2.97	0.58	2m以上 下部調査を中止
SK-007	竪 穴	7E33・93	绳文	不整長横円形	逆台形	N36°W	3.08	1.03	1.03	
SX-001	土 壕	8F50~7D75	中・近世	—	台形	N61°W	3.08	0.18	1.41	
SD-001	溝	7D86・8D14	中・近世	—	U字形	N38°~43°E	2.01	2.06	2m以上 (高さ)	下部調査を中止
SD-001	溝	7D86・8D14	中・近世	—	U字形	N38°~43°E	(20)	0.7~0.6	0.5	



第14図 土壌、溝

## 第3章 小原第2遺跡

### 第1節 遺跡概要

小原第1遺跡と小谷をはさんで東南に位置している。また東に谷を挟んで堀尻第2遺跡が対峙している。平成18年度の路線本体部分4,640mを、平成19年度には代替地部分1,650mを追加調査した(第15図、図版9)。

小原第2遺跡で検出した遺構は、縄文時代陥穴1基、土坑3基、ピット1基、中・近世は溝4条、土坑11基、ピット1基である(第16図、第12表)。土坑類については伴出する遺物がほとんどなく、時期が明確でないものが多いが、溝跡SD-003・SD-004と同方向で重複する土坑は溝とセットになると思われるので、中・近世のものとした。なお遺構は伴わないものの、縄文時代遺物集中地点が北側斜面の肩部に1個所、弥生土器集中区が2個所認められた。また、旧石器時代の遺物、遺構は検出されなかった。



第15図 小原第2遺跡確認調査区



第16図 小原第2遺跡上層調査区と検出遺構

## 第2節 繩文時代

### 検出遺構

#### SK-002 (第17図、図版11)

8J41グリッド付近で検出した。平面形は開口部で長軸2.68m、短軸1.70mの楕円形、底面で長辺1.18m、短辺0.40mでやや胴貼りの長方形を呈する。長軸方位はN60°W、深さは2.04m、床は平坦である。断面は逆台形であるが、下半部は壁が垂直に近く立ち、長方体状に面取りされている。長軸方向で上部がラッパ状に開いている。上部に暗褐色～黒褐色土、中位にロームブロックを主体とする褐色土、下位に黄褐色のハードローム崩壊土が周囲から落ち込むような形で堆積していた。

遺物は出土していない。埋没状況からみて、縄文時代の陥穴と共通する堆積状態であるが、下半部の壁の形成状況は、平らな工具を使わないと、このように平坦にはできないことを考えると、時期的にはもっと新しい可能性もある。

#### SK-006 (第17図、図版11)

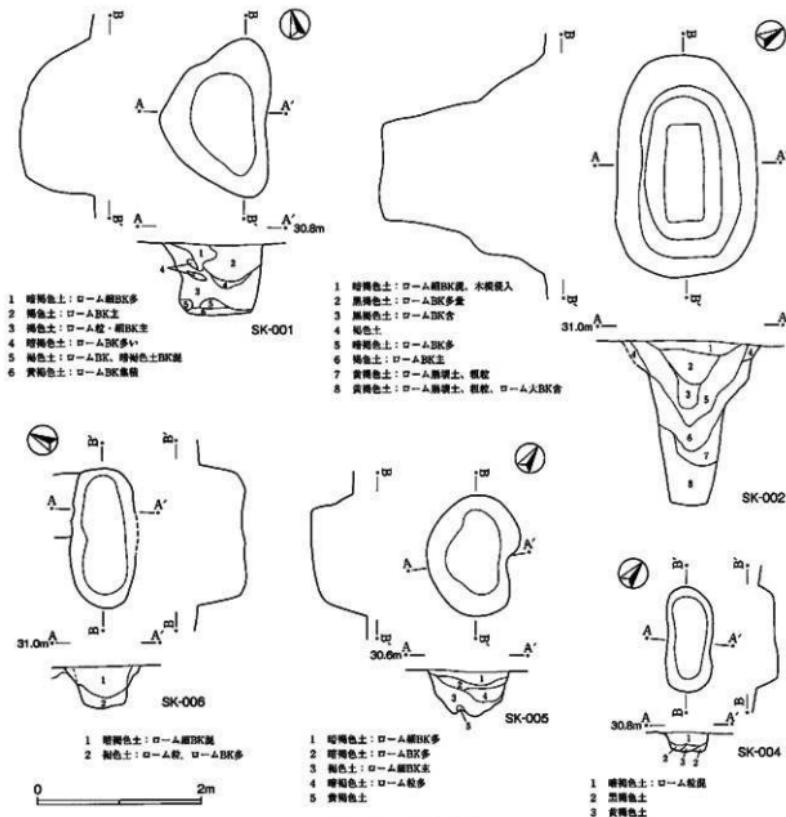
9H16グリッドを中心で検出した。北側が木の根痕に荒らされている。平面形は開口部で長軸1.72m、短軸0.84m、底面で長軸1.45m、短軸0.56mの長楕円形を呈する。長軸方位はN62°E、深さは0.58m、床は

ハードローム面で、若干凹凸がある。断面はU字形になる。覆土は上位に締まりがある暗褐色土、下位に褐色土の堆積になる。

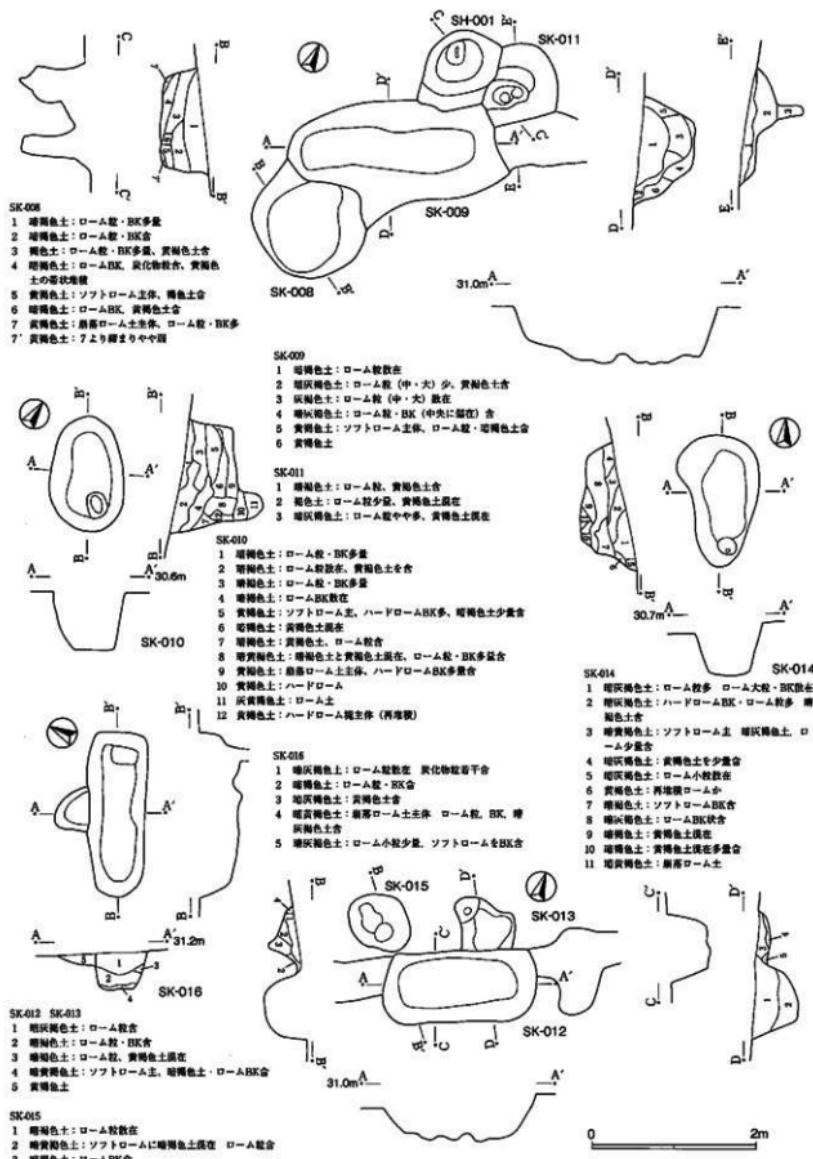
遺物は出土していない。覆土から見て新しいものではなく、縄文時代ないし弥生時代のものであろう。

#### SK-008 (第18図、図版13)

9 G56グリッドで検出した。SK-009と重複している。平面形は開口部で径1.40mほどの円形、底面で長軸1.18m、短軸0.90mの稍円形を呈する。底面での長軸方位はN 2° E、深さは0.60m、断面はU字形になる。床はハードロームでほぼ平らである。床中央にピット状の穴があるが、木根だろう。遺物は出土していないが、縄文時代の遺構であろう。



第17図 土坑 (1)



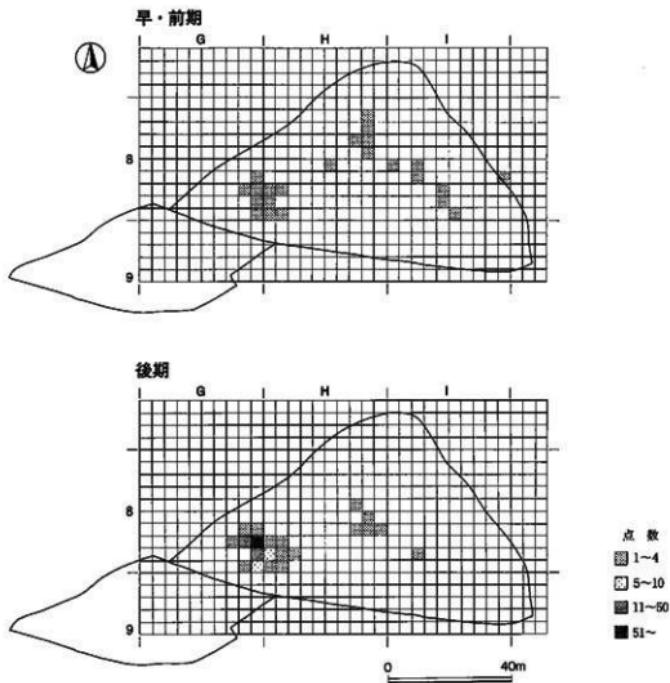
第18図 土坑 (2)

SH-002 (第24図、図版13)

9 G49グリッドで、SD-003と重複して検出された。溝の方が新しい。長軸1.27m、短軸1.00m、深さ0.48mの楕円形を呈する。床は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土で、掘り込み面はIIb層下である。縄文時代の遺構であろう。

遺物集中地点 (第19図、図版10、第9表)

確認調査時に、西側部の8I・8H地区でII層中に磨製石斧や縄文土器のまとまった出土があり、周囲を拡張した結果、の北向きの斜面上に、幅18m×24mの範囲で後期堀之内式を主とした遺物集中個所が検出された。総点数は200点ほどであるが、個体数は多くない。



第19図 縄文時代遺物分布

## グリッド出土遺物

### 縄文土器（第20・21図、図版14・15）

1～4は田戸下層式である。1・2は斜条線、3・4は斜沈線を有し、1・3には縦区切り沈線がみられる。

5は口縁が肥厚し、口唇両端に刻み目を持つもの。胎土に纖維を含む。6は外面に波状櫛齒条線、内面に部分的に条痕文を有する。胎土に纖維を含む。隣接して出土しており、同一個体とみられる。これら田戸上層式か子母口式とみられる。

7は内面に擦痕にが残され、胎土に纖維を含む。田戸下層式であろう。8は内外条痕文を持ち、胎土に纖維を含む。田戸下層式か条痕文系土器とみられる。

9～20は縄文後期縄之内式土器である。

9は斜縄文地に沈線文がみられる。10は斜縄文地に縦の擬縄沈線がみられる。沈線は口唇にも施されている。11は平行沈線間に刺突文が添えられている。12・13は縦沈線があり、沈線の原体は9と同じである。

14は波状口縁の波頂部分で、円形の穴を開け、円環状に加工された突起をなす。太刻み目、円形小刺突文を伴う。口縁以下は縄文地に袈裟懸け沈線文、波状沈線、縦区切りの擬縄沈線文が見られる。

15は半截竹管による縦位の波状沈線を持つ。16～20は同一個体とみられ、袈裟懸け沈線文、渦巻き沈線文を特徴とする。16・17は口縁で、口唇に沈線がある。18は縦区切りの擬縄隆線文がみられる。19・20は口縁文様帯下端の部位で、文様帯区切りは横位隆帶でなされ、縦区切りの擬縄隆線文の下端には環状貼付文が付されている。

21は薄手の口縁部であり、太い沈線で文様が描かれ、細かい斜縄文を充填し、その間を磨消するもの。晩期安行Ⅲ式とみられる。

22～31は斜縄文施文されている。22は口唇外削ぎ、23～25は同一個体とみられ、口唇円頭で外反する。26は22と同様の口唇で、口径20.0cmになる。27は22の下部の方とみられ、条が横走する。28は外反するもので、縄文は粗い。内面のミガキが目立つ。29は縄文は拂りが緩く、23～25のものに近い。30・31は26等と同一とみられる。縄文の条は横走気味で、胴下半は無文になっている。

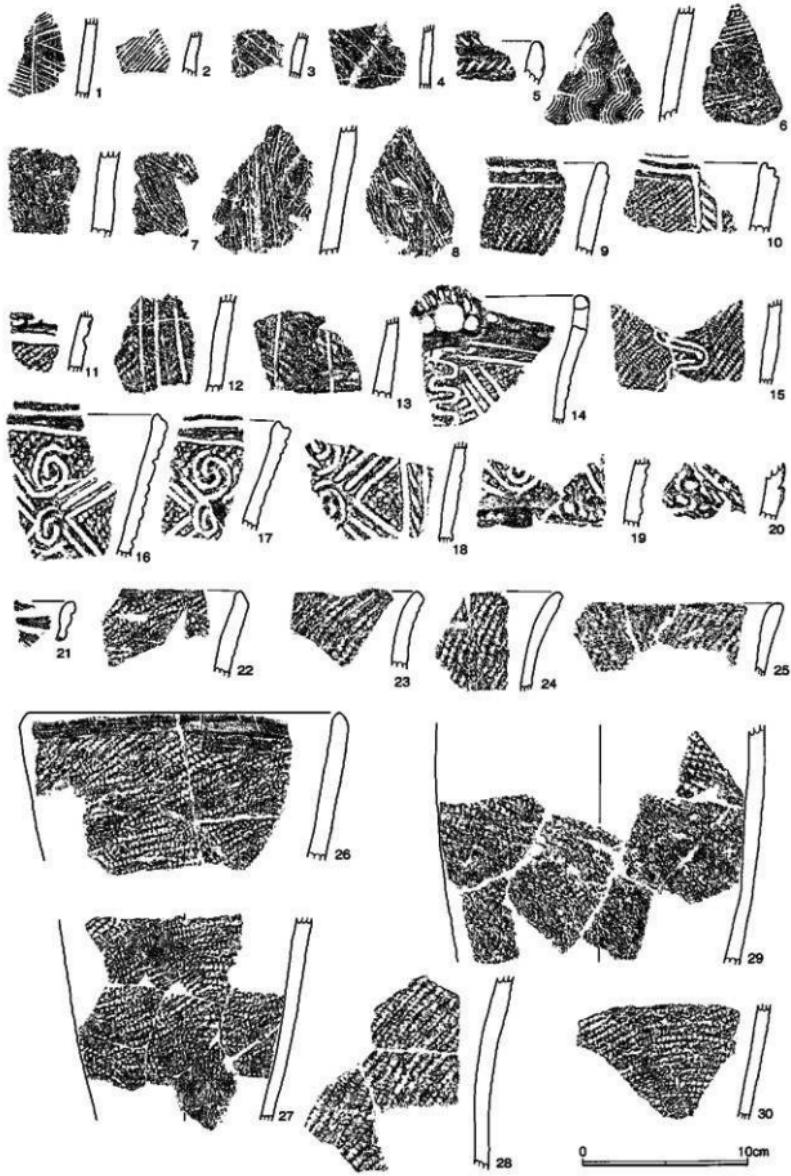
32～37は平底の底部である。底板から間無しに胴が外傾するものが多い。34は筒形に直立する。

### 石器（第21図、図版15、第10表）

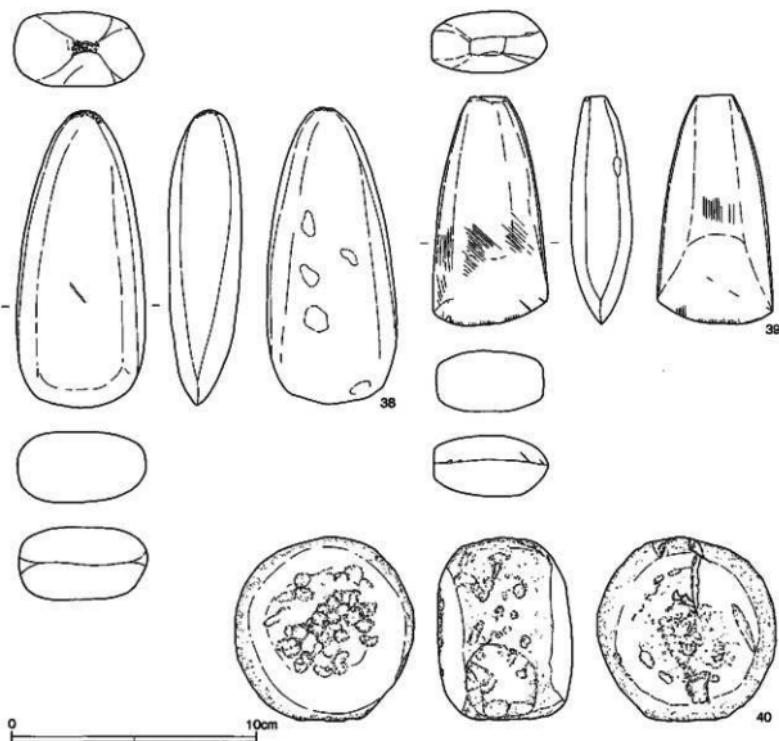
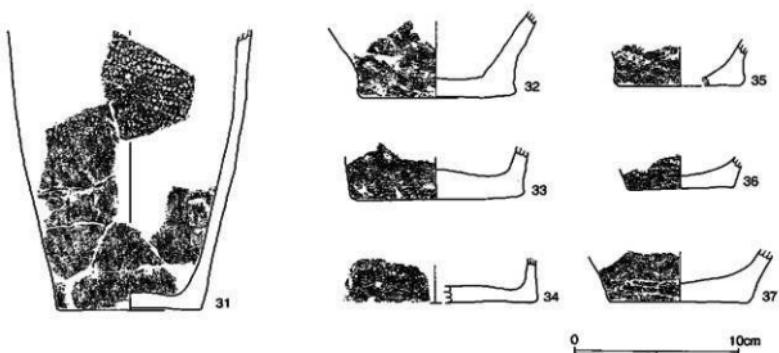
38は砂岩製の蛤刃の石斧で、長さは12.1cmほどである。平面は涙滴形、縦断面流線的な楔形、横断面梢円形をなし、全面がよく研磨されている。刃先にはわずかに細かい擦痕があり、基部端には敲打痕がみられる。

39は緑色凝灰岩の石斧で、長さ9.4cmで三角形の握形に近い形をしている。よく研磨されており、基部と側面に平らな面が形成されている。表面と刃部には細かい擦痕がある。

40は安山岩の磨石で、径7.5cm、厚さ5.6cmをなす。側面は低い六角柱状に側面が面取りされ、その各面と礫の裏表両面とも敲打・磨擦され、摩滅し、かつ敲打による細かい凹みが多数残されている。



第20図 グリッド出土縄文土器（1）



第21図 グリッド出土縄文土器（2），石器

第9表 土器出土量表

	田下	条文	縦縞無文	前期縦縞	無文	中期	後期	晩期	弥生	計	その他
B H	0	1	-	0	11	0	181	0	8	301	
B I	1	1	-	1	0	13	0	21	1	185	223
9 I	0	0	-	0	0	0	0	0	14	14	
B J	4	0	-	0	3	0	1	0	37	45	
合計	5	2	-	1	27	0	203	1	244	483	点数
比率	10%	0.4%	-	0.0%	5.6%	0.0%	42.0%	0.2%	50.5%	100%	

第10表 石器計測表

探査区番号	番号	出土地點番号	遺物番号	器種	母岩	色調	計測値 (mm) (g)			備考
							長さ	幅	厚さ	
23	38	8I78	2	磨製石斧	砂岩	灰色	121.3	52.7	29.9	306.7 完形
23	39	8I81	2	磨製石斧	緑色凝灰岩	灰綠	93.7	46.6	25.0	179.2 完形
23	40	8I41	1	磨石	安山岩	灰色	75.2	55.5	73.0	436.2 完形

### 第3節 弥生時代、奈良・平安時代

#### 弥生時代遺物集中地點（第16図、図版11）

確認調査の際に、表土直下で弥生式土器のまとまった出土があり、周囲を拡張した結果、2個所での集中箇所（遺物集中地點1、遺物集中地點2）が検出された。

遺物集中地點1は調査区中央、台地先端部にかけての箇所で、8I49を中心とした、南北約20m、東西約14mの範囲で81点が出土した。図示した土器のうち1～12・14・15・18・26が該当する。

遺物集中地點2は遺跡西側の台地縁辺部で、8I90グリッド付近でと、8I91・9I01グリッド付近の2箇所でブロック状に172点を検出した。後者は約150点と濃密な出土である。13・16・17・19～25が該当する。

#### 弥生時代遺物集中地點出土土器（第22図、図版16）

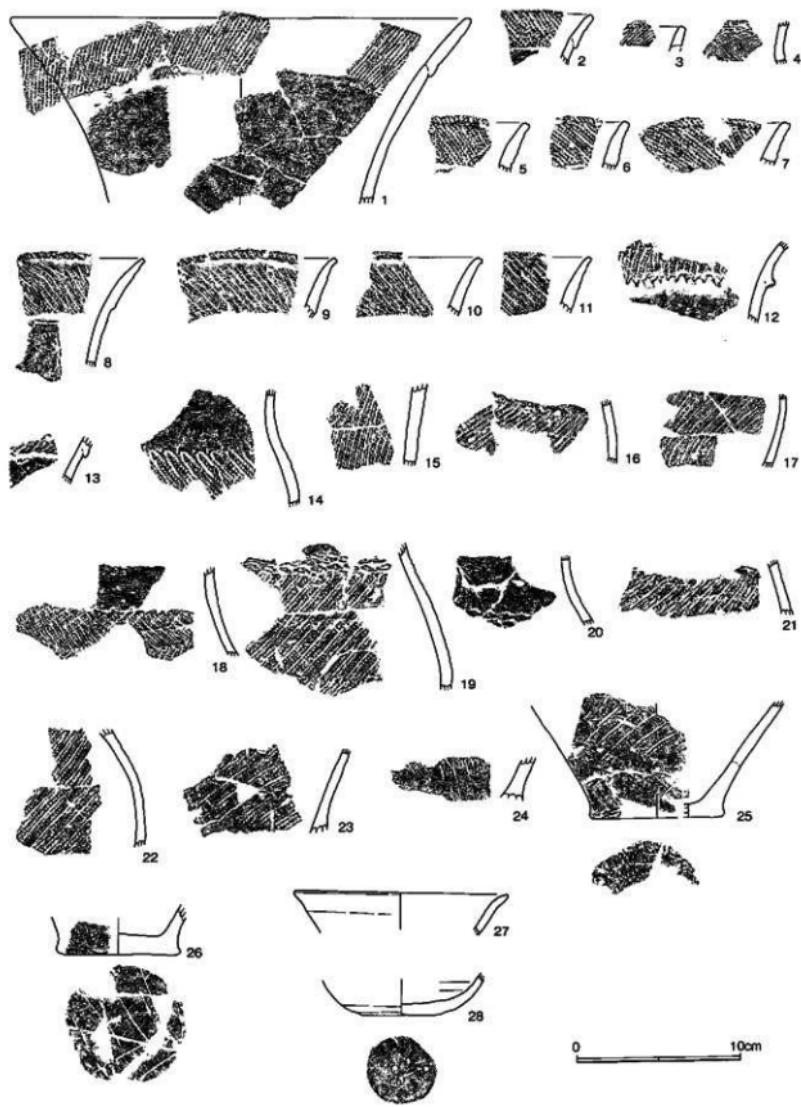
1～13は複合口縁の口縁部である。1は口径は28.0cmほどで、口縁上に斜縞文を持ち、頸部が無文である。朝顔形に開く器形で、壺形土器になろうか。2も口縁上に斜縞文を持つものである。3は細かい斜縞文施文のもので、口唇にも施文されている。4は3の胴部で、羽状縞文と結節文がみられる。5～7は口唇にも施文されている。8～11は口唇にも施文されているもので、附加条縞文である。頸部は無文になる。12は口縁折り返し部に刺目が入る。13は折り返しの段がきつい。胎土には砂の含有がほとんどなく、16・17と同一であろう。

14～22は斜縞文施文の胴部である。14は附加条縞文で、端部が施文されている。15は附加条縞文かもしれない。16・17は同一個体で細かい附加条縞文を持つ。また、端部が施文されている。18は頸部から肩部にかけてのもので、羽状縞文と縄端部が施文されている。19～22は同一のもので、壺形土器になろう。頸部は無文、肩部を結節文で区切り、附加条縞文を施文している。胎土には砂の含有が少ない。

23～26は底部及び付近の部位ものである。23～25は同一のもので、附加条縞文を持つ。底裏に木葉痕がある。胎土には砂の含有が少ない。26は木葉痕を持つ底部である。

#### グリッド出土奈良・平安時代土器（第22図、図版15）

27はロクロ整形の土器器杯で、口径はで13.1cmある。底裏には糸切り痕が残されている。胎土は砂の含有が少ない。



第22図 グリッド出土弥生土器、土師器

## 第4節 中・近世

### 検出遺構

#### SK-001 (第17図、図版11)

9 J25・26グリッドで、SD-001に隣接して検出した。平面形は開口部で長軸1.90m、短軸1.50mの不整楕円形（涙滴形に近い）、底面は一回り小さくなる。長軸方位はN90°、深さは0.86m、床は浅い皿状を呈している。断面はU字形になる。

覆土はロームブロックを多く含む、一括で埋め戻されたような土であった。遺物は出土していない。時期は中世以降であろう。

#### SK-004 (第17図、図版4)

8 I81グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸1.29m、短軸0.48mの、底面で長軸0.99m、短軸0.40mの不整楕円形を呈する。長軸方位はN43°W、深さは1.20m、床は平坦であり、断面は逆台形になる。

覆土は暗褐色土が主で、埋め戻された土だろう。遺物は出土していない。中世以降のものと思われる。

#### SK-005 (第17図、図版11)

8 I71グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸1.48m、短軸1.27m、底面で長軸1.05m、短軸0.71mの不整楕円形を呈する。長軸方位はN37°W、深さは0.55m、床は凹凸がある。断面は逆台形になる。

覆土は褐色～暗褐色土が主で、埋め戻された土だろう。遺物は出土していない。中世以降のものと思われる。

#### SK-009 (第18・20図、図版13)

9 G56・57グリッドで検出した。SD-003、SK-007・08、SH-001と重複している。平面形は開口部で長軸1.60m、短軸1.25m、底面で長軸2.10m、短軸0.55mの長楕円形を呈する。東側でSD-001に接続する長軸方位はN68°E、深さは0.69mである。断面は逆台形になる。床はハードロームであるが、洗濯板状に段がつく。

覆土は上部は暗褐色土、下部には灰褐～暗灰褐色土がみられた。遺物は出土していない。

#### SK-010 (第18図、図版13)

9 G47グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸1.39m、短軸0.90m、底面で長軸1.04m、短軸0.34mのほぼ楕円形を呈する。長軸方位はN35°W、深さは0.82m、床はほぼ平坦、壁は垂直に近く、断面形が逆台形になる。南端に深さ0.32mの小ピットがある。

覆土は暗褐色土主体で、床面上に黄褐色土の堆積がある。遺物は出土していない。

#### SK-011 (第18図、図版13)

9 G57グリッドで検出した。SD-003、SK-007、SH-001と重複している。平面形は開口部で長軸0.98m、短軸0.94mの円形で、皿状に凹む。底面は他遺構と切り合っているが、長軸0.70m、短軸0.48mの楕円形を呈する様である。底面での長軸方位はN44°E、深さは0.35m。ピットは径0.24mほどで、0.33mの深

さがある。

覆土は上層に暗褐色土、下層が褐色土になる。SD-001と分層はできなかった。遺物は出土していない。溝に伴う可能性が高い。

#### SK-012 (第18・24図、図版13)

9 G48グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸1.90m、短軸0.80m、底面で長軸1.40m、短軸0.60mの隅丸長方形を呈する。長軸方位はN69°E、深さは0.51m、床はハードロームで、洗濯板状に凹凸がつく。断面は逆台形になる。

覆土は暗褐色～暗灰褐色の土である。遺物は土師器片とチャート礫片が1点ずつ出土した。

#### SK-013 (第18図、図版13)

9 G48グリッドで、SD-003の北側に接して検出した。平面形は開口部で長軸0.87m、短軸0.86mの不整円形を呈する。深さは0.16m、U字形断面をなす。床は皿状である。

覆土は暗褐色土が主体で、床面上に暗黄褐色土がみられた。北西側に小ビットを有する。遺物は出土していない。

#### SK-014 (第18図、図版13)

9 G56グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸1.64m、短軸0.98mの不整楕円形、底面長軸1.12m、短軸0.50mの楕円形を呈する。長軸方位はN 6°W、深さは0.58m、床はハードロームでわりと平坦である。南端に小ビットがある。断面は逆台形形になる。遺物は出土していない。

#### SK-015 (第18図、図版13)

9 G48グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸0.82m、短軸0.68m、長軸方位N70°W、深さは0.20mの楕円形をなす。壁の立ち上がりは緩やか。南西側は深さ0.15mの小ビットがある。

覆土は暗褐色土、黄褐色土が積層している。遺物は出土していない。

#### SK-016 (第18図、図版13)

8 H31グリッドでSD-003の南側に隣に平行して検出した。平面形は開口部で長軸2.03m、短軸0.53m、底面で長軸1.65m、短軸0.42mのほぼの隅丸長方形を呈する。北側に浅い張り出しがある。長軸方位はN67°Eで、深さは0.48m、床はハードロームで、若干凹凸がある。断面はU字形になる。

覆土は暗褐色系の土が主体で、床面直上に暗黄褐色土があった。遺物は出土していない。

#### SH-001 (第18・24図、図版13)

9 G56グリッド、SD-003の東端部、SK-009等と接した個所に位置する。長軸1.06m、短軸0.77mの楕円形を呈する柱穴状のビットである。床まで深さ0.70mで、北側に小ビットを持つ。

遺物は出土していない。中世以降のものだろう。

#### SD-001 (第23図、図版12)

9J25から9J36にかけて通る、3個所途切れる溝である。東側は調査区外になり、続きが不明である。最大幅1.10m、最深0.20m、長さは東から西へ2.44、2.60m、2.31mで、西端部は北側にL字に向け張り出す。断面はU字形になる。

覆土は暗褐色土や黒褐色土で、締まりのない土であった。遺物は出土していない。中世以降のものだろう。

#### SD-002 (第23図、図版12)

9I01から8H99にかけて検出された。L字形に曲がる溝で、西側では一旦途切れ、SD-03に続くようである。軸方位は東側がN27°W、西側がN66°E程度、幅は0.61m～0.91m、平均で0.67m程度あり、深さ0.18m～0.41mのU字形断面をなす。総延長は17mほどまで確認している。東側に浅い直角に枝分かれした短い溝がある。覆土は、元々の暗褐色土があったものが、さらに幅狭く掘り直しされていた。

覆土出土遺物はないが、近接して近世以降の徳利が出土している。

#### SD-003 (第23・24図、図版13)

上層確認調査の際に、北側の谷に面した台地肩部に検出した。8H73から9G56を結ぶラインで、直線的に伸びる。前年度調査で検出したSD-002の末端部付近からが始点となり、SK-009で一旦途切れる。

幅0.50～0.70m、長軸方位はN63～72°E、深さ0.17～0.28m、断面はU字形ないし逆台形をなす。総延長約51mである。ピットと椿円形や不整形の落ち込みが見られた。覆土は暗灰褐色系の土が主体である。遺物は確認面で付近から土師器が少量出土しているが、本体覆土出土は貝破片が1点のみであった。

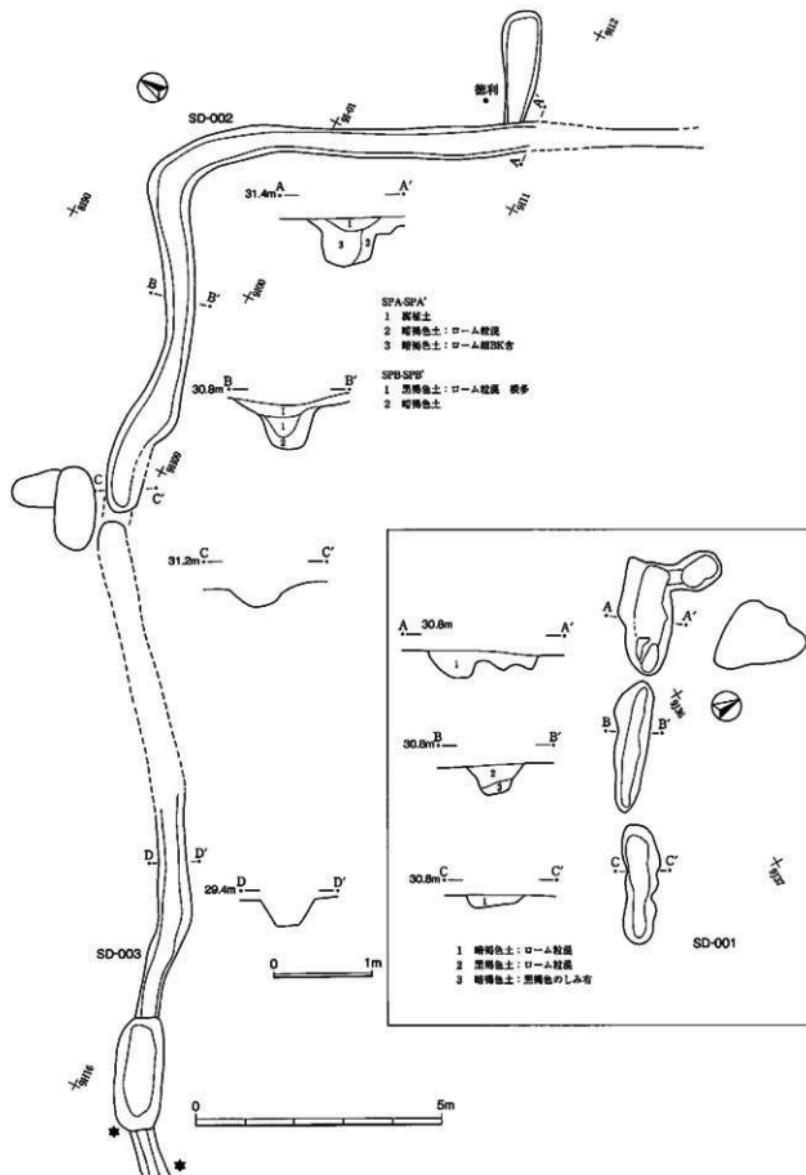
これらの落ち込みが溝に伴うのか、先後関係があるのか、土層観察では微妙なところであった。同じようなプランのSK-009やSK-012も溝本体と重複をしていることをみると、何らかの関連性がうかがえる。

#### SD-004 (第24図・図版13)

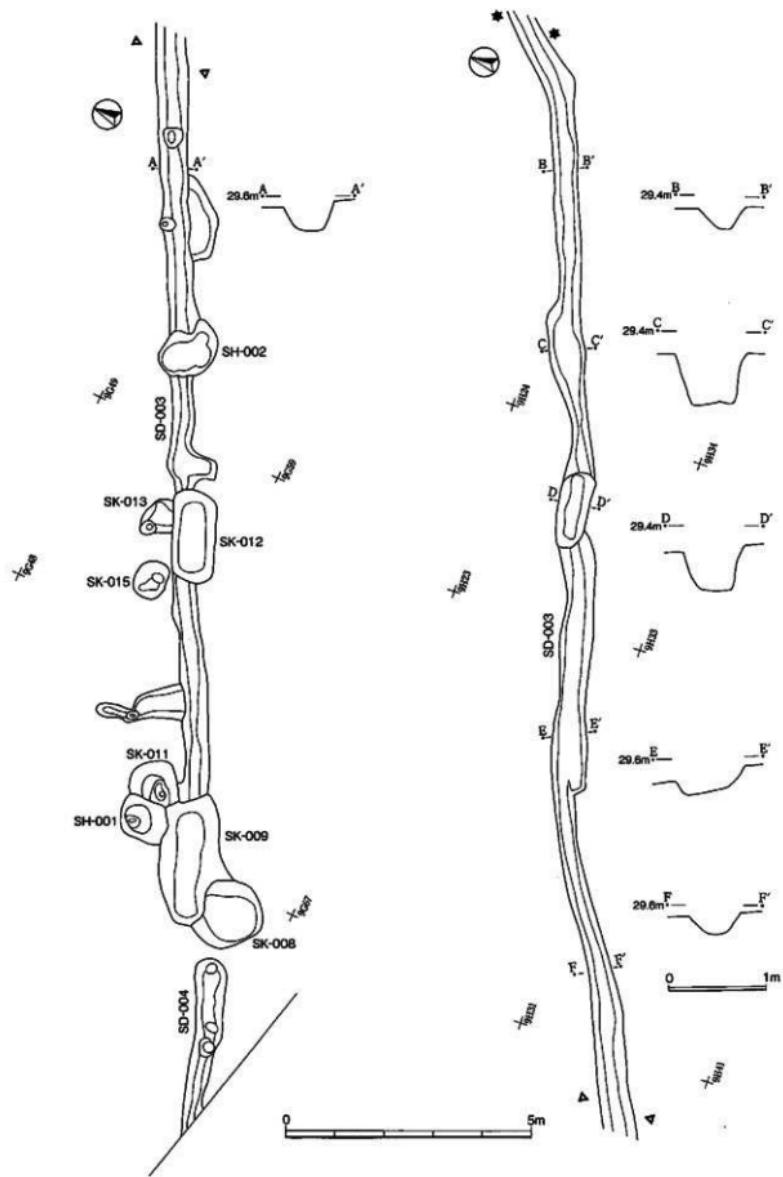
SD-003の西側にある。幅0.66～0.34m、長軸方位はN74°E、深さ0.20～0.31m、断面はU字形をなす。長3.5mほどを確認している。底面に浅い小ピットを伴う。SK-008・07、SD-003とはわずかに途切れているが、方向や形態からみて、同じ性格のものであろう。

#### グリッド出土遺物 (第23・25図、図版15、第11表)

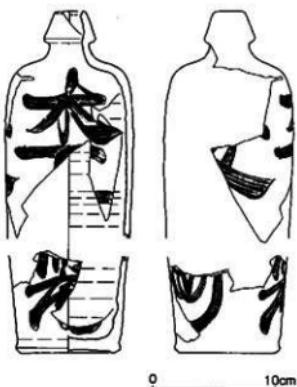
1はSD-003の脇で出土した。磁器のいわゆる貧乏徳利で、外面に鉄釉で文字が書かれている。胴部最大径10.4cm、器高約28cmである。外面は平坦、内面はロクロ目が顕著である。釉は底裏以外にかけられている。書かれている文字は木下酒店という店名と、品名であろうか、その側面にも文字(「政」か?)と円で囲ったマークの様なものがある。美濃の高田焼で、明治時代前後のものであろう。



第23図 溝跡（1）



第24図 溝跡 (2)



第25図 溝脇周辺出土陶器

第11表 土器観察表

調査番号	出土地点	遺物番号	種別	器種	遺存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形・調理	色調	地土	備考
24 27	8L39	12	土器部	坏	破片	13.1	-	(2.5)	内外面 ロクロ目底、体部 細縞ケズリ	内外面 黄茶褐色	新造 織ほど んど含まず 同一	
24 28	8L39 8JS2	123	土器部	坏	破片	-	4.2	(3.2)	底裏面 糸切り痕(四 軒)	内外面 黄茶褐色	内外面 黄茶褐色 剥けがある	
25 1	9I01	9	陶器	便利	2/5	(2.6)	8.5	28.0 (18.6) (7.9)	内外面 ロクロ目底、	内外面 灰白色	織密	高田焼 文字書き

第12表 遺構一覧表

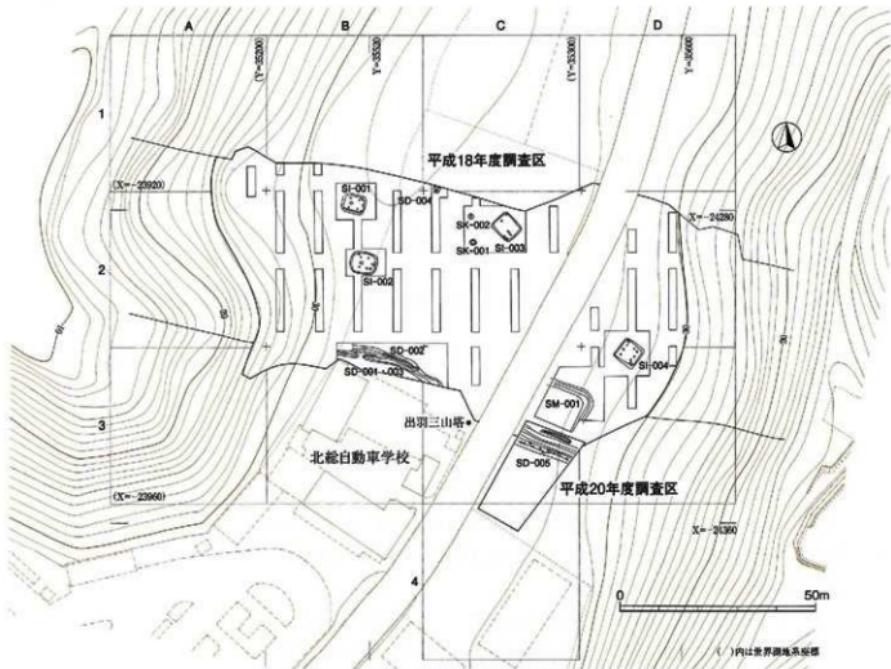
遺構名	種別	地點	時期	平面形	断面形	基盤方位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
SK-001	土坑	9I25・26	中・近世	不整縁円形	U字	N90°	1.9	1.5	0.86	
SK-002	陷穴	8J41	绳文?	長方形	逆台形	N60°W	2.68	1.7	0.22	
SK-004	土坑	8I81	中・近世	楕円形	逆台形	N43°W	1.29	0.48		
SK-005	土坑	8I71	中・近世	不整縁円形	逆台形	N37°W	1.48	1.27	0.55	
SK-006	土坑	9H16	绳文	長椭円形	U字形	N62°E	1.72 1.45	0.84 0.56	0.58	
SK-008	土坑	9G56	绳文	(上)円形 (底)楕円形	U字形	N2°E	1.4 1.18	0.9 1.25	0.6	
SK-009	土坑	9G56・57	中・近世	短縁円形	逆台形	N68°E	1.6 2.1	0.55 0.69		
SK-010	土坑	9G47	中・近世	楕円形	逆台形	N35°W	1.39 1.04	0.9 0.84	0.82	
SK-011	土坑	9G57	中・近世	円形 楕円形		N44°E	0.98 0.7	0.94 0.48	0.35	
SK-012	土坑	9G48	中・近世	隅丸長方形	逆台形	N69°E	1.9 1.4	0.8 0.6	0.51	
SK-013	土坑	9G48	中・近世	不整縁円形	U字形		0.87	0.86	0.16	
SK-014	土坑	9G56	中・近世	不整縁円形	逆台形	N6°W	1.64 1.12	0.98 0.5	0.58	
SK-015	土坑	9G48	中・近世	楕円形		N70°W	0.82	0.68	0.2	
SK-016	土坑	8H31	中・近世	隅丸長方形	U字形	N67°E	2.03 1.65	0.53 0.42	0.48	
SH-001	ピット	9G56	中・近世	楕円形	筒形		1.06	0.77	0.70	小ピット有
SH-002	ピット	9G49	绳文	楕円形	筒形		1.27	1.00	0.48	
SD-001	溝	9I25・9J36	中・近世	-	U字形	N56°W	8.0	1.1	0.2	
SD-002	溝	9I01～8H99	中・近世	-	U字形	東側N27°E 西側N66°E	(17.0)	0.61～0.91	0.18～0.41	
SD-003	溝	8H73～9G56	中・近世	-	U字形～逆台形	N63°～72°E	50.3	0.5～0.7	0.17～0.28	
SD-004	溝	SD-003の西側	中・近世	-	U字形	N74°E	(3.5)	0.6～0.34	0.2～0.31	

## 第4章 堀尻第2遺跡

### 第1節 遺跡概要

印旛村瀬戸と吉高地区の境、北総自動車学校の北隣りにあたり、遺跡の中央を国道464号線が縦断している。西側は松虫川の支谷、東側を印旛水路側からの支谷が抉り込み、馬の背状になった標高32mほどの台地となっている。現状は砂利敷きの資材置き場、及び山林であった。西側の谷を挟んだ対岸は小原第1遺跡、東側の谷を下流に0.7kmの台地上に、立田台第2遺跡が位置する。

調査は平成18年度に主要部分の5,485m<sup>2</sup>、平成20年度に追加の314.64m<sup>2</sup>に対し行った。検出した遺構は縄文時代のものは、土坑3基で、2C00グリッド周辺、調査区北縁の細長い台地ほぼ中央の位置で検出された。また遺構外のグリッド出土遺物では、2C区トレンチ内に縄文早期末の条痕文系土器が集中して出土している(第13表)。弥生時代では西側斜面に近い位置に後期の竪穴住居跡が2軒みられた。古墳時代前期では、和泉期中頃の竪穴住居跡が東半部に2軒みられた。奈良時代では、南東部に8世紀後半の須恵器を出土した方形周溝状遺構が1基検出された。また、中・近世では、台地を横断するような形で溝跡が走る状況が確認された(第26図)。



第26図 堀尻第2遺跡上層調査区と検出遺構



第27図 堀尻第2遺跡下層調査区

なお下層の確認調査では旧石器時代の遺構・遺物は検出されなかった（第27図、図版17）。

## 第2節 繩文時代

### 検出遺構（第26図、第21表）

SK-001 (第28回 図版18)

2C32・33グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸1.56m、短軸1.24mの楕円形、底面で形約1.2mのほぼ円形を呈する。長軸方位はN84°E、深さは0.90m、床はハードローム中にあり、平坦で良好である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、上部は若干聞く。断面は円筒形になる。

### SK-001出土遺物（第28図、図版24）

1～3は表裏条痕文で繊維を含む条痕文系土器で、1は尖頭口唇をなす。

4・5は前期織維土器である。4では腹縁文を、5は横位羽状細文を持つ。

6～8は隆起継区画内に細文を充填する文様がみられる厚手のもので、細文中期の加曾利E4式である。

6・7は波状のキャリバー方深鉢の口縁部、8は胴部である。

形態の類例からみて、縄文中期以降の貯蔵穴であろう。

#### SK-002 (第28図、図版18)

Ⅲ層上面での上層遺構検出時に、2C13グリッドで底部付近の土器を伴って検出された。平面形は開口部で長軸1.18m、短軸0.80mの梢円形を呈する。長軸はほぼ南北を指す。深さはソフトロームから8cmと非常に浅い。

遺物は加曾利B式の粗製土器底部が中央部床面から正立の状態で出土した他、口縁部破片がやや浮いた状態で西側で出土している。

#### SK-002出土遺物 (第28図、図版24)

1・2は外傾する口縁部で、口端に紐線文を有し、縄文地に連弧条線文が施されている。3は頸部で、くびれ部に紐線文を有する。4は胴部の肩に近い部分である。

5は胴下半から底部にかけての復原個体で、バケツ形に聞く器形をなす。現高12.5cm、底径は4.9cmである。外面はミガキがなされており、上端部に縄文がわずかに施文がみられる。

非常に浅い土坑だが、もともとはⅡ層上面から掘り込まれ、底面に完形土器が配されていたものが、後世の削平を受け、底部付近を残し消失したものだろう。用途としては貯蔵用の可能性が高い。

#### SD-004 (第29図、図版18)

1C90グリッドを中心に、南北に長い遺構として検出した。調査当初、溝跡としたが、土坑に変更する。北側が調査区外にかかるので、平面形は長軸2.65m、短軸1.44mの舌状形をなし、長軸方位はN73°W、深さは12cm、断面はU字形を呈する。床面には柱穴が3か所検出されている。

遺物が浅い覆土にもかかわらず、早期条痕文系土器13点、前期織維土器3点、中期土器6点、後期土器40点の計62点の土器が出土した。

土坑の一部かとも思われるが、浅い割には遺物が豊富であり、柄鏡形住居の舌状に突出した部分の可能性もある。出土遺器中で最も時期が新しく、出土量も最多な加曾利B式に所属するものだろう。

#### SD-004出土遺物 (第29図、図版24)

1から6は紐線文を有する土器で、縄文地に弧条線を施す。後期加曾利B式である。

1は、口径24.6cm、軽い波状口縁をなす。内面は上端に太い沈線が巡る。

2は胴下半から底部にかけてのもので、バケツ形に聞く器形をなす。上部に縄文地に弧条線の文様があり下半は紐ミガキがなされている。現高16.2cm、底径6.0cmを測る。

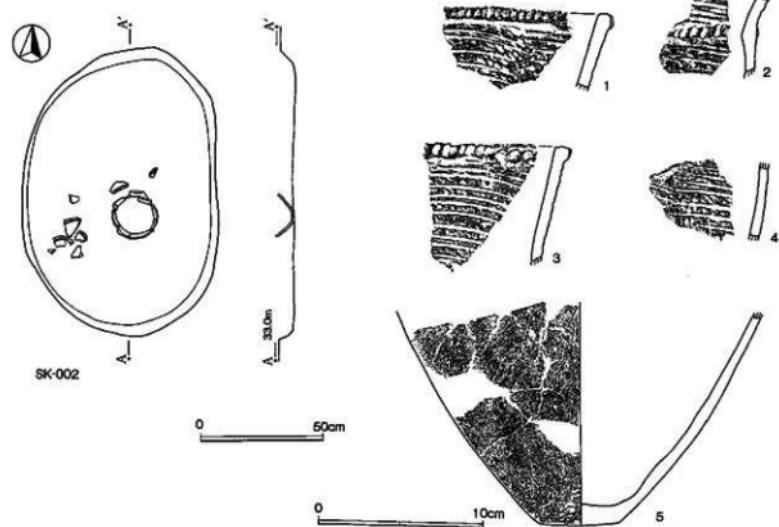
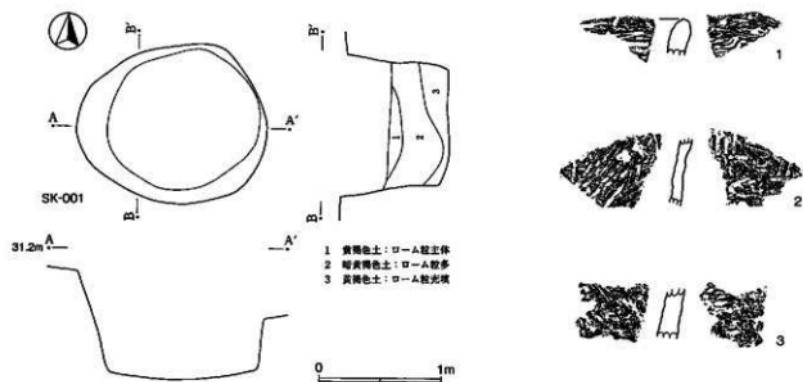
3は口縁部片、4～6は胴上半部の破片である。

9は早期条痕文系土器で、外面は無節羽状縄文、内面には貝殻条痕文がみられる。

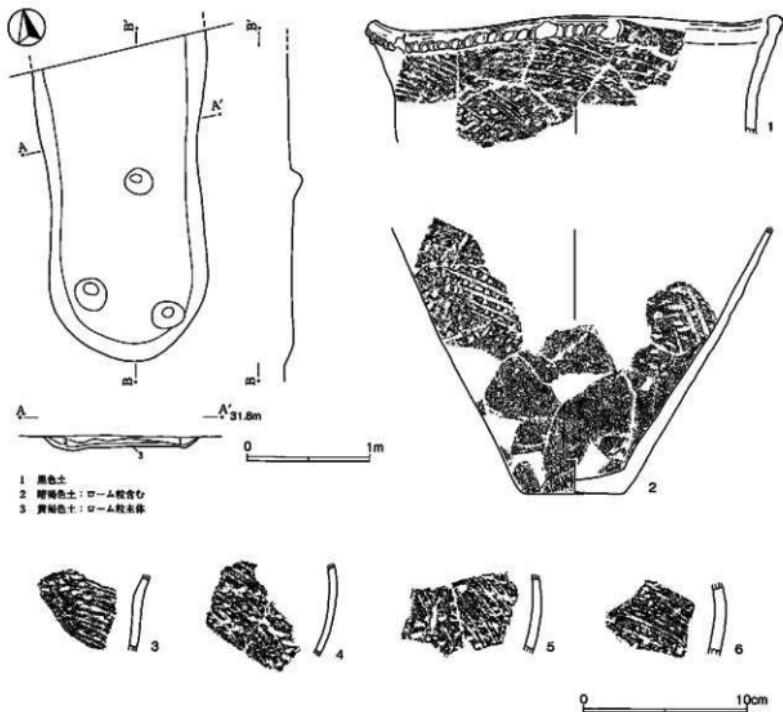
#### グリッド出土遺物

##### 土器 (第30・31図、図版25・26、第13表)

##### 早期前半土器 (1～12)



第28図 土坑 (SK-001, SK-002)



第29図 土坑 (SD-004)

1は縄文早期撚糸文系土器と思われる。太めの撚糸文が縦施文されている。

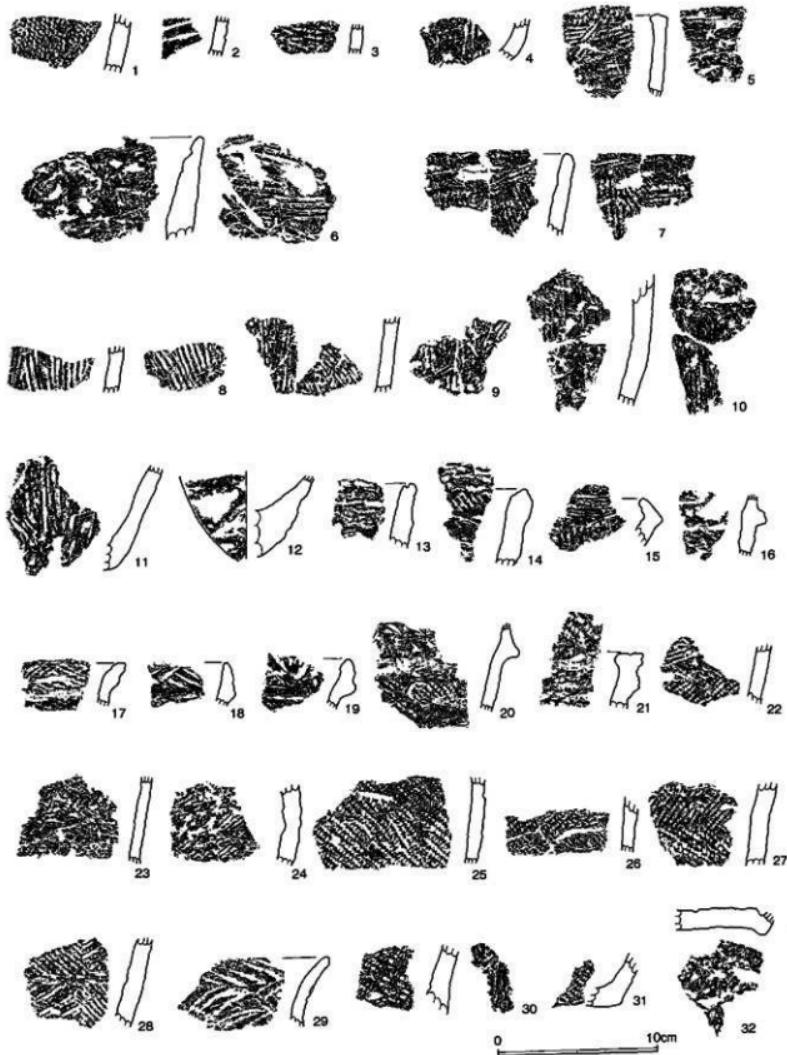
2は早期沈線文系土器で、縦位太沈線、斜位二本組沈線、交点刺突文がみられる。3は押し引き貝殻文を持つ。4は外に条痕文の見られる丸底のもので、胎土に若干纖維が認められる。

5～11は表裏にアナグラ族貝殻の条痕文が施文されたもので、胎土に若干纖維を含んでいる。5～7は口縁部で、5は角頭で口唇上面にも施文を受けている。6は尖頭で、器厚が胴部から急に口唇に向かって減じている。7は円頭をなす。8～10は胴部、11は尖底部である。12は胎土に纖維を含む、無文の尖底部片である。これらは早期条痕文系土器である。

#### 早期末から前期纖維土器 (13～32)

13は円頭口唇で、上端と口唇に沈線文がみられる。14は口縁上端に斜撚文ないし斜位条痕文が、口唇には沈線文施され、尖頭状を呈している。

15～21は隆帯状の文様をなすもの。15は「く」の字に内側に屈曲する口縁部で、密な条線が地文に施され、更に貝殻復縫文が加えられている。16は条痕施文で隆帯がみられる。17は尖頭口唇で、口縁下端が肥



第30図 グリッド出土縄文土器（1）

厚し段をなし、複合鋸歯文が沈線で施されている。19は押引きの沈線文が口縁と隆帯上にかけて施されており、隆帯以下には縄文が見られる。20は19と近似した個体で、口縁には短沈線、刺突文が、胴部には斜縄文が横位帯状に施文されている。19・20の沈線は鋸歯状構成をとるようである。

21は縁帯をなす。口唇及び外面に斜縄文がみられる。

22~28は縄文施文胴部片である。22は上部に条線、下位に斜縄文が施されている。23~26は斜縄文、28は羽状縄文がみられる。

29は外湾する口縁で、有肋の腹縁文が綾衫状に施文されている。30は押し引き腹縁文がみられるもので、内面に条痕文がある。

31は平底の底部、32は揚げ底状平底で、底裏面に小貝の殻表圧痕が施されている。

中期加曾利E式土器（33~43）

33は環状をなす把手部分で、幅3.5cmほど、斜縄文が施され、径1.2cmの穴が開けられている。33~42は微隆起線区画を持ち、区画内に斜縄文を充填するもので、加曾利EIV式である。34~37は内湾し、端部で肥厚する口縁部である。34は波状口縁の頂部で、8の字形隆帯を伴う箋状の把手をなす。35はかるい波状をなす。38~42は胴部である。

43は沈線で枠を区画し、縄文を充填する。加曾利EIII式以降のものとみられる。

後期土器（44~53）

44は多条单節斜縄文土器である。45~46は口縁上端に紐線文が施され、撲りのゆるい斜縄文がみられる。内面上端に太い沈縁文を持つ。47は斜縄文を地文に弧状条縁文が施されている。48は縄文施文胴部である。

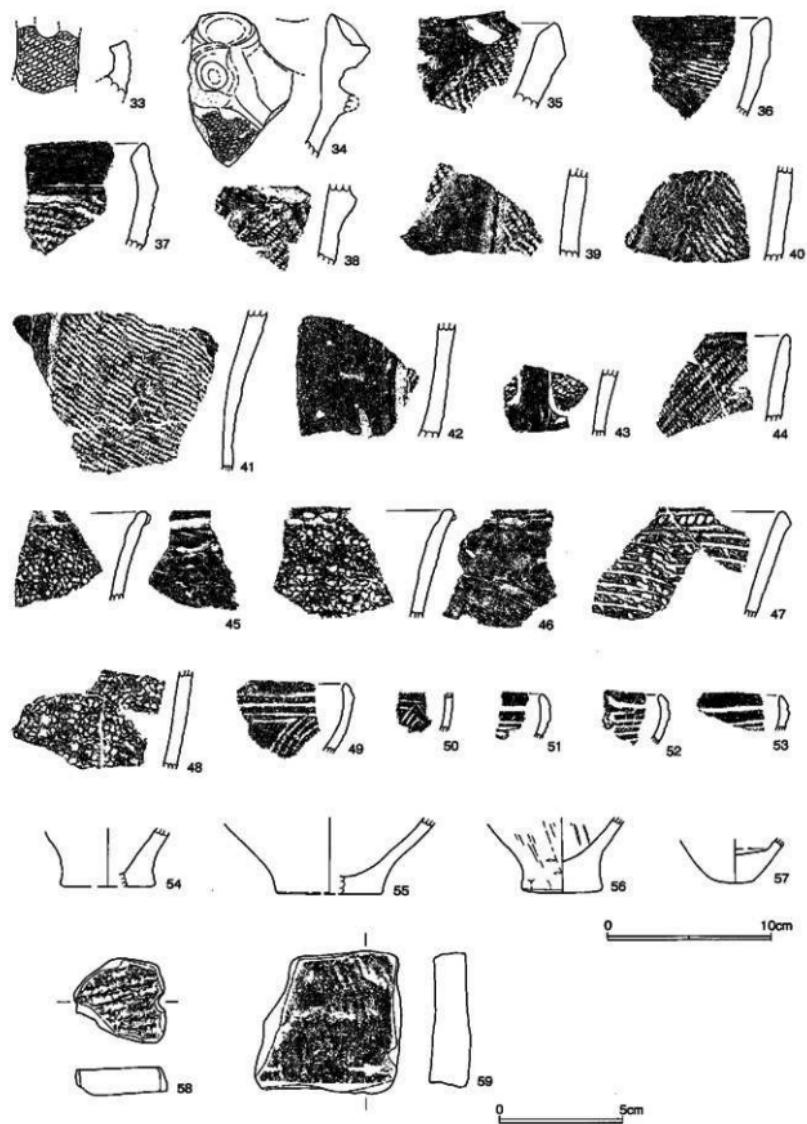
49~53はやや口縁端部が内湾する器形を持つ加曾利B式の小型鉢形土器になる。内面はミガキが顕著である。49~50は口縁上端に擬縄隆起線がみられ、以下弧状条線が配される。51から53は横条線を主体とした文様で、沈線間に斜縄文が併せて施文される部位がある。

底部（54~56）

54~56は小さい底面から、急激に径が開いて立ち上がる。54・56は底部付近で一旦くびれる形をとる。加曾利EIV式のもの。57は極端に底径が小さく、外傾して立ち上がる。加曾利B式から安行式のものだろう。

第13表 縄文土器出土量表

	縦糸	田下	条痕文	縦縦無文	前縫縦縫	縄文	無文	中期初	中期	後期	土製品	計	備考
SI-001			23		8	4	3		3	4	1	46	
SI-002			18	9	13	12	3	2	9	5		71	
SI-003			31		15		9		1	32		88	
SI-004												0	
SK-001			13		5				8			26	
SK-002			3		2					15		20	
SD-004			13		3		4		6	40		66	
SD-001	3		6		1		6		1			17	
SD-002	1		12		12		2		1	2		30	
SM-001						4						4	
2B			39	4	37	28	8		15	1		132	
3B			5				1					6	
2Cトレ	1	214	2	40	4	15		16	16	1		309	
3C			3				2		3			8	
計	4	1	380	15	136	48	57	2	63	115	2	823	点数
比率	0.5%	0.1%	46.2%	1.8%	16.5%	5.8%	6.9%	0.2%	7.7%	14.0%	0.2%	100%	



第31図 グリッド出土縄文土器（2），土製品

### 土製品（第31図、図版26、第14表）

58は土器片錐で、一部欠損する。側面に切り込みが入れられている。斜縄文が施されている。加曾利E4式である。

59は土器片利用板状品で、周縁が軽く磨られ方形を呈しており、一部が欠損している。文様は不明瞭な細かい縄文がみられる。中期のものであろう。

### 石器（第32・33図、図版27、第15表）

#### 石鎚（1～3）

1・2はチャート製の凹基小石鎚である。両面からの細かい剥離で整形されている。3は黒曜石器製で上部が欠損している。凹基の剥片鎚で、基部の抉りだけが両面からの剥離がなされている。

#### 両極石器（4～8）

4は玉髓製の厚みがある小型剥片で、折損している。先端部は丸ノミ状刃部をなしている。

5・6は小円錐の両端に剥離が見られるもので、5は頁岩、6はチャートを素材としている。

7はチャートの小削された細長い小剥片で、断面が方形をしている。小型の楔形石器である。

8は玉髓の剥片で、円形の剥片が割れて、半円形をしている。

#### 石核（9・10）

9はチャートの石核の破片になる。一か所小剥片が打ち欠かれている。

10はチャートの石核である。剥離は、回転して打面を変え、多方向から行われている。

#### 磨製石斧（11・12）

11は小判形の部分磨製石斧で、石材はホルンフェルスである。厚手の素材を周辺から打ち欠いて、基部を厚く、刃部を薄く成形し、その後刃部を中心研磨している。刃部はハマグリ刃を呈し、結果的に剥離面が多く残されている。細剥離は向かって左側面に、交互に行われている。

12は長方形を呈し、分厚く大形な部分磨製石斧で、石材は安山岩錐とみられる。刃部が一部欠損している。長軸方向断面は中央部の基部寄りが最も厚く、端部にかけて薄くなっている。周辺を粗削り後、側縁から細調整をして成形後、刃部を研磨している。

#### 打製石斧（13）

13は短冊形の半欠品で、粘板岩錐を素材とし、両面とも一部表皮が残っている。周囲を粗削り後、側縁から交互剥離で細調整がされている。

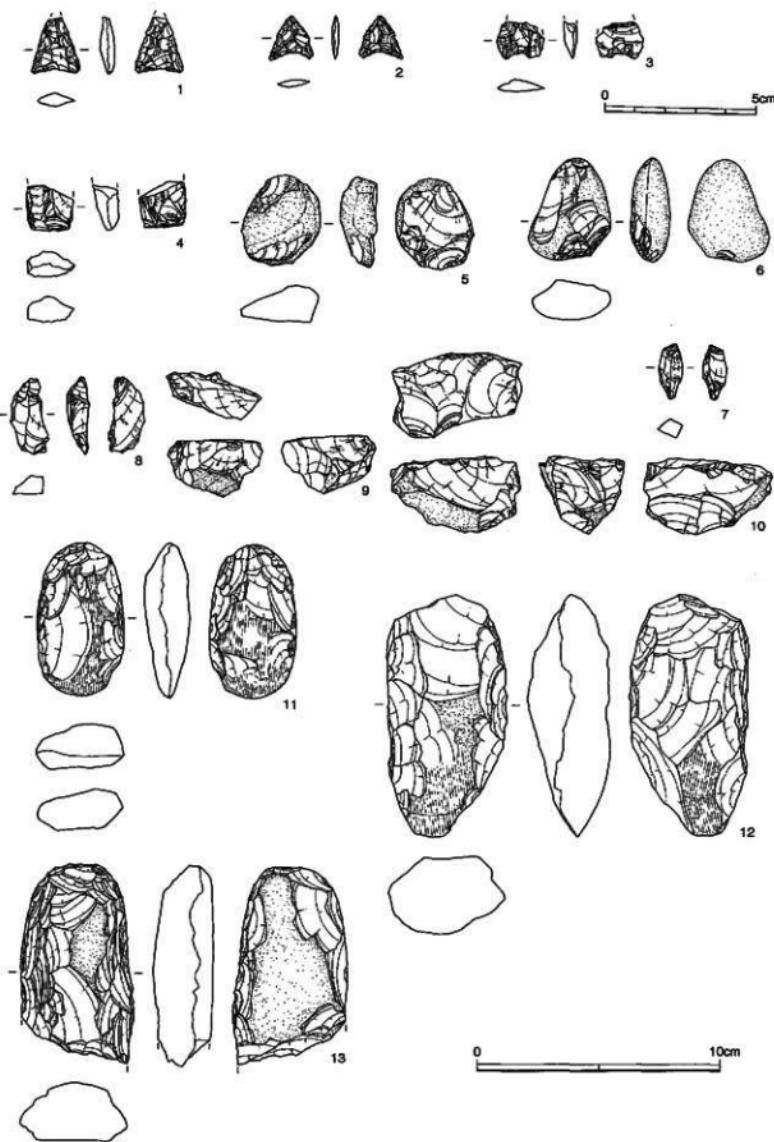
#### 敲石（14・15）

14は扁平な砂岩の精円錐で、先端部に敲打痕が見られる。15は割れた砂岩円錐の一端に、細かい剥離、摩耗面が見られるもの。片面は剥がれたように削られている。ひびが入っており、焼成を受けている可能性がある。

#### 磨石（16～20）

16は安山岩の円錐の半欠品で、一面のほぼ中央に敲打による凹みがみられる。先端に不明瞭だが敲打痕らしきものがある。

17は16と同様のもので、石材はデイサイトである。側縁に摩滅痕がみられる他、裏面に光沢があり、磨られているかもしれない。



第32図 グリッド出土縄文時代石器（1）

18は小型の扁平な安山岩円錐のもので、端部に敲打痕、摩耗面があり、一面の中央に小孔がみられる。また、平らな面が研磨を受けている。

19は扁平な多孔質安山岩の小砾を使用している。表面が若干摩滅してしており、使用されているか。側縁に敲打・摩耗痕が見られる。

20は安山岩の扁平な円錐を素材とするもので、半欠品である。両面に敲打による凹みがある。側縁に敲打・摩耗面がある。

21は変成岩を用いた石製品の破片で、研磨された面がみられる。石棒の一部であろうか。

#### 平成20年度調査分グリッド出土遺物（第48図、図版32、第15表）

2は条痕文系土器の平底のものである。表裏条痕文と胎土に纖維を有する。

3は後期堀之内式の深鉢形口縁部で、波状をなし竹管刺突刻みのある隆帯を持つ。波頂部と垂下隆帯と横位隆帯の交点には円形刺突文を有する。肩部は斜縫文が見られる。

4は沈線区画と、LR斜縫文を持つ。5はLR斜縫文のもの。6は渦巻き沈線のみられる小突起である。

7は無文薄手の口縁部である。これらは後期加曾利B式ころのもとみられる。

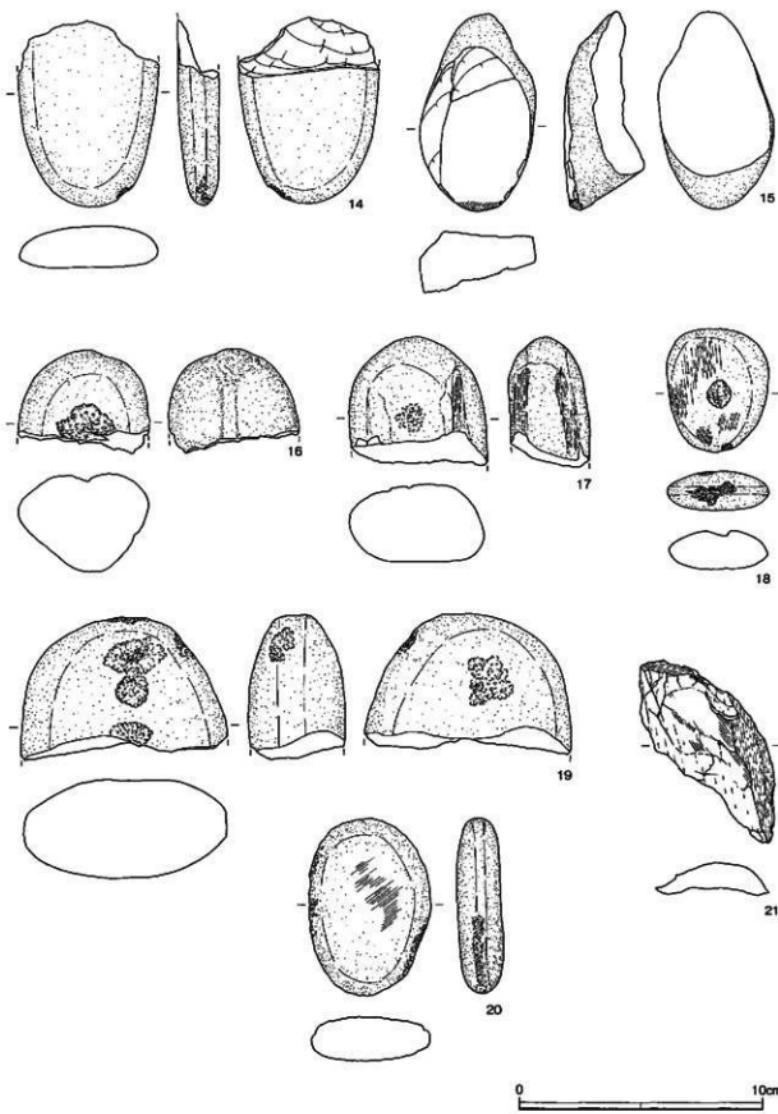
8はチャートの厚手の剥片で、表皮に近い部分で、粗割り時のものだろう。9はやや扁平な四角ぽい円錐で、側縁の一部が削られている他、器面に細かい切り傷のような刻みがみられる。両者ともSD-005の出土であるが、伴うものではない。

第14表 縄文時代土製品計測表

埠固	番号	出土地点	遺物 番号	器種	計測値 (mm)(g)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
31	58	SI-001	4	土器片頭	(3.3)	(3.5)	1.2	(15.78)	一部欠
31	59	2C	1	土板	5.8	(5.8)	1.5	(64.43)	一部欠

第15表 縄文時代石器計測表

埠固	番号	出土地点	遺物 番号	器種	母岩	計測値 (mm)(g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
32	1	SI-002	35	石頭	チャート	(1.8)	1.5	0.45	(0.94)	先端欠
32	2	2C	1	石頭	チャート	1.4	1.35	0.2	0.36	
32	3	SM-001	50	石頭	基岩石	(1.2)	1.45	0.4	(0.56)	上部欠
32	4	SI-002	26	圓板洞片	玉髓	1.9	1.9	1.1	4.29	
32	5	2C	1	兩極石器	頁岩	3.75	3.2	1.5	17.83	
32	6	2C	1	兩極石器	ナットート	4.2	3.4	1.6	27.27	円錐
32	7	2C	1	兩極洞片	チャート	2.3	1.0	0.8	1.57	
32	8	2B	1	兩極洞片	玉髓	3.1	1.5	0.8	3.46	
32	9	2C	1	石核	チャート	2.4	3.9	2.0	12.22	
32	10	SI-002	8	石核	チャート	3.2	5.3	3.5	62.73	
32	11	SI-002	22	磨製石斧	ホルンフェルス	6.35	3.6	1.9	47.5	
32	12	2C	1	磨製石斧	安山岩	10.0	4.9	3.2	(21.99)	一部欠
32	13	SD-001	1	打製石斧	粘板岩	(0.2)	4.6	2.4	(31.79)	一部欠
33	14	2B	1	磨石	砂岩	(7.7)	5.7	1.7	(95.01)	一部欠
33	15	2B	1	磨石	砂岩	8.2	4.8	(2.5)	(104.07)	一部欠
33	16	2C	1	磨石	安山岩	(4.3)	5.4	4.0	(105.77)	半欠
33	17	SD-002	1	磨石	ダイサイト	(5.3)	5.4	3.2	0.3734	
33	18	2C	1	磨石	安山岩	5.1	4.2	1.6	48.75	
33	19	2C	1	磨石	多孔質安山岩	(5.0)	7.3	1.8	(68.25)	半欠
33	20	2C	1	磨石	安山岩	5.9	8.5	4.0	238.25	
33	21	2C	1	石核？	ホルンフェルス	(7.5)	(5.5)	(1.3)	57.66	破片
48	8	SD-005	1	剥片	チャート	4.1	3.2	1.5	165.68	表皮に近い部分の剥片
48	9	SD-005	2	磨石	石英斑岩？	4.5	4.6	3.1	99.52	



第33図 グリッド出土縄文時代石器（2）

### 第3節 弥生時代

検出遺構（第26図、第21表）

SI-001（第34図、図版18）

2B04・05・14・15グリッドで検出した。平面形は開口部で長軸6.12m、短軸4.90m（床面で長軸5.20m、短軸4.00m）の隅丸方形形を呈する。長軸方位はN79°W、深さは0.70m、壁は床から0.5mまでは垂直に近く、その上はすり鉢状に開く。中軸状の西寄りに径0.7mの円形炉がある。床は硬質ローム中にあり、堅継である。支柱穴は4本で径0.25m～0.3mほど、深さが0.6m～0.7m、柱間は2.40m×2.05mである。支柱穴は東側に3本あり、中央のものは小振りながら深さが0.6mもある。壁溝が一部に見られる。炉は浅くくぼんでおり、炉床がよく焼けている。

覆土は黒色土が主体であるが、壁際に褐色土の堆積が多く、早い時期で壁近くは埋め戻されていると見られる。遺物は少なく、覆土中から弥生土器の破片が24点出土したのみであった。

SI-001出土遺物（第35・36図、図版28）

1は幅広い複合口縁で、細かい斜繩文と折り返し部に爪形の刻み目を持つ。口唇部に縄文が施文される。

2は複合口縁で、口縁・口唇に斜繩文が施文され、折り返し部に縦長の刻み目を有する。

3は内湾する器形で鉢形土器になろう。口径は16.8cm、複合口縁をなし、口縁・口唇に斜繩文施文され、折り返し部には縦条体による刻み目を持つ。体部はヘラケズリ痕が残されている。

4は斜繩文施文胴上半部である。上端が細かい羽状繩文、次いで末端部横縁り文の付いた附加条縁文、中位からやや太めの斜繩文と4種類の原体が用いられている。

5は壺形土器で、附加状縁文が胴上半部に施文されている。

6は縄文が施文された底部で、底裏に木葉痕がみられる。

SI-002（第35図、図版28）

2B45・46グリッドを中心で検出した。平面形は開口部で長軸6.62m、短軸5.44m（床面で長軸6.00m、短軸4.95m）の梢円形を呈する。長軸方位はN83°W、深さは0.32m、壁は床からほぼ垂直の立ち上がり、開口部付近でラッパ状に広がる。床は硬質ローム中にあり、良好である。径0.3m～0.5m、深さ0.66m～0.80mの4本主柱穴があり、北側の壁柱穴を含め、5本の支柱穴を持つ。柱間は2.50m×2.00mである。8割方壁溝が見られる。東壁際中央部に1.1m×0.5m、深さ0.12mの深い凹みがあるが、西接する柱穴を含め、入り口施設に關係する可能性がある。

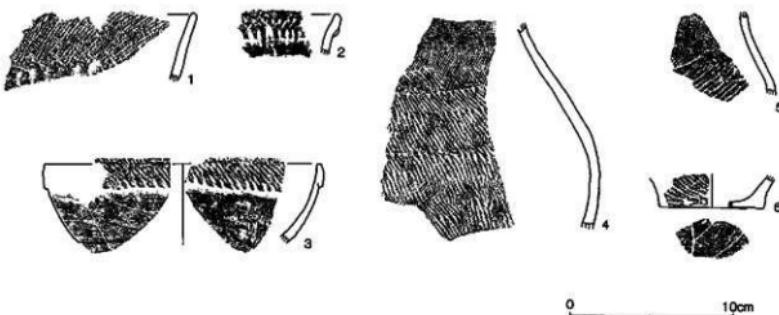
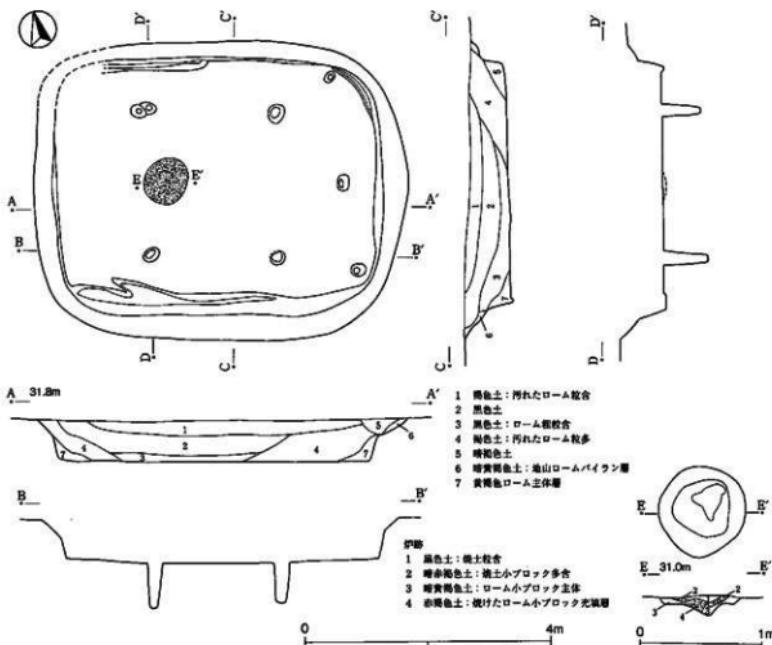
炉は長軸1.02m、短軸0.76mの梢円形で深い凹みをなす。長軸方向は住居の長軸とほぼ一致している。炉床はしっかりと焼けている。

覆土は壁際の三角堆積以外は、ほぼ黒色土で占められ、自然堆積状を呈している。遺物は中央部、炉の東側の床面付近に土器が集中しており、1の壺形土器に復原された。

SI-002出土遺物（第35・36図、図版28、第16表）

1は複合口縁の壺形土器で、口径18.8cm、現高18.8cmを測る。頸部に波状横歯条線が4段。胴部は横位の櫛歯条線文以下に斜繩文が横方向に施文されている。上部に縄の端部痕がみられる。薄手で、内面にはヘラ止め痕が目立つ。

2は小型壺形土器で口縁が欠損している。胴部最大径7.0cm、現高8.3cm、底径5.4cmである。



第34図 SI-001とその出土土器

3は頸部片で、薄手であり、上下に波状条線が見られる。4～9は複合口縁の口縁破片である。4も薄手であり、3と同一のものかもしれない。複合口縁で、口唇と折り返し部に刻み目が配されている。5・6同一のもので、角頭口唇の上面に斜繩文、口唇外縁に格条体で刻み目を施文している。8は口縁斜繩文施文で、口唇・折り返し部には刺突文が施文されている。9は8と同一のものである。

10は頸部下半から肩部にかけてのもの。輪積み接合部で割れている。頸部は平行条線が、体部は斜繩文が巡る。胎土は膠混じりである。

11・12は胎土にスコリアを含み、表面に炭化物が付着している。同一個体かも。11は頸部で、体部に繩端部・結節部の継繩り文を持つ斜繩文がみられる。12は斜繩文が見られる。

13は肩部付近の個体。輪積み接合部で割れている。細かい斜繩文が施文されており、明瞭ではないが、原体は附加条のものと思われる。14は胴部片で、輪積み接合部で割れている。斜繩文が見られるが、附加条の部分が多い。

15は底部片で撲糸文施文。底裏木葉痕。胎土に雲母・石英・長石粒を含む。

16は無文の繩文土器底部を再利用した製品で、口の開いた浅い鉢形をしている。半分以上は欠損している。口縁にあたる部位は磨られて、水平に整形されているが、もともと水平に接合部で割っていたものだろう。また、底裏・立ち上がり部分も磨られている。胎土に石英・長石礫が多く見られる。用途は、上下を逆にして器台として用いられたことも考えられるが、砥石的な使用がされた可能性が高い。

17は砂岩の砥石である。扁平で厚い石の一部を割り、方形に成形したものを素材している。長さ10.5cm、幅8.6cm、厚さ3.3cm、重さ559.63グラムを測る。一面は光沢が見えるほど研磨されている。その裏面はかるく研磨されている。また側面、側縁の角も摩滅している個所があり、磨り敵き等の使用がなされている。

18は先端に研磨面がある細砂岩の砥石で、半分欠損している。また両面及び側縁も若干摩滅しており、磨られているものと見られる。

19は軽石である。長さ幅とも約10cmと軽石にしては大きい。磨られた槌状の浅い溝跡が数ヶ所と、部分的に細かい筋跡が残されている。

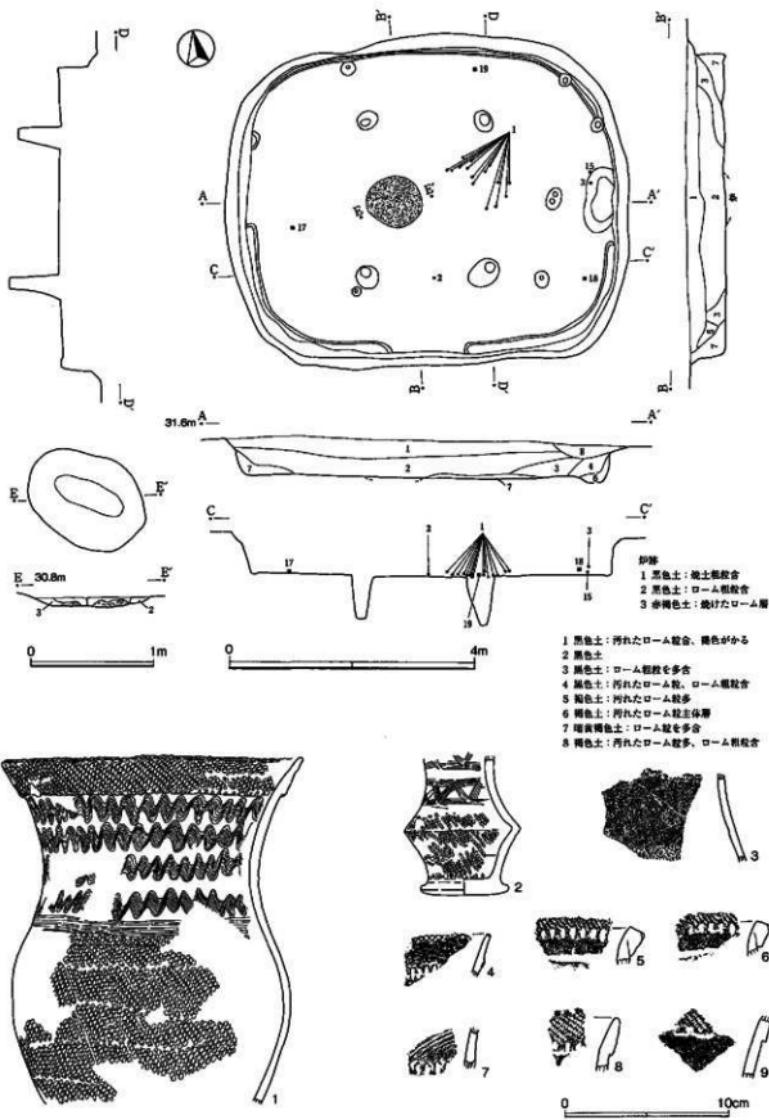
#### グリッド出土遺物（第37図、図版28）

1は複合口縁のもので、口唇・折り返し部に刻みを持つ。頸部に条線で縱横の文様がみられる。

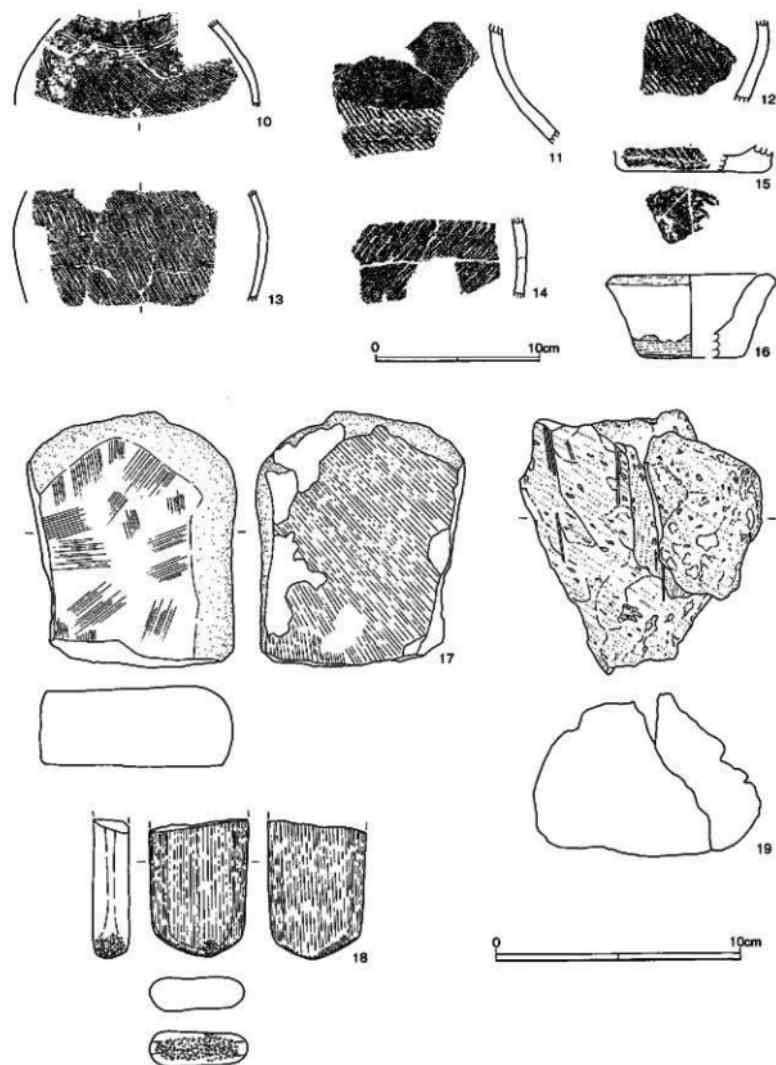
2は複合口縁のもので、撲糸りの附加条繩文？がみられる。胴部に爪形文様がうかがえるが、鋸歯状条線文の一部かもしれない。3は附加条繩文のみられる肩部片である。

4～8は底部片である。4は撲糸文施文され、底面に木葉痕がある。5は附加条繩文施文で、底裏に何らかの圧痕があるが、明瞭でなく判断できない。胎土に白色礫を含む。

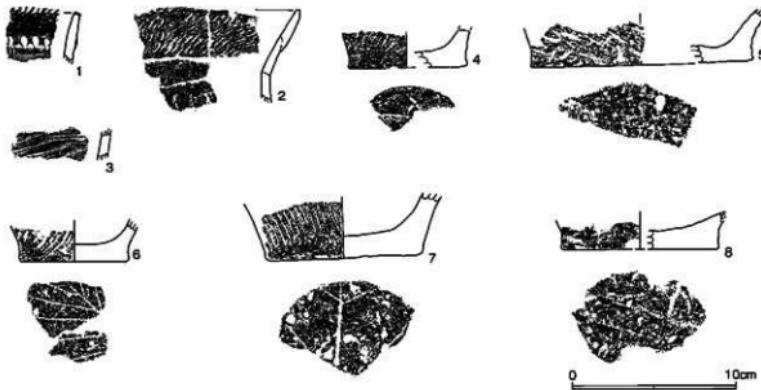
6は繩文施文のもので、底面木葉痕を持つ。7は撲糸文施文で、底面に木葉痕・種子様痕を持つ。8も底面木葉痕を持つものである。



第35図 SI-002とその出土土器（1）



第36図 SI-002出土土器（2）石器



第37図 グリッド出土弥生土器

第16表 弥生時代石器計測表

井田	番号	出土地点	遺物 番号	器種	母岩	計測値 (mm) (g)			備考
						長さ	幅	厚さ	
36	17	SI-002	23	砾石	砂岩	10.5	8.6	3.3	559.63
36	18	SI-002	4	砾石	砂岩	(5.7)	(4.0)	1.5	(50.08) 半欠
36	19	SI-002	9	砾石	砂岩	10.8	10.0	6.7	85.91

#### 第4節 古墳時代

検出遺構（第26図、第19表）

SI-003（第38図、図版20）

2C14・15・24・25グリッドで検出した。平面形は長軸6.10m、短軸5.44m（床面で長軸5.95m、短軸5.23m）の長方形を呈する。長軸方位はN45°W、深さは0.35mである。

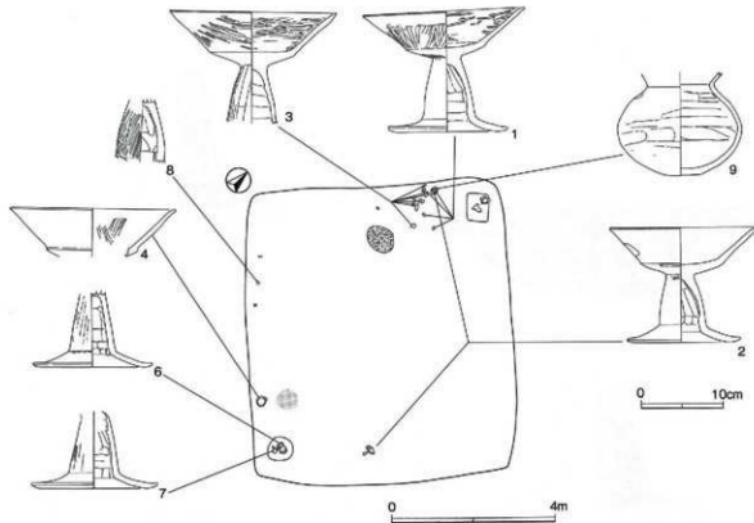
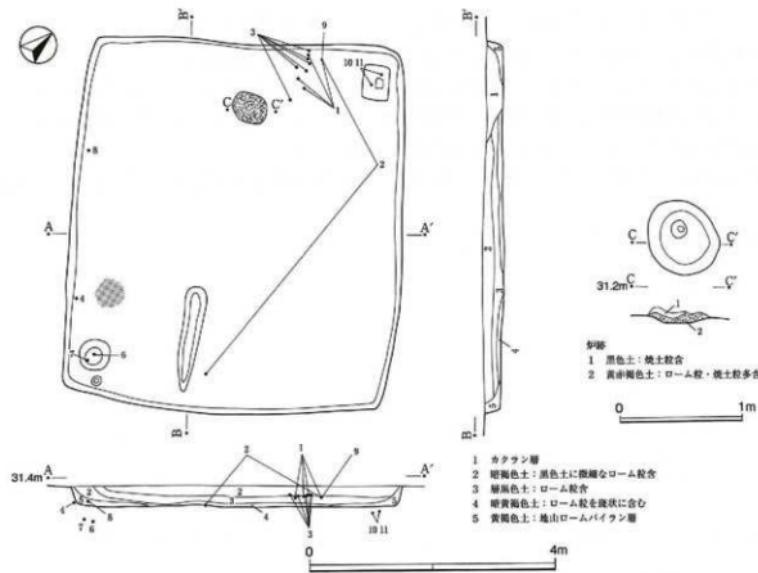
主柱穴は検出できなかった。北西壁添いの中央に径1.30m×1.12m円形炉があり、炉床が10cmほど窪んでいた。北コーナーと南コーナーで貯蔵穴が検出されている。北側は0.56m×0.44mの方形で、深さ0.32m、土製品の破片が出土した。南側では径0.49mの円形で、深さ0.32m、高壺の脚部、石器が出土した。北側貯蔵穴の隣で床付近に、直径0.45m、厚み10cm強の粘土塊が出土した。南側には間仕切り状の浅い溝がある。

覆土は床上に暗黄褐色土を被っており、その上に主に黒色系の土が堆積していた。

北コーナーの壁に近い部分で1・2の高壺と9の壺が出土した。北コーナーの貯蔵穴で10・11の土製品が出土、南コーナーの貯蔵穴では5・7の高壺脚部が出土した。

SI-003出土遺物（第39・40図、図版29、第17・19表）

1～8はいわゆる和泉期の典型的な高壺で、脚台・脚柱・杯底・杯身と明確に分かれる作りで、杯身と底の境に稜がある。脚はやや膨らみのある柱状、台は極端に開き円盤に近い。口径は18cmから20cm、高さは14cmから15cmになる。1は皿部外面縦方向ヘラナデ、内面ヘラミガキ。3は台を欠く。内面のミガキが



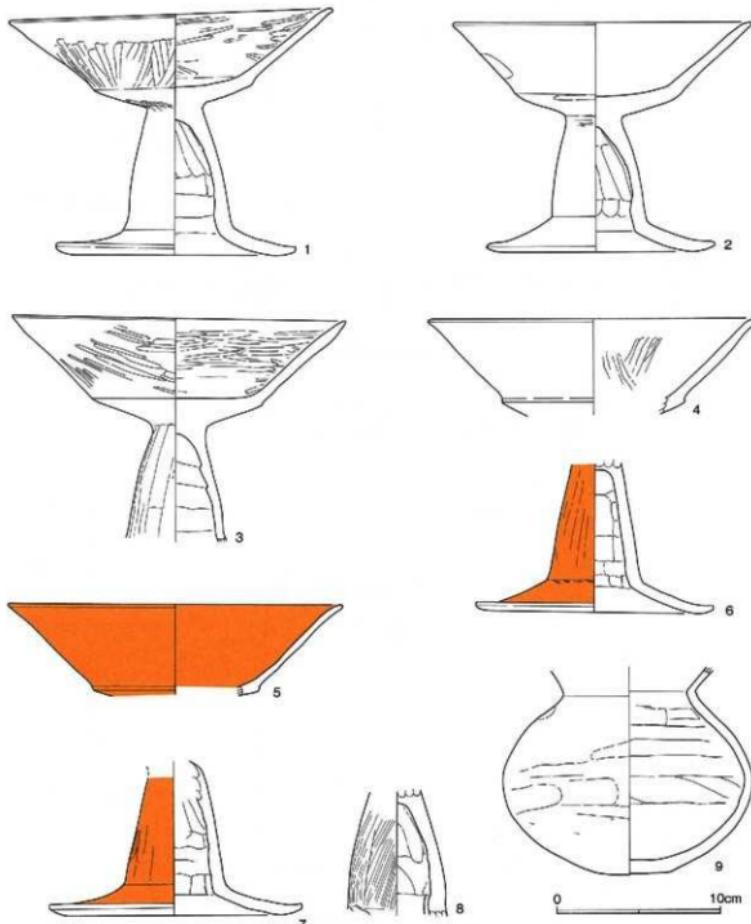
第38図 SI-003

目立つ。5は杯皿部、8・7は脚部で赤彩されている。8は脚の柱部である。

9は小型壺で、口縁は欠けている。胴は球に近い形をなし、小さい底部がつく。

10・11はブロック状の土製品で、貯蔵穴から破片で計16点出土した。表面には細かい凹みがある。一面が平らで置いた面と思われ、置きカマドや土製支脚の一部であろうか。胎土には砂は含まれていない。二次的な焼成を受けていると思われ、脆く、漆喰に似た質感である。

12は長方形をした砂岩の砾石である。一端が割れて欠けているが、もともとは短冊形だったとみられる。



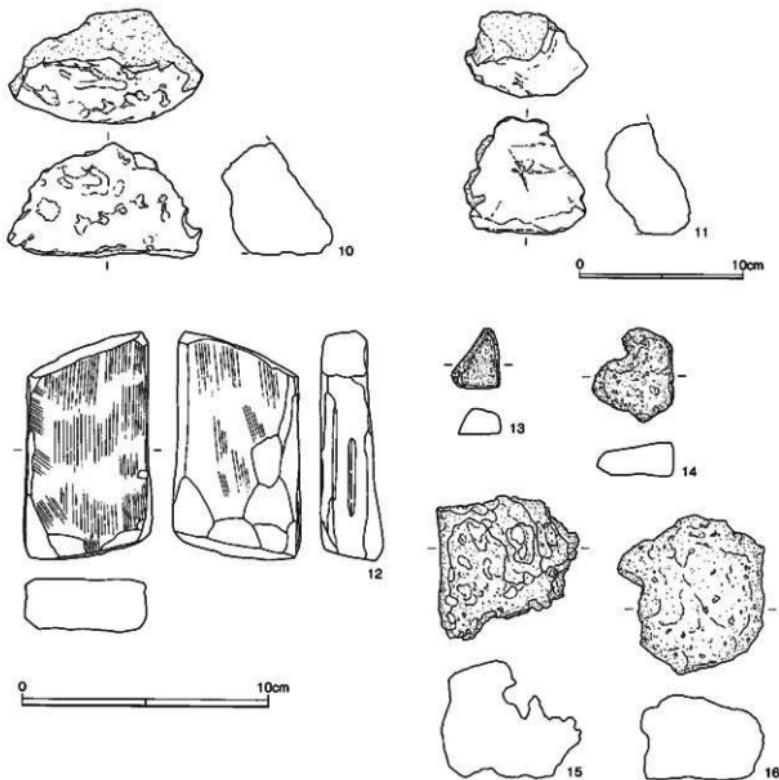
第39図 SI-003出土土器

現代の砥石に近い形状で、縁には整形のためか剥離が見られる。ある。主使用面は表裏で、特に表の面は全面がよく使われている。また縁や角も擦られている他、右側縁に筋痕が認められる。

13～15は輕石製品である。13は小さな三角板状品で、全面が擦られてきれいに面をなしている。14は台形の板状品で、全面が擦られている。15は一面と側縁が擦られているもので、一部が割れしており、更にその断面が擦られている部位がある。16は不整形のものだが、擦られた面が4面ある。

SI-004 (第41・42図、図版21)

3D02-03グリッドを中心検出した。平面形は長軸5.87m、短軸5.80m(床面で長軸5.40m、短軸5.40m)のほぼ正方形を呈する。長軸方位はN53°W、深さは0.46mである。北西整添いの中央に径0.69m×0.54mの楕円形炉があった。主柱穴は4本で径は0.4m～0.5m、深さは0.7m～0.9m、東側柱の中間に入り口小ビ



第40図 SI-003出土土製品、石器

第17表 SI-003出土土器観察表

件目 番号	番号	遺構 番号	遺物番号	種別 基種	遺存率	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	成形・調整	色調	胎土	備考
39 1	SI-003 12	3・4・9・	土器群	高坏	60	19.7	14.4	15.1	外腹 ヘラケズリ 磨き ナデ 内腹 庫き 脚部内面 ヘラケズリ(輪) 台部内面 ナデ	外腹 明褐色 内腹 明褐色	微細砂	
39 2	SI-003 1・3	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	60	18.3	13.8	14.0	外腹 ヘラケズリ 磨き ナデ 内腹 庫き 脚部内面 ハラナデ 輪積痕	外腹 明褐色 内腹 明褐色	微細砂	
39 3	SI-003 2	1・3	土器群	高坏	45	20.3	-	(13.6)	外腹 ヘラケズリ 磨き 内腹 磨き 脚部内面 ヘラナデ 輪積痕	外腹 明褐色 内腹 明褐色	微細砂	
39 4	SI-003 2	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	高坏のみ 80	20.1	-	(5.9)	外腹 ナデ 磨き 内腹 ナデ 磨き	外腹 黒色 内腹 黑色	微細砂	内・外腹 赤彩
39 5	SI-003 24・25・35	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	高坏のみ 25	20.3	-	(5.9)	外腹 ナデ 磨き 内腹 磨き	外腹 明褐色 内腹 明褐色	微細砂	内・外腹 赤彩
39 6	SI-003 25・33	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	高坏のみ 80	-	14.5	(9.2)	外腹 磨き ナデ 内腹 脚部内面 ナデ 輪積痕	外腹 暗褐色 内腹 暗褐色	微細砂	内・外腹 赤彩 南防藏穴
39 7	SI-003 34	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	高坏のみ 70	-	15.2	(9.5)	外腹 磨き ナデ 内腹 脚部内面 ナデ 輪積痕	外腹 暗褐色 内腹 暗褐色	微細砂	外腹 赤彩 南防藏穴
39 8	SI-003 17	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	高坏のみ 50	-	-	(7.7)	外腹 磨き 内腹 脚部内面 ナデ 輪積痕	外腹 暗褐色 内腹 暗褐色	微細砂	
39 9	SI-003 3	5・6・8・ 10・11・13・ 23(一括)	土器群	高坏	80	腹15.6	4.5	(12.7)	外腹 ナデ 内腹 ヘラケズリ ナデ 底面 ナデ	外腹 暗褐色 内腹 暗褐色 底面 暗褐色	沙粒	

ットを伴う。北側と南側のコーナーに貯蔵穴が配されている。北側は径0.72m×0.50mの楕円形で、深さ0.42m、塔形土器等が出土した。南側では0.78m×0.70mのほぼ円形で、深さ0.37m、壺形土器が2個体出土した。壁溝が主要部分は廻っており、南側のコーナーでは床が一段低くなっている。

炉は北西壁際に径0.69m×0.54mの楕円形炉があった。浅く凹んでおり、炉床が4~7cmの厚さで焼土化していた。

覆土は壁際には黄褐色~褐色土があり、その上部に焼土と炭化材の分布が見られた。主体は黒色系の土で、中央では床直上まで堆積していた。

北西壁際中央付近、炉の北西側で、1の高坏、4の高坏身、6・9・10の高坏脚、11・1の壠が外側から流れ込んだ状態で出土した。北側貯蔵穴内では8の高坏身部、12・13の壠、22の砾石が出土した。南東壁際では床面近辺で、3の高坏身、7の高坏脚、14の壠、7の鉢、21の土玉が出土している。南西貯蔵穴内に19の壠、その北東側に18・20の壠が出土した。

#### SI-004出土遺物 (第43・44図、図版30・31、第16・17表)

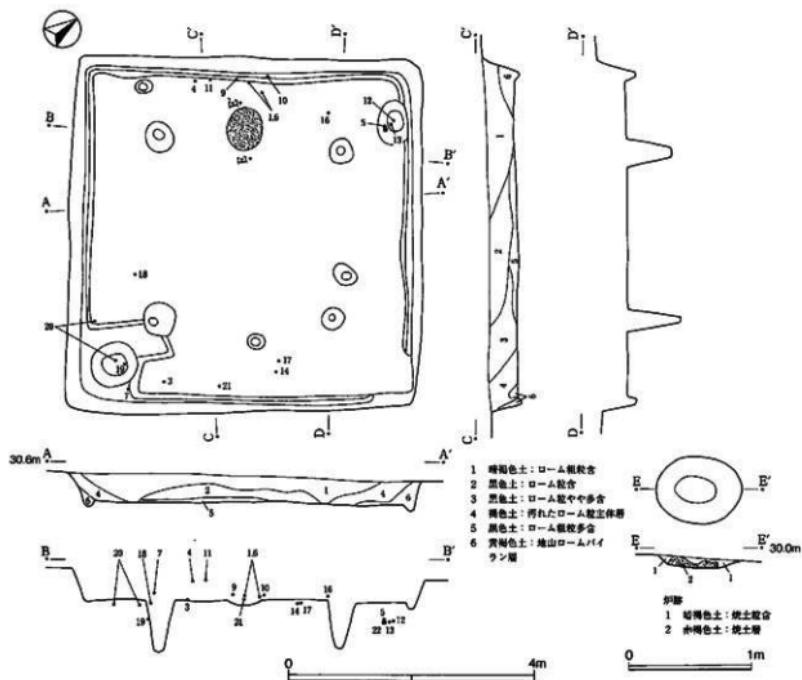
1~10はSI-003で出土したものと同様、古墳時代(和泉期)の高坏である。

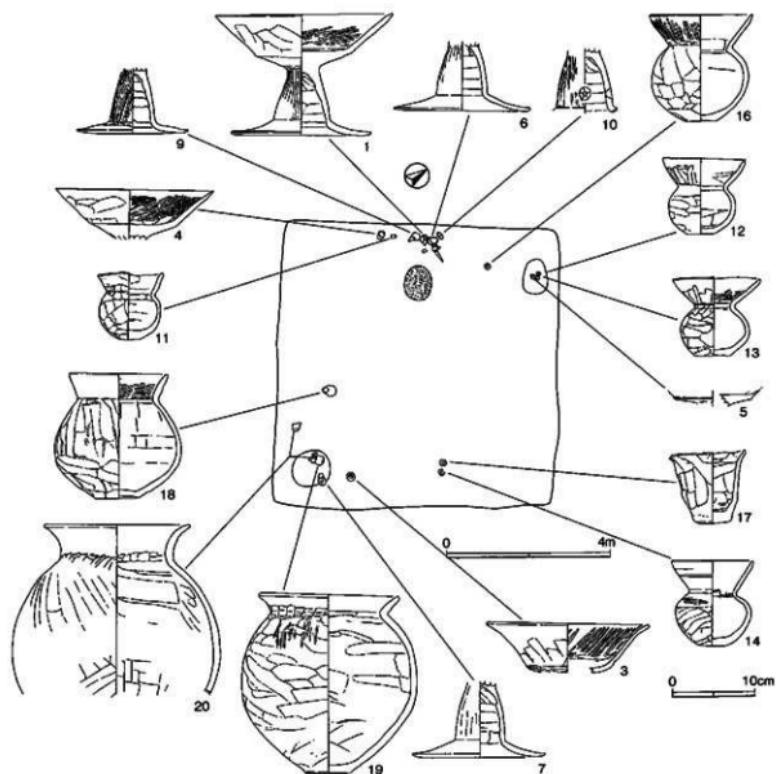
1は当住居跡で唯一杯・脚部まで達なるもので、口径21.49cm、高さ17.4cmである。内面と脚部外面にミガキが目立つ。杯部見込み面はケズリ痕が残る。脚内面に輪積み痕が顕著である。

2~5は杯部である。2は口径20.3cm、3は口径19.9cmで口縁端で外反する。2・3の調整は1に準ずる。4は口径19.2cmと小振りで内面の刷毛目痕が残る。5は底面のみのものである。

6~10は脚部である。6・7は赤彩されている。8は台部のみのものである。9は台径が13.5cmと小さい。台外面に刷毛目痕が残されている。4の杯部にも刷毛目痕が見られるので、9と同一のものかもしれない。10は脚注下部に円錐状の貫通する穴が焼成前に開けられている。

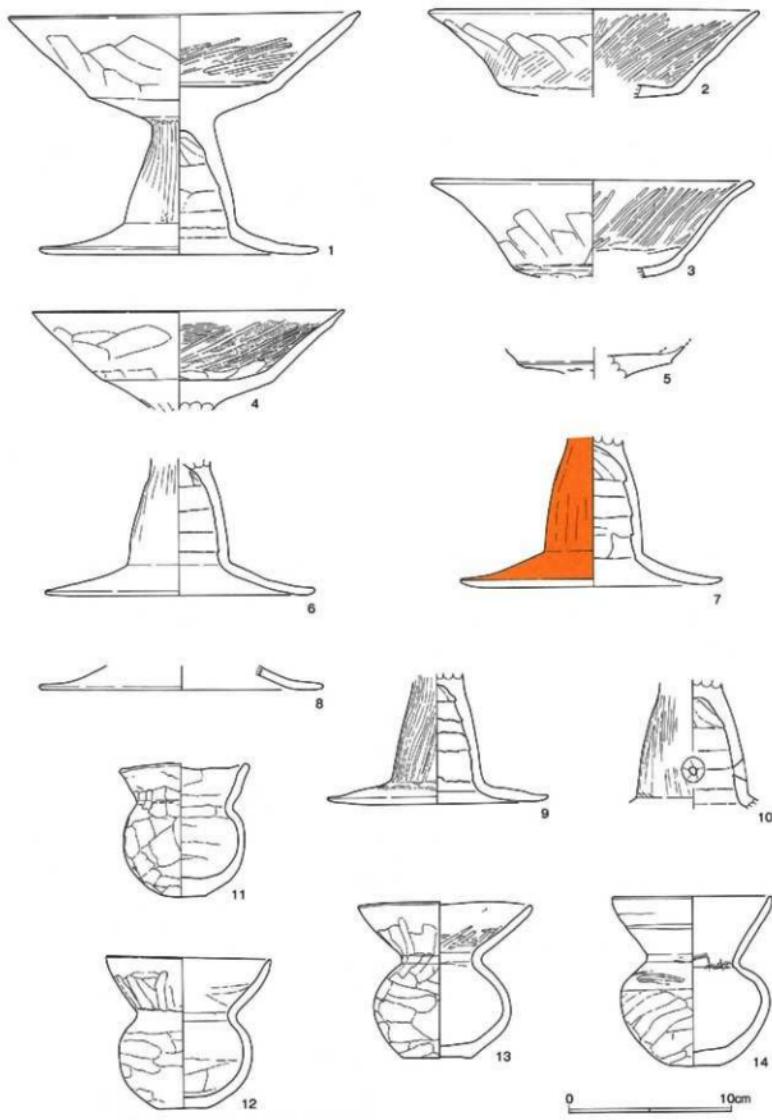
11~16は壠である。完形のものが多い。11は口径8cm、高さ8.2cmと小形のもので、口縁が短い。口縁外部、内面に輪積み痕が残る。12は口径10.1cm、高さ9.3cm、口縁下半から体部、底面にかけヘラケズリさ



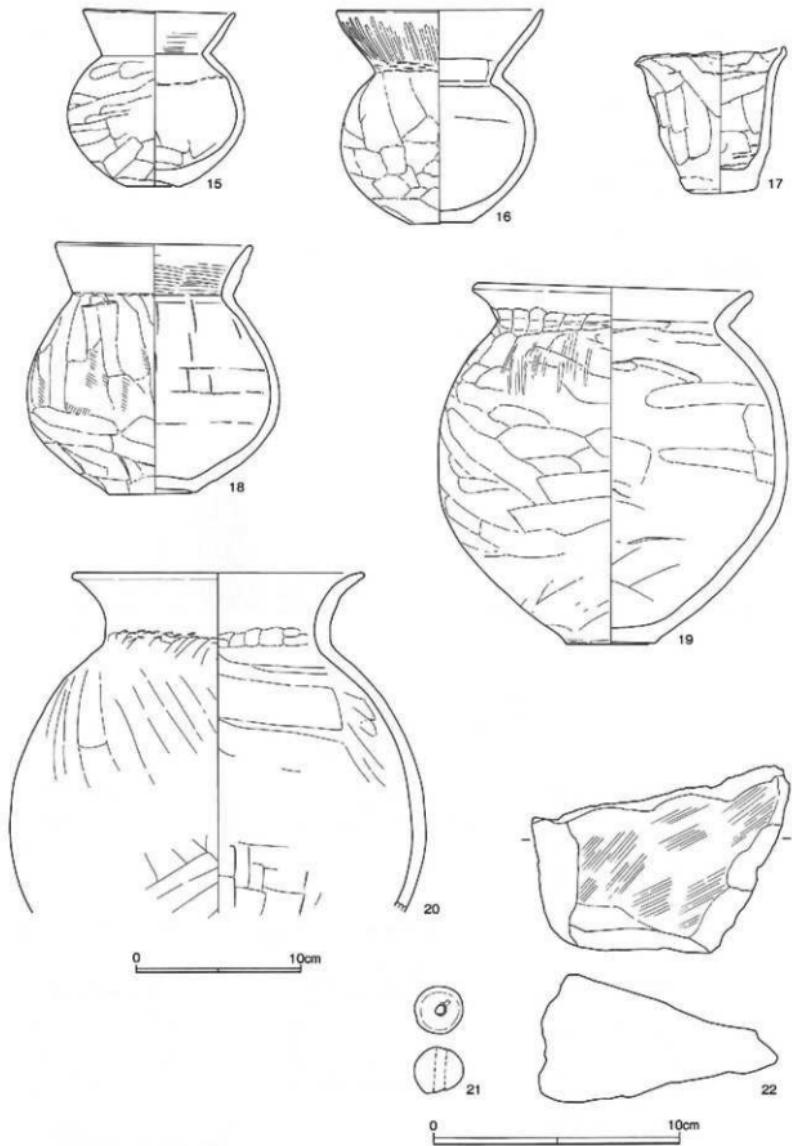


第42図 SI-004遺物出土状況

22は断面が楔形の扁平な礫を用いた砥石で、稜の一部と平らな面が擦られて摩滅している。石材はいわゆる筑波石の雲母片岩で、非常に脆い。一端が割れている。



第43図 SI-004出土遺物（1）



第44図 SI-004出土遺物（2），土製品，石器

第18表 SI-004出土土器観察表

順番	番号	遺物番号	種別	器種	遺存率	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	成形・調整	色 調	地 土	備考
43	1	SI-004	12-14-18 (一括)	土師器	高坏	60	(21.4)	(17.0)	14.8 外面 ハラケズリ 磨き 内部 ナデ 剥離痕	外面 深褐色～褐色 内面 深褐色～褐色	粗粒砂	
43	2	SI-004	20-21(一括)	土師器	高坏	55 坏部のみ 60	20.3	-	外面 ハラケズリ 磨き 内面 ナデ 剥離	外面 明褐色～黑色 内面 明褐色～黑色	砂粒	黒斑
43	3	SI-004	4	土師器	高坏	50 坏部のみ 50	19.9	-	外面 ハラケズリ 磨き 内面 ナデ 剥離	外面 深褐色 内面 深褐色	砂粒	
43	4	SI-004	9	土師器	高坏	75 坏部のみ 75	(19.2)	-	外面 ハラケズリ ナデ 内面 剥離	外面 黑色 内面 深褐色	砂粒	
43	5	SI-004	22	土師器	高坏	20 脚部のみ 95	-	1.9	外面 ガギ ナデ 内面 ミガギ	外面 明褐色～黑色 内面 明褐色	微細砂	
43	6	SI-004	12-14	土師器	高坏	95 脚部のみ 95	-	16.5	8.4 脚部 内面 輪積痕	外面 深褐色 内面 深褐色	微細砂	外面 部分的に 赤影?
43	7	SI-004	5	土師器	高坏	98 脚部のみ 98	-	16.1	9.2 内面 ナデ 脱殻痕	外面 黑色 内面 深褐色	微細砂	外面 赤影
43	8	SI-004	19	土師器	高坏	10 脚部のみ 10	(17.4)	-	12 外面 ナデ(ヨコ) 内面 ナデ(ヨコ)	外面 深褐色 内面 深褐色	微細砂	
43	9	SI-004	11	土師器	高坏	95 脚部のみ 95	-	13.5	8.0 外腹 唇(腰) (剥離) 脚部 内面 脱殻痕	外面 明褐色～黑色 内面 明灰褐色	微細砂	
43	10	SI-004	15	土師器	高坏	50 脚部のみ 50	-	8.0	8.0 外腹 唇(タケ) 内面 ハラナメ	外面 黑褐色 内面 黑色	微細砂	焼成度の穿孔
43	11	SI-004	10	土師器	培	100	8.0	2.5	8.2 外腹 内面 ナデ(口縁) 内面 ナデ(口縁)	外面 明褐色～黑色 内面 明褐色～黑色	スコリア 砂粒	
43	12	SI-004	25	土師器	培	98	10.1	3.9	9.3 外腹 ナデ(後付) 内面 ナデ(縁部)	外面 黑色 内面 黑色	スコリア 砂粒	口縁一部内側へ 凹んでいた
43	13	SI-004	24	土師器	培	99	10.7	4.6	9.6 外腹 ハラケズリ (体) ナデ 剥離 (口縁) 底部 底底	外面 深褐色～黑色 内面 深褐色～黑色	砂粒	口縫が波打って いる やや上げ底 底裏 ハラ切り 気 味残る
43	14	SI-004	2	土師器	培	99	9.9	3.0	10.5 外腹 ハラケズリ (下半) ナデ 剥離 (口縁) 内面 ナデ (縁部)	外面 明灰褐色 内面 明灰褐色	密・砂粒	米袋がみられた 体部 ハラケズリ 後縫ぐくナデが入 るようだ
44	15	SI-004	19(一括)	土師器	培	70	9.2	3.3	10.8 外腹 ハラケズリ (体) ナデ 剥離 (口縁) 内面 ナデ 剥離	外面 黑色 内面 黑色	微細砂	ス付書
44	16	SI-004	16	土師器	培	80	12.5	3.9	13.1 外腹 ハラケズリ 唇 内面 ナデ 剥離	外面 暗褐色 内面 暗褐色	砂粒	焼成良好
44	17	SI-004	1	土師器	鉢	100	9.8	4.4	8.9 外腹 ハラケズリ 唇 内面 ナデ 剥離	外面 黑色 内面 黑色	砂粒	輪積痕かなり残 す
44	18	SI-004	8	土師器	広口盃	90	11.8	5.3	15.3 外腹 ハラケズリ (体) ナデ (口縁) 内面 ナデ ハケ目	外面 深褐色～黑色 内面 深褐色～黑色	砂粒	
44	19	SI-004	17	土師器	カメ	100	17.1	5.5	21.2 外腹 ハラケズリ 唇 内面 ナデ ハラナメ	外面 暗褐色～深褐色 内面 暗褐色～深褐色	砂粒	焼成良好
44	20	SI-004	6-7-20 (一括)	土師器	カメ	40	(17.4)	-	20.8 外腹 ハラケズリ (体) 内面 ナデ (口縁)	外面 暗褐色～深褐色 内面 暗褐色～深褐色	砂粒	内面下部 ス 付石

第19表 奈良・平安時代以降土製品・石器計測表

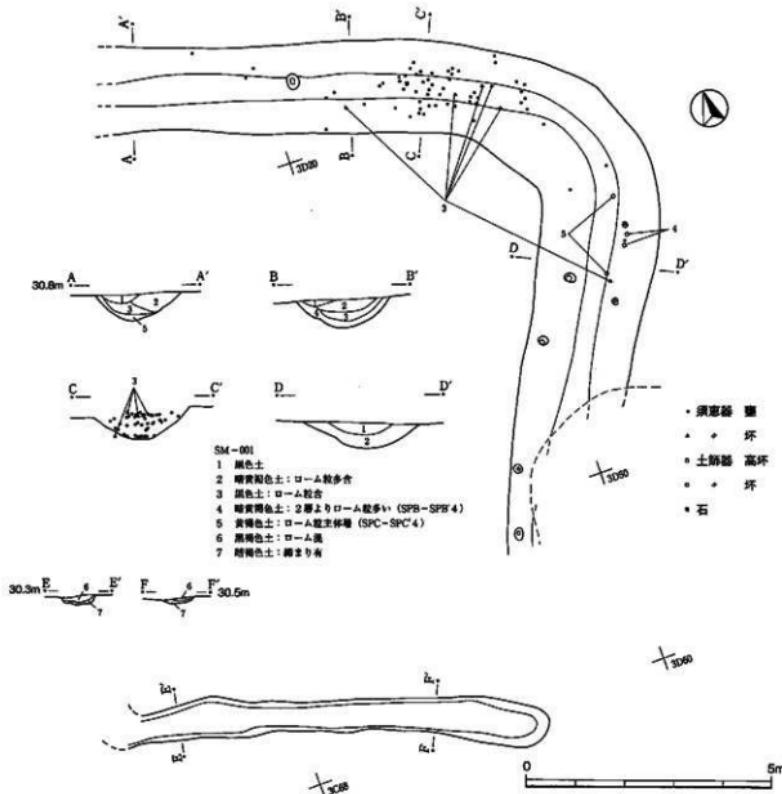
押抜	番号	出土地点	遺物番号	器種	母者	計測値 (mm) (g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
40	10	SI-003	3031	土製品	-	-	(11.7)	(7.0)	(6.9)	223.03 貯藏穴内 14点
40	11	SI-003	3031	土製品	-	-	(7.4)	(5.2)	(7.1)	117.39
40	12	SI-003	19	砾石	砂岩	9.3	5.2	2.2	172.87	
40	13	SI-003	29	砾石	鵞石	2.5	1.95	1.0	1.35	
40	14	SI-003	26	砾石	鵞石	3.9	3.3	1.4	4.47	
40	15	SI-003	20	砾石	鵞石	5.9	5.8	4.8	31.35	
40	16	SI-003	26	磨石	鵞石	6.5	6.0	3.5	48.60	
44	22	SI-004	23	砾石	雲母片岩	(7.7)	(10.6)	(5.2)	423.2 一部欠損?	
44	21	SI-004	3	土玉	-	-	2.0	1.9	0.65	
47	1	SI-005	2	土罐	-	-	4.8	21.6	2.0	16.45
47	2	SD-001	23	おはじき	-	-	1.7	1.1	0.4	(0.67) 泥面子?

## 第5節 奈良・平安時代

検出遺構（第26図、第21表）

SM-001（第45図、図版22）

現道の東側、3Cグリッドの東側で直角に近く曲がる溝状遺構として検出し、方墳の一部ととらえた。平成20年度の調査では南側に浅い溝が検出され、南東コーナーで溝が途切れているが、溝底に近い部分のみが残されたもので一辺11mの方形のプランをなすことが確認され、出土遺物から奈良時代の方形周溝状遺構であると判断した。溝幅は、北側で1.60m～1.99m、深さは0.52m～0.58m、東側で2.21m～2.42m、深さ0.23m～0.35m、南溝は幅0.60m～0.90m、深さ0.10m～0.18mほどである。北溝と東溝との角度は80°である。北溝の方針はN73°Wになる。北溝と南溝はほぼ並行しており、溝間は11.6mである。所々に小ビ



第45図 SM-001

ットがある。断面は浅いU字形を呈する。

覆土は上部に黒色土（場所により中位にも）があり、床面近は暗黄褐色土、黄褐色土が堆積していた。

北溝のコーナー寄り地点で、4～9の須恵器壺破片が集中的に床面から覆土上位まで分布していた。

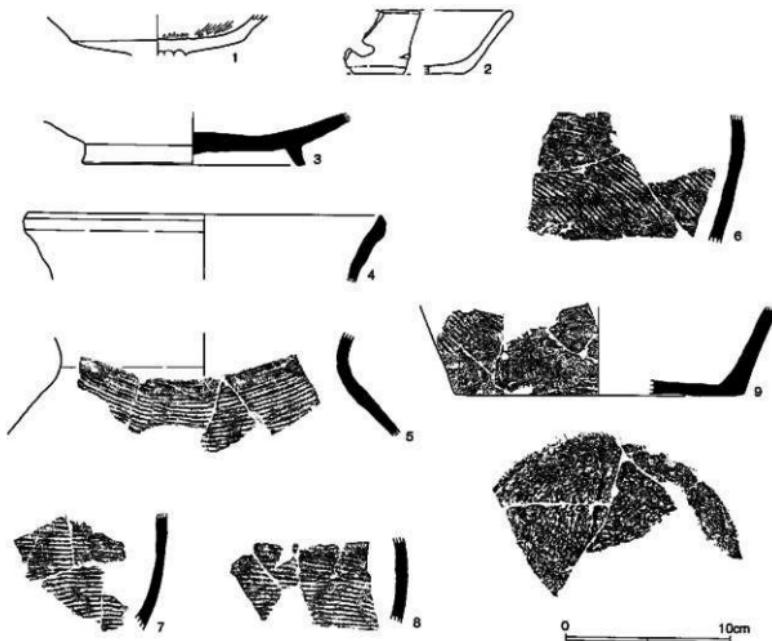
SM-001出土遺物（第46図、図版32、第20表）

1は古墳時代の高坏破片で、赤彩されている。

2は奈良・平安時代のロクロ整形の土師器杯片である。

3は須恵器高台付き杯の底部で、高台が残る。胎土に雲母・白色礫が顯著に見られる。

4～9は奈良・平安期の須恵器壺の破片である。雲母・白色礫が胎土に顯著に見られ、新治産とされるものである。4は口縁で径が22.0cmほどである。口唇が尖り、若干受け付き気味になる。5は頸部付近、7・8は胴部で刻みの条が横位のタタキ目を持ち、叩かれた内面は凹凸が激しい。6は上部が横位、下位が斜位のタタキ目になる。8は条斜位のタタキ目がみられる。内面に輪積み痕が残る。9は底部で、径が17.6cmである。外面に上部に条斜位のタタキ目、下位底部近に横ケズリ痕、底裏に布目痕がある。



第46図 SM-001出土土器

第20表 SM-001及び周辺出土土器観察表

件名	番号	遺物番号	種別	器種	直存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形・調査	色調	胎土	備考	
46	1	SM-001	66-67	土器器	高環 杯底のみ	-	-	(2.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	内外面 褐色	微細砂	赤彩 古墳時代	
46	2	SM-001	65-68	土器器	环	破片	-	-	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ 底 余切り、ケズリ	内外面 褐色	微細砂		
46	3	SM-001	4-9-24- 30-32-69	須恵器	高台付 きび	合部1/4 のみ	内径 (13.6)	-	3.2	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ、回転ケズリ	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母	
46	4	SM-001	5-9-62	須恵器	蓋	LII端破片	22.0	-	(4.0)	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母	
46	5	SM-001	4-6-16- 17-22-54- 57	須恵器	蓋	底部破片	頭17.4	-	(5.9)	ヨコタキ日 ナナメタキ日 ロコナデ	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母	
46	6	SM-001	11-26-40	須恵器	蓋	側部破片	-	-	外 ヨコタキ日 内 ロコナデ	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母	同一	
46	7	SM-001	9-41-42- 63	須恵器	蓋	側部破片	-	-	外 ヨコタキ日 内 ナマコや凸凹	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母		
46	8	SM-001	11-12-27- 44-45	須恵器	蓋	側部破片	-	-	外 ナマコタキ日 内 ナマコタキ日	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母		
46	9	SM-001	3-4-7-19- 30-30-34- 35-36-53	須恵器	蓋	底部破片	-	17.6	(5.5)	外 上部分ヨコタキ日、下部ケズリ 底 板状	内外面 灰色	石英・灰石・ 紫母	
47	3	2Dトレンチ	1	須恵器	蓋	ほぼ完形	15.9	-	3.1	内面 ロクロナデ	内外面 褐色	石英・灰石・ 紫母	

## グリッド出土遺物（第47図、図版32、第20表）

3は2D内の上層確認トレンチで出土した。SM-001に重なる個所である。径15.9cm、高さ3.1cmを測る。扁平な縁が付く。低いかえりを有する。蓋の上面は回転削り痕が残る。胎土は雲母や白色顕を多量に含むもので、新治産とされるものである。奈良・平安期（8世紀前半頃）のものだろう。

## 第6節 中・近世以降

## 検出遺構（第26図、第21表）

## SD-001～003（第47図、図版23）

SD-001は3Bから3Cグリッドの北側、調査区の南縁に沿う形で検出された。平面形は幅0.8m～1.5m、床幅0.5m～0.7mほど、走行方位はN63°～80°Wである。現延長約33mで、緩く弧を描いて東西に延びており、途中で浅くなっている1箇所切れている。深さ0.1m～0.4mで逆台形の断面になる。床の高さは東側はほぼ水平で、西側は高い。

SD-002はSD-001の北に接しており、幅1.0m～1.7m、底面0.3m～1.0m、現延長21m、深さ0.2m～0.4m、断面は逆台形を呈する。

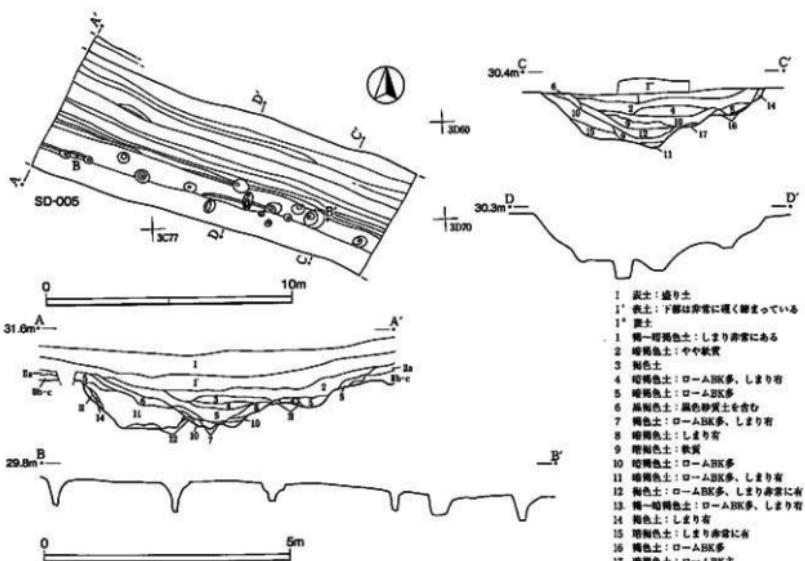
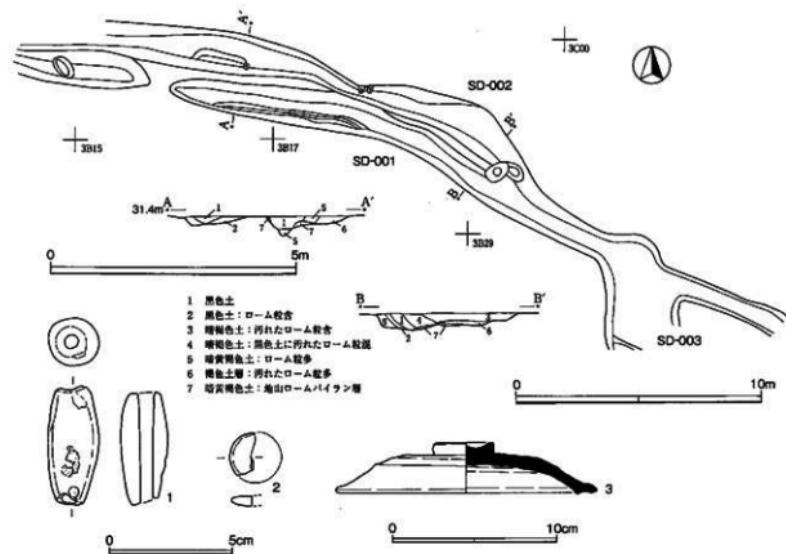
SD-003は東側でSD-001とT字形に交わって南側に延びる幅3.0m、床幅2.4m、深さ0.2mの深い溝である。

## SD-001 出土遺物（第47図、図版32、第19表）

1はSD-001から出土した土錐で、中央径1.9cm～2.0cm、長さ4.8cmの紡錘形をなし、重さ16.46gである。胎土に微細砂を含み、焼成は堅緻である。

## SD-005（第47図、図版23）

3C66から3C79にかけて、検出された。走行方位はN67°Wである。調査前から浅い掘状で確認されたが、水田近くから当遺構にかけて、北側に並木を伴う縱掘の痕跡が認められるところである。II層中位の確認



第47図 中・近世溝跡、奈良・平安時代以降グリッド出土遺物

面での幅4.7m～5.8m、深さ0.9m～1.2m、現延長14m、直線的に急傾斜する壁を持つ。床はのA幅が0.9m～1.7mほどの広いもの（A）が1条、中央（B）と北側（C）の幅が0.2m余の狭いものが2条みられ、全体に西側から東側に傾斜している。全体的に東側（斜面側）が幅が狭くなっている。Aの床は両側に更に浅い、轍状の溝と多数の小ビットを持つ。Bの床は逆台形に近い断面で、中途に段差がある。Cの床はU字状で、鎌跡状の細かい凹凸が見られる。

断面観察から重複関係が認められたが、幅が広いAが最も古く、また深い。覆土上部にクロボク土（宝永火山灰？）があり、その覆土がBに切られている。BとCとの差は確認できなかった。尾根を折断するような地境の溝であろうか。

#### SD-005出土遺物（第48図、図版32）

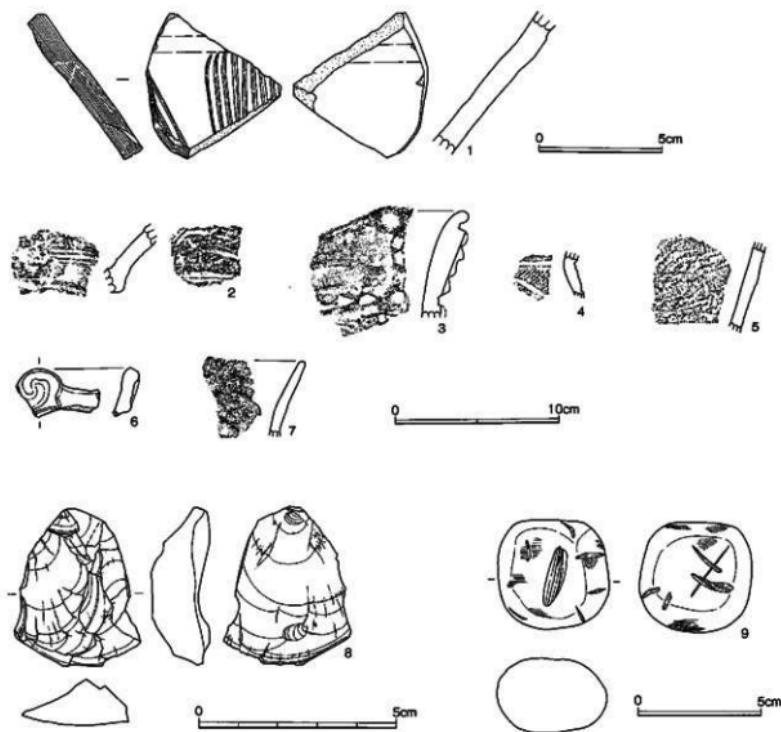
出土遺物は時期的に合うものは覆土の上部で出土した1の擂鉢片のみである。近世の瀬戸・美濃のもので、鉄銷釉が薄くかけられている。側面は砥石として転用されている。

#### グリッド出土遺物（第47図）

基盤石を模した泥面子で40%ほどの残存率である。胎土に混ぜものがない。焼成は非常に良い。現存部の長さ1.7cm、厚み0.4cm、重さ0.67gである。SI-003の出土であるが、近世の所産である。

第21表 造構一覧表

造構名	種別	地点	時期	平面形	断面形	長軸方位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
SI-001	住居	2B04・05・14・15	弥生	隅丸方形	逆台形	N79°W	6.12 5.2	4.9 4.6	0.7	炉
SI-002	住居	2B45・46	弥生	楕円形	逆台形	N83°W	6.62 6	5.44 4.95	0.32	炉
SI-003	住居	2C14・15・24・25	古墳中期	長方形	筒形	N45°W	6.1 5.95	5.44 5.23	0.35	炉
SI-004	住居	3D02・03	古墳中期	正方形	逆台形	N53°W	5.87 5.4	5.8 5.4	0.46	炉
SK-001	土坑	2C32・33	绳文	円形	筒形	N84°E	1.56 1.2	1.24 1.2	0.9	
SK-002	土坑	2C13	绳文	楕円形	鐘底形	N3°W	1.18	0.8	0.06	
SD-004	土坑	1C90	绳文	舌状形	U字形	N73°W	2.65	1.44	0.12	
SM-001	万形周溝 状遺構	3C	奈良	方形	U字形	N71°W	外辺14.1 内辺11.6	1.60～2.42 0.23～0.58		
SD-001	溝	3B～3C	中・近世	-	U字形	N63°～80°W	33	0.8～1.5	0.1～0.4	
SD-002	溝	3B～3C	中・近世	-	U字形	N70°～86°W	21	1.0～1.7	0.2～0.4	
SD-003	溝	3B～3C	中・近世	-	U字形	N1°E	(3.0)	3.0	0.2	
SD-005	溝	3C66～3C79	中・近世	-	逆台形	N67°W	14	4.7～5.8	0.9～1.2	



第48図 中・近世溝跡出土遺物、平成20年度調査グリッド出土遺物

## 第5章 まとめ

### 1 小原第1・第2遺跡について

小原第1・第2遺跡は台地に小谷をはさんで接している。検出した遺構は小原第1遺跡が旧石器時代石器集中地点1か所、縄文時代窓穴4基、土坑3基、奈良時代竪穴住居跡1軒、中・近世土塁1条、溝跡1条、小原第2遺跡では縄文時代窓穴1基、土坑2基、中・近世の溝跡4条、土坑9基である。

両遺跡での縄文時代の検出遺構は窓穴と土坑であったが、小原第2遺跡で縄文時代後期掘之内式の遺物集中が検出されており、遺物分布地点が限られて、付近に居住域が考えられる。小原第1遺跡では縄文時代後期加曾利B式の破片、弥生時代土器の集中地点が検出されたのみで遺構は確認されていないが、やはり台地南側に住居跡の可能性があると思われる。

奈良時代の遺構として、小原第1遺跡で小窓穴住居跡が検出されている。時期は須恵器杯から8世紀後半代のものと考えられる。カマドは煙道部の張り出しがあるものの、袖は残っておらず、火床部も形成されていないことから使用期間が短かったと考えられる。完形の須恵器杯が床面に残されており、住居廃絶に関わる祭祀的な意味を持つものであろう。いわゆる「離れ国分」という小形の単独住居であり、台地状での何らかの作業に関わるものか、あるいは見張り小屋的なものか性格が気になるところである。

### 2 堀尻第2遺跡について

#### 縄文時代

早期では条痕文系土器の出土があったが遺構は確認されなかった。また後期の加曾利B式の粗製深鉢形土器を出土した土坑が2基あった。前項で述べたように、SD-001が竪穴住居跡の一部の可能性があること、調査区北側隣接区域の畑には縄文時代遺物が濃く分布することから、集落が調査区北側に展開することが考えられる。

#### 弥生時代

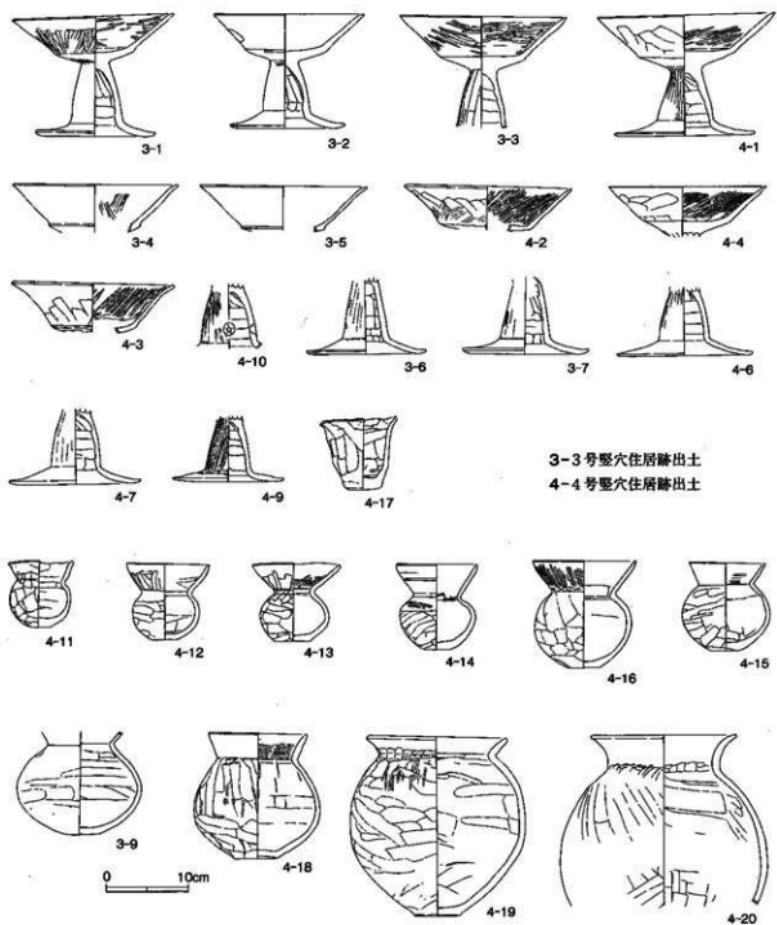
当該時期の遺構は竪穴住居跡2軒で、まばらな分布である。住居跡は小判型を呈し、5本柱穴で規模も似ている。出土土器は複合口縁の土器のもので、SI-002では信州系の土器に多い櫛書き文のものもみられた。これらは大きくみれば霞ヶ浦南岸西部に分布する印旛・手賀沼系土器の範疇に入るだろう。似た様相の遺跡としては本塩村角田台遺跡、萩原中原遺跡があげられる。この時代は、谷津の水田利用が進んでおり、その生産のための集落が展開していたとみられる。

#### 古墳時代

古墳時代は中期（和泉期）2軒の竪穴住居跡が検出されたが、弥生時代同様軒数は少ない。SI-003はやや長方形で柱穴なし、SI-004は正方形の5本柱穴、形状は異なるがほぼ同規模である。貯蔵穴の位置なども同じである。

出土遺物をみると、復原できるものでは高環は両者とも5個体だが、SI-003では他の土器は塔1個体と少ない。SI-004では小形の塔6個体、壺3個体、小形鉢1個体と他の器種の土器がみられた。

SI-004出土の塔では14は底も丸く、最も整っている。11・15は口縁が短く、壺に近い形である。壺も



第49図 堀尻第2遺跡古墳時代土器集成図

3個体あり、18は小形で塔に近いもの、19は腹部が球体で、やや小振りで五領式に近い器形のもの、20は頸部が長く、鬼高式の長胴壺に似た感じである。3個体には時期幅を感じられる。

SI-003では北側貯蔵穴から不明の土製品（10・11）が出土している。特別な製品と思われるが、類例に乏しく想像がつかない。貯蔵穴の位置は炉跡の右脇にあたるので、支脚等炉跡と関連があるものかも知れない。

古墳と集落の関係について若干述べると、本遺跡北側には大竹遺跡が存在し、後期古墳が確認されている。またかつて本遺跡北側に古墳が存在していたとの伝えがあるが、今回の調査では確認できなかったことから、この地域で古墳群が切れるのであろうか。

周辺で古墳時代前期の住居跡は確認されているが、古墳築造の時期より先行している。現在までのところ、古墳時代後期の集落は遺跡周辺では検出されていない。後期の集落は、墓域（古墳）と集落域とが分かれ、特定の広い台地平坦部場所に集約される傾向があるのだろう。古墳群と関連する集落が存在するとすれば印旛沼に南面している、郷地区など、瀬戸の交差点より南側の地区内であろうか。

#### 奈良・平安時代

SM-001は、当初方墳としていたが、周溝内出土遺物の精査したところ奈良時代の方形周溝状遺構であった。埋葬施設等は検出されなかった。周溝内出土の須恵器甕、及び壺蓋の時期から8世紀後半頃とした。遺跡周辺での方形周溝状遺構は初見であろう。

#### 中・近世

SD-001～003、SD-005の溝跡を調査した。SD-001・002は一つの溝の底部付近で別溝に見えるのかも知れない。SD-005は水田面から北側に低い土塁と並木を伴いながら堅堀状に上がってくる溝状遺構で、近辺は大字の境にもあったているので、地境溝になるのかもしれない。かなりしっかりした溝であり、動物除けや防御的な意味合いも持たせられた可能性はある。残念ながら西側が調査区の南側の境となっており、間が開いてしまい不確実だが、SD-001-002と連なり、さらに西側の谷に降りていく可能性もあるう。

# 写 真 図 版

小原第1遺跡  
○  
小原第2遺跡  
○

塙尻第2遺跡  
○

遺跡周辺航空写真（縮尺 約1万分の1）

図版2



小原第1・第2  
遺跡遠景（北から）



調査区遠景  
(南東から)



上層確認調査状況

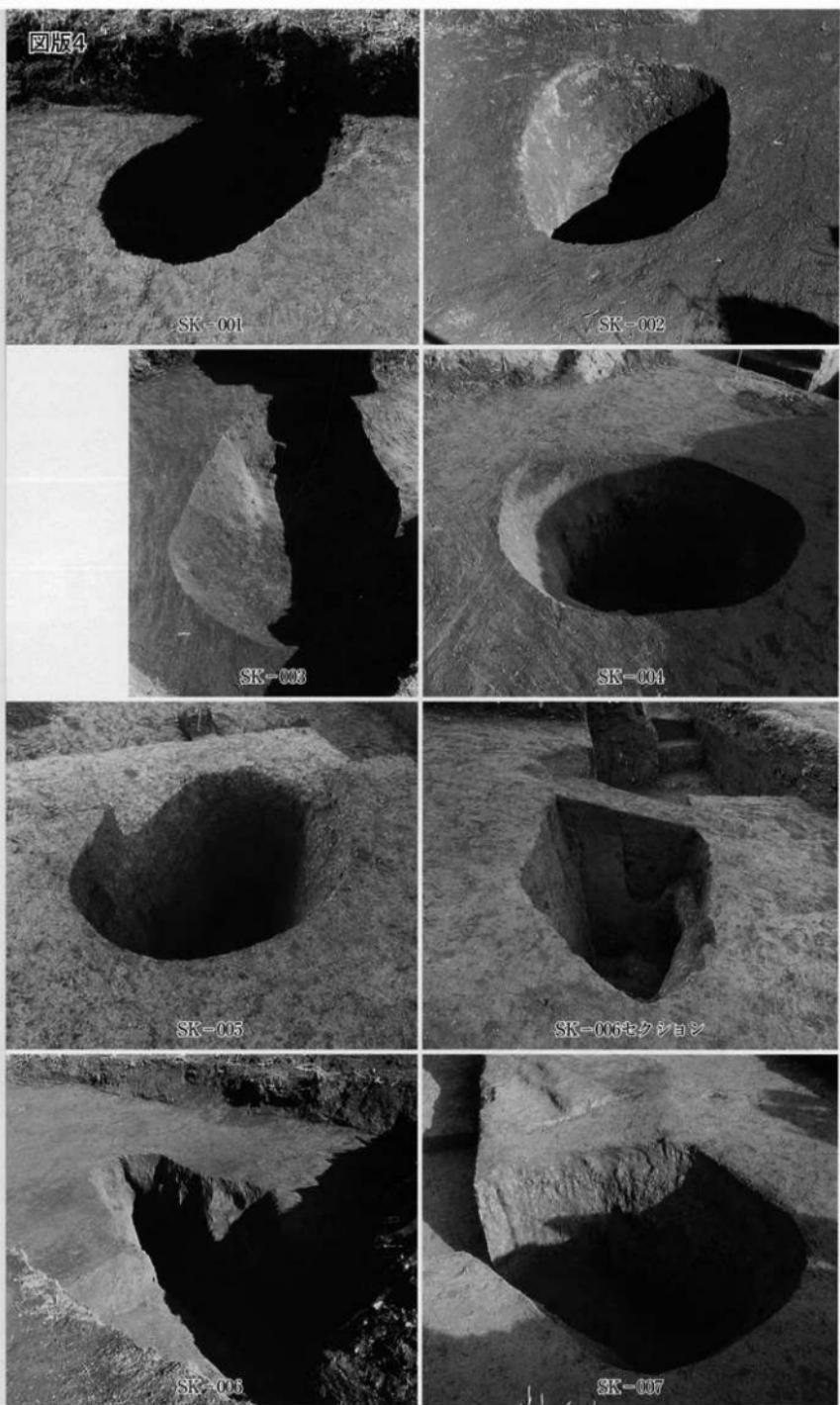


下層確認調査状況



下層拡張区調査風景

石器集中地点  
全景石器集中地点  
セクション

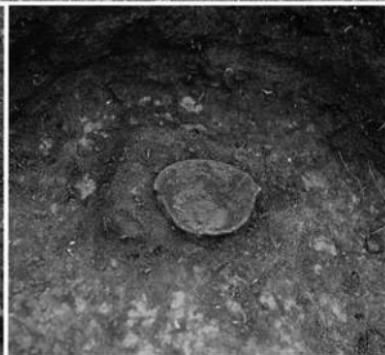




SI-001全景



SI-001出土状況



SI-001(南側)



SI-001(北側)



SX-001(道路側から)



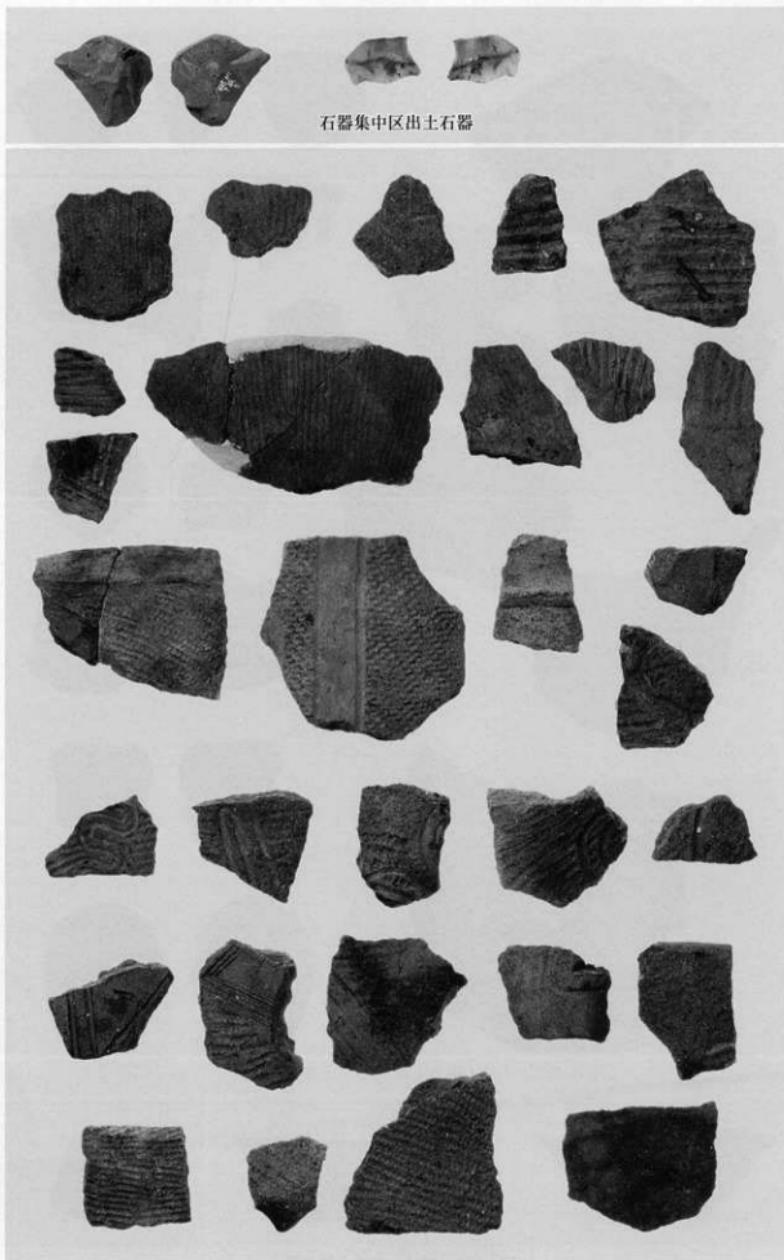
SX-001(西側から)

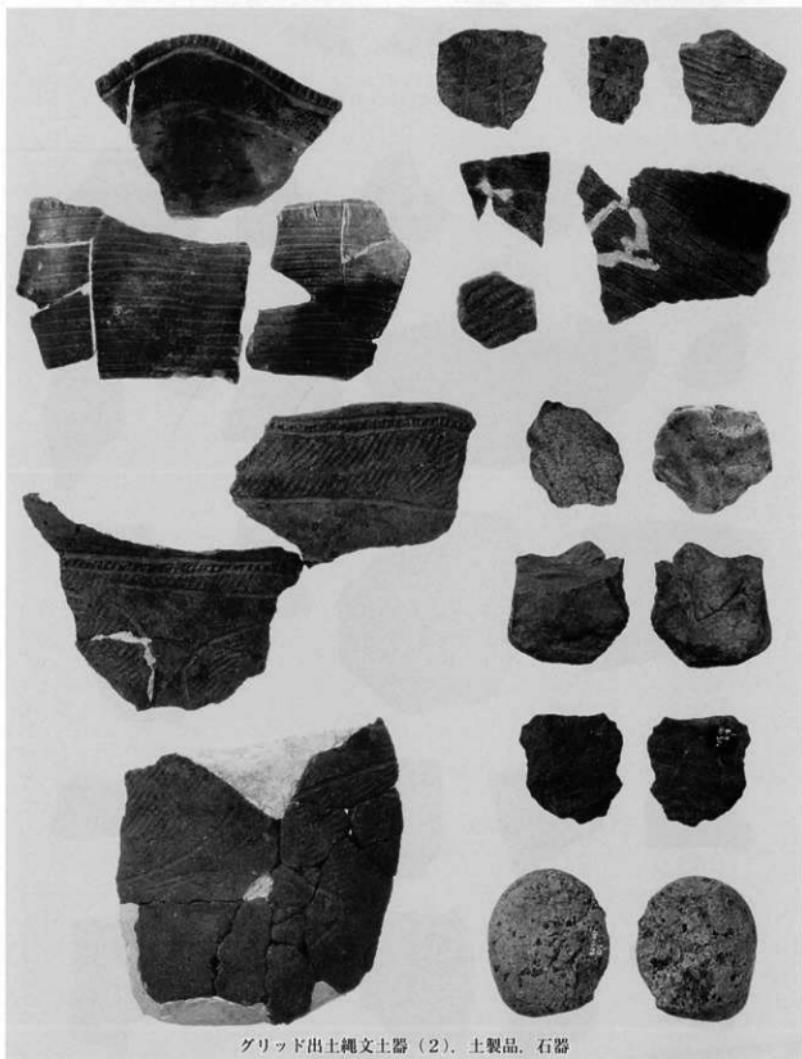


SX-001断面 (A-A')



SX-001断面 (C-C')





グリッド出土縄文土器（2）、土製品、石器



SI-001、グリッド出土須恵器

平成18年度  
調査区近景  
(東から)



平成20年度  
調査区近景  
(東南から)



上層確認調査状況



下層確認調査状況

年月日	平成20年7月20日
実施者	小原等2班30人
監視官	アリット
直前日	平成18年7月20日
実施方法	手掘り取土全採取

図版10



ローム層断面



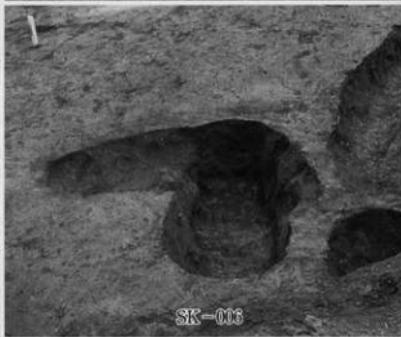
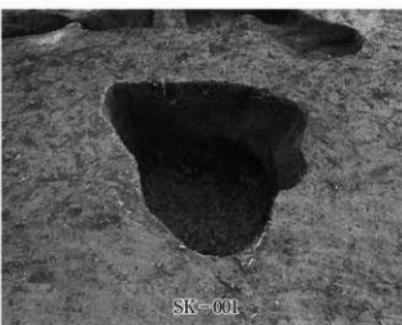
上層確認トレシナ内遺構検出状況



縄文土器集中地点  
(西から)



縄文土器集中地点  
(南東から)



拡張区弥生土器出土状況  
(南から)



SD-001  
(西から)



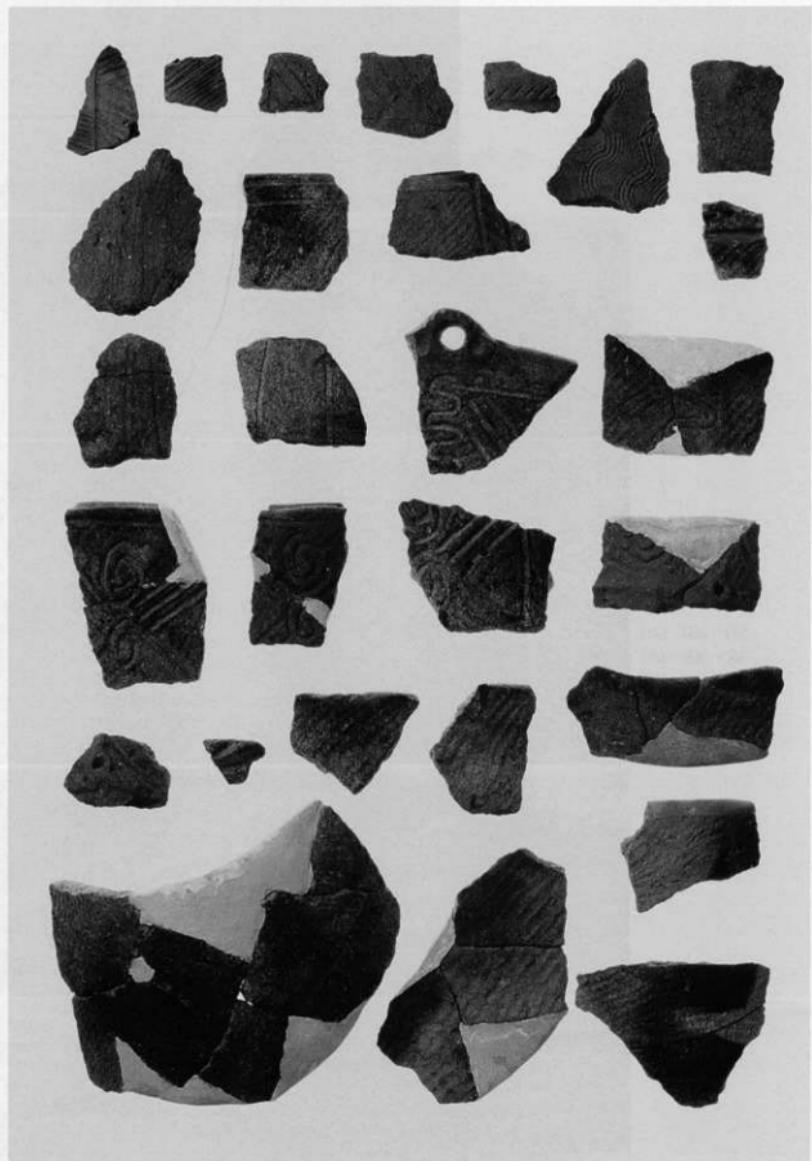
SD-002・003  
(西から)



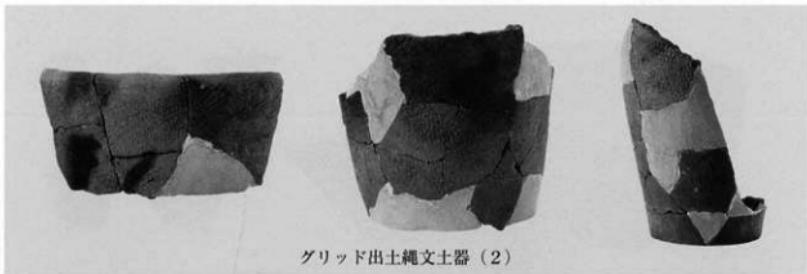
SK-010

SK-014

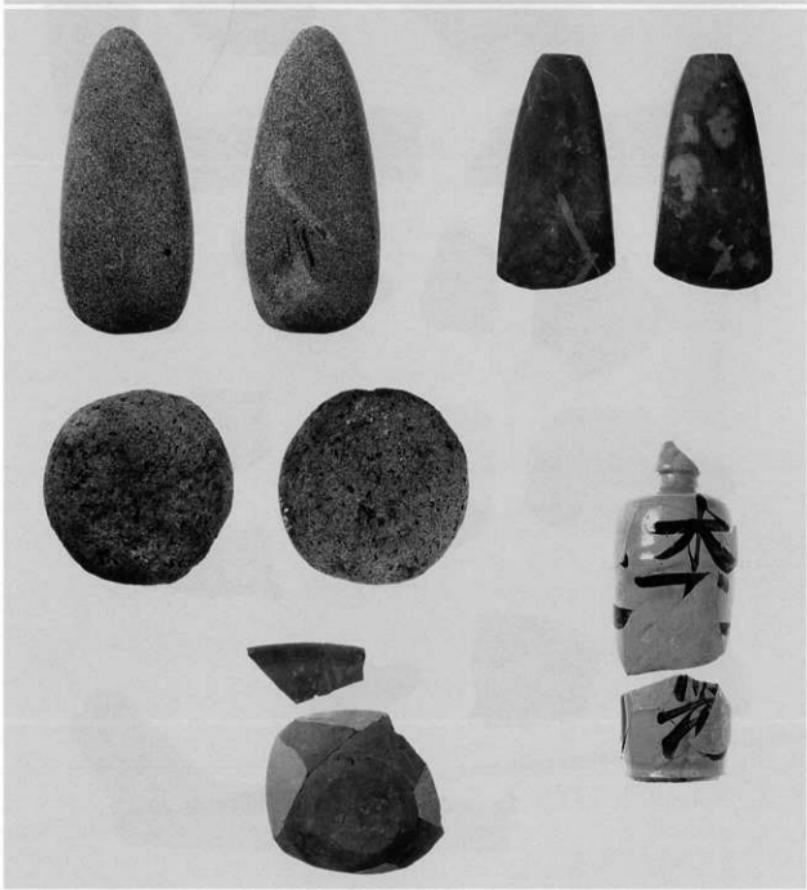




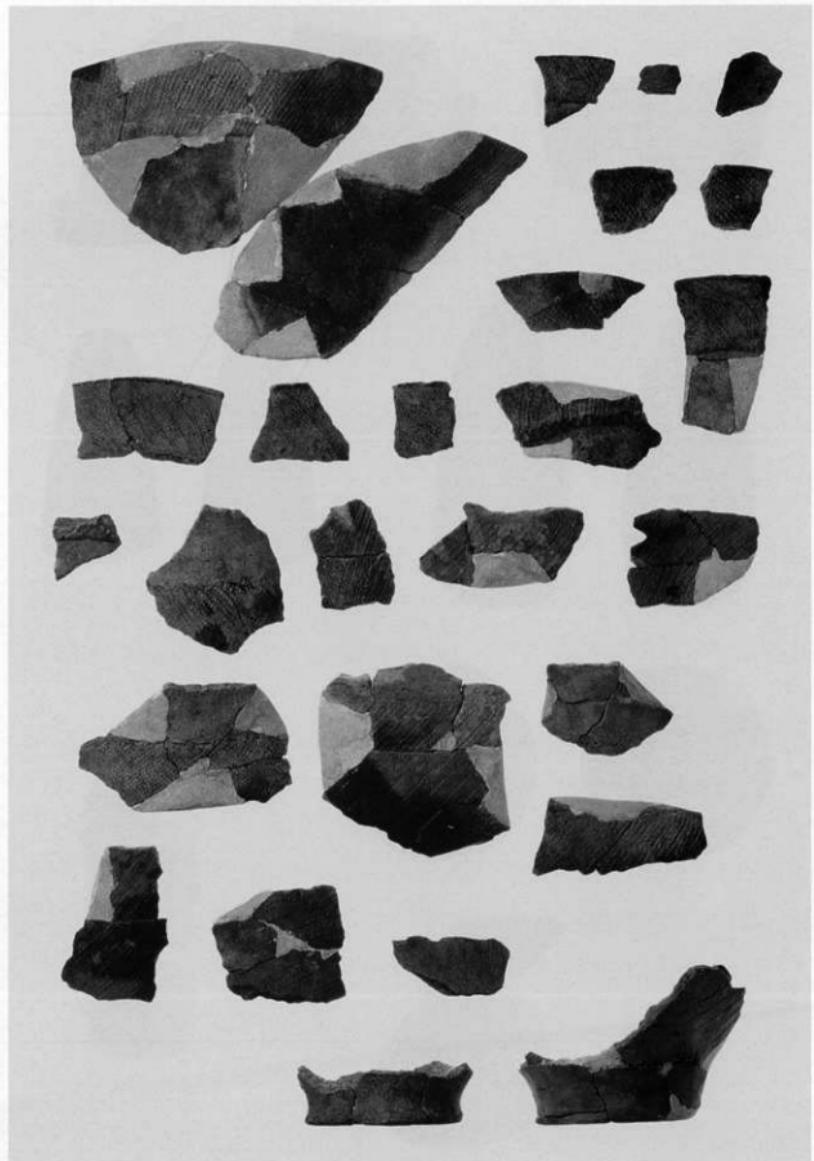
グリッド出土縄文土器（1）



グリッド出土縄文土器（2）



グリッド出土石器、土師器、陶器



グリッド出土弥生土器



平成18年度  
調査区近景  
(東から)



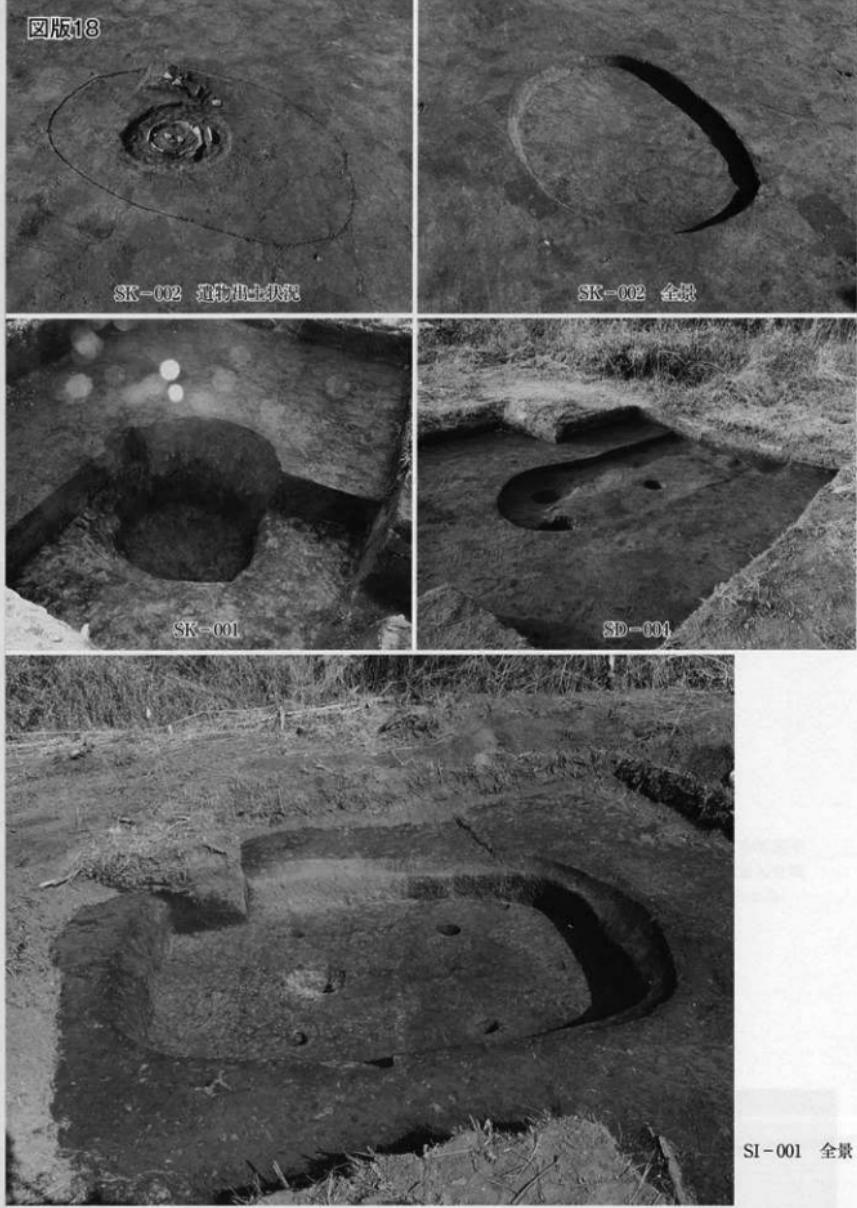
平成20年度  
調査区近景  
(西から)



調査風景



図版18





SI-002  
遺物出土状況

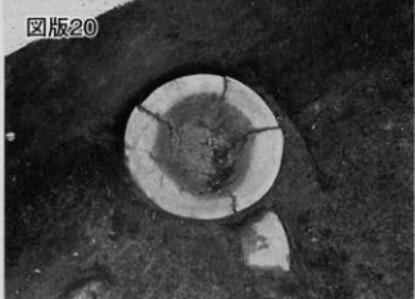


SI-002 全景



SI-003 遺物出土状況

図版20



SI-003  
遺物出土状況



SI-003 全景



SI-004  
遺物出土状況



SI-004 全景



SM-001  
遺物出土状況

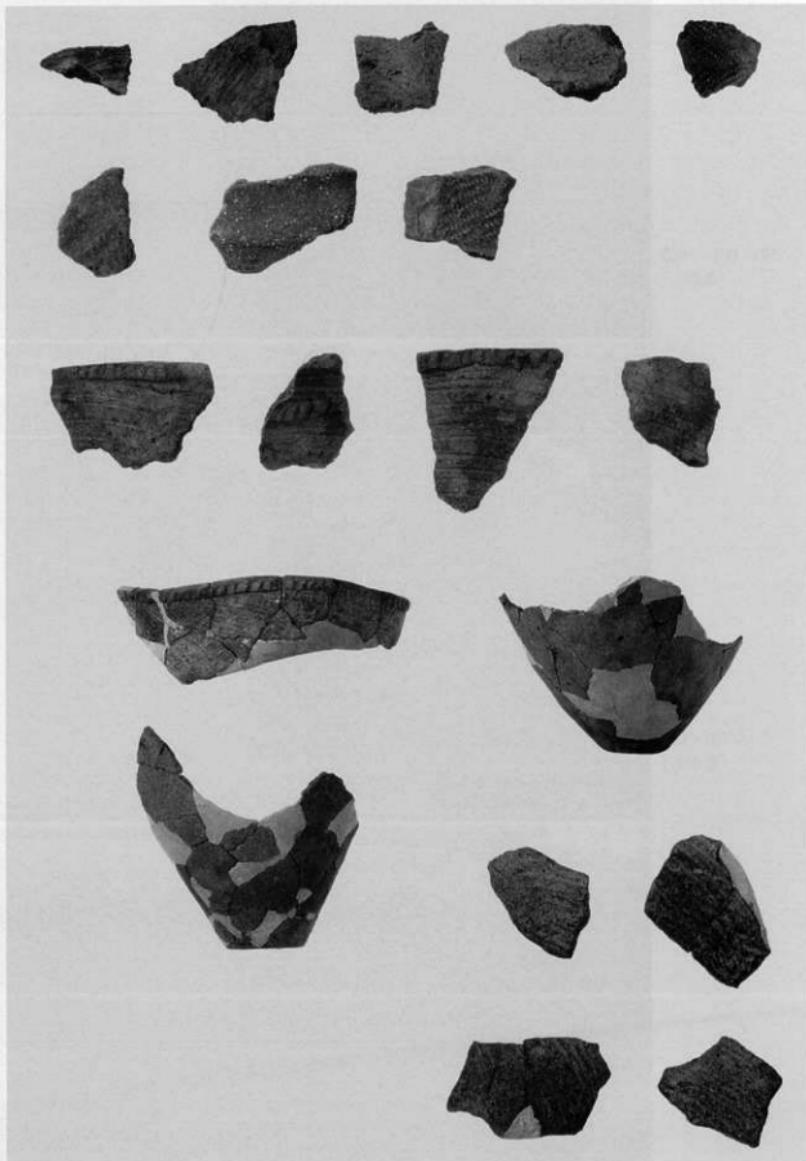


SM-001 全景  
(平成18年度分)

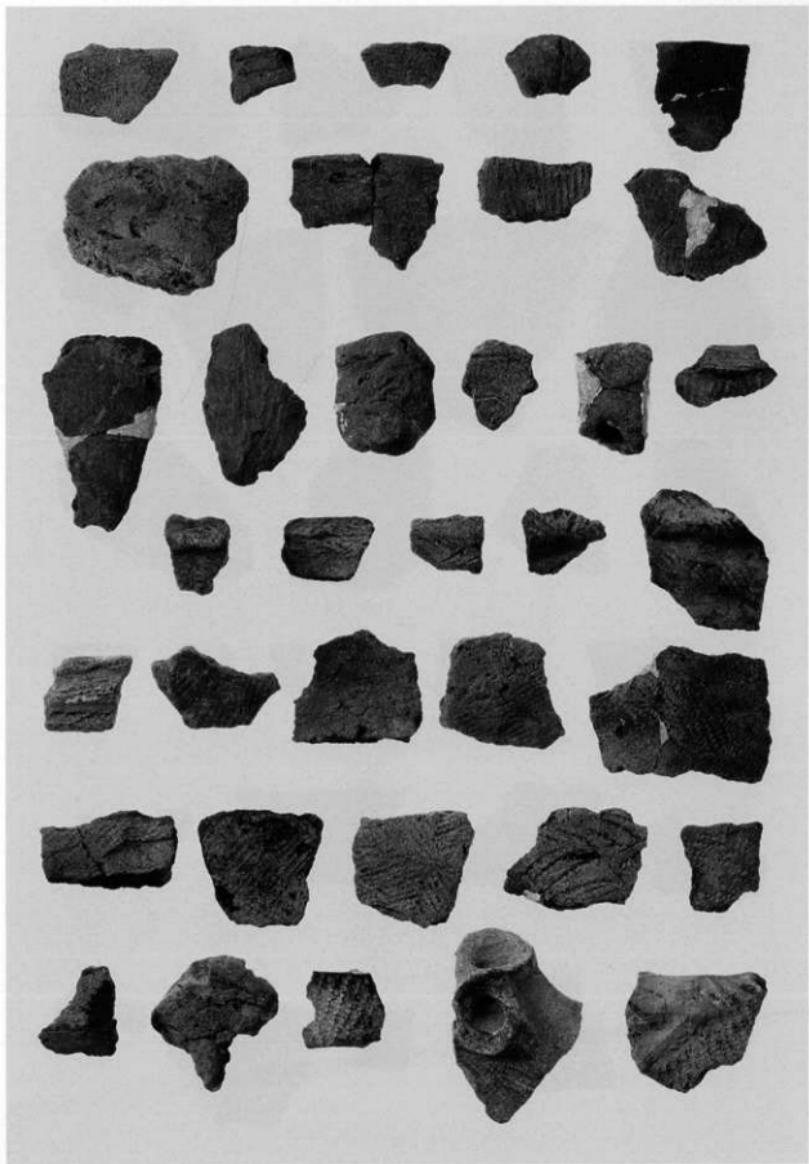


SM-001 全景  
(平成20年度分)

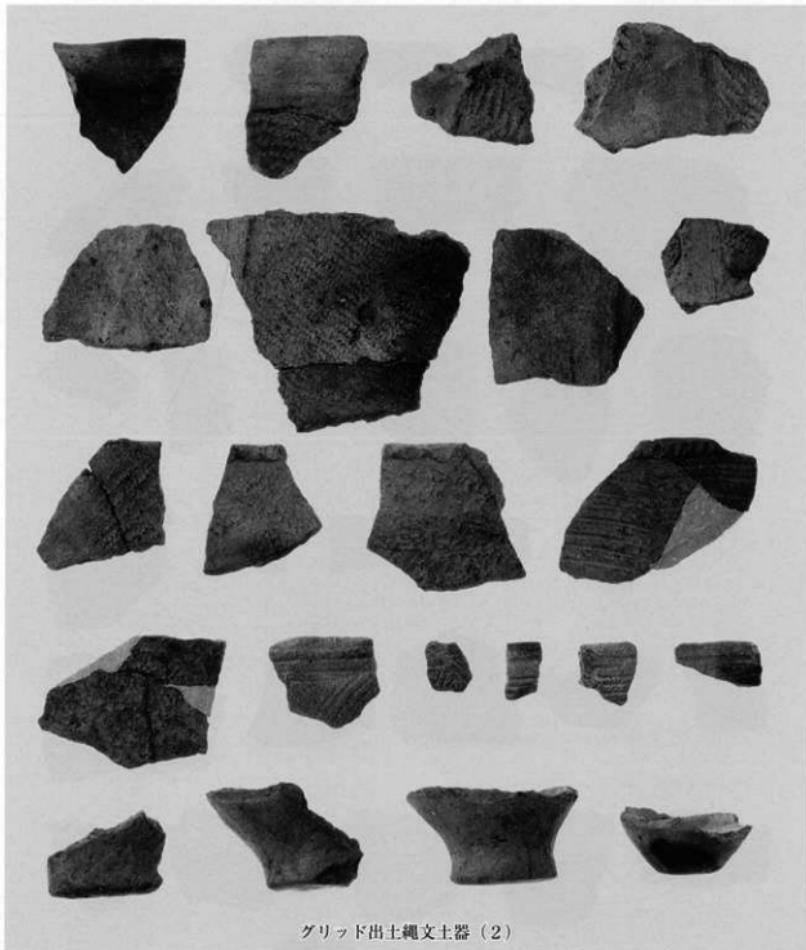




縄文時代遺構出土土器



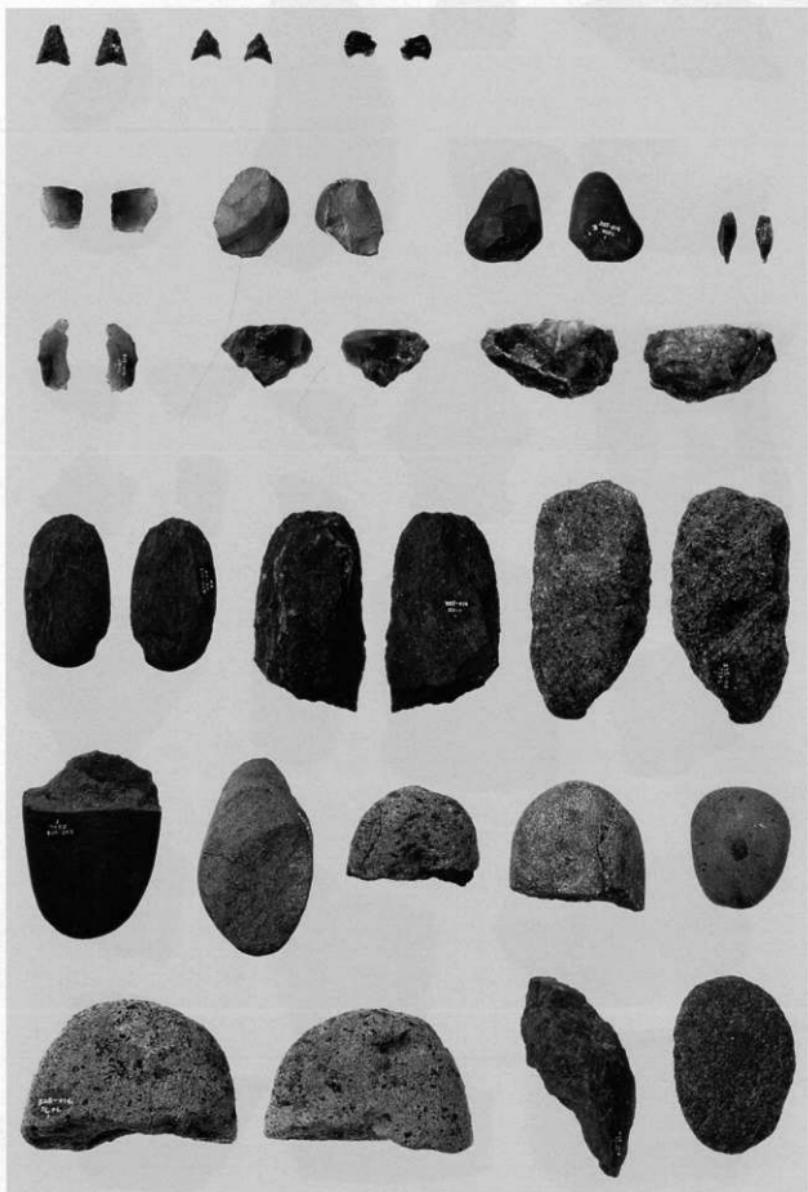
グリッド出土縄文土器（1）



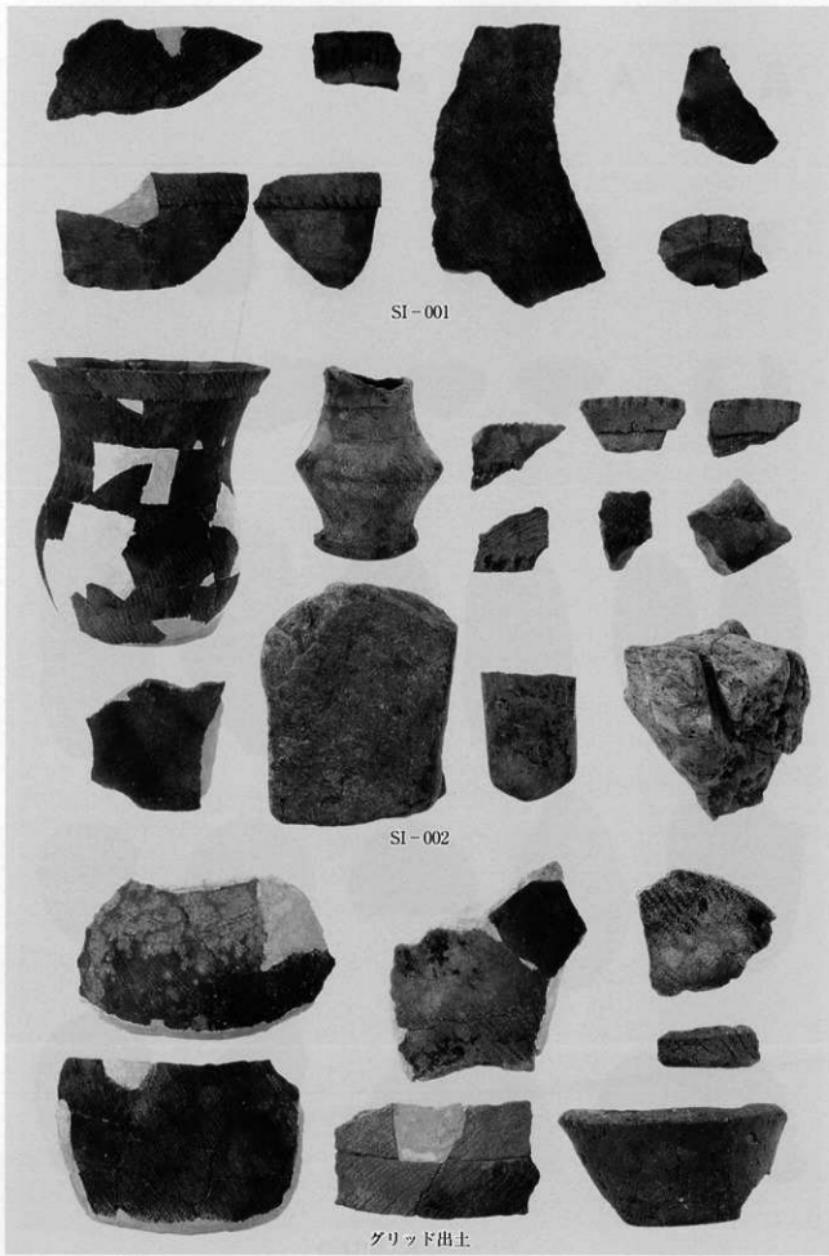
グリッド出土縄文土器（2）



グリッド出土土製品、弥生土器

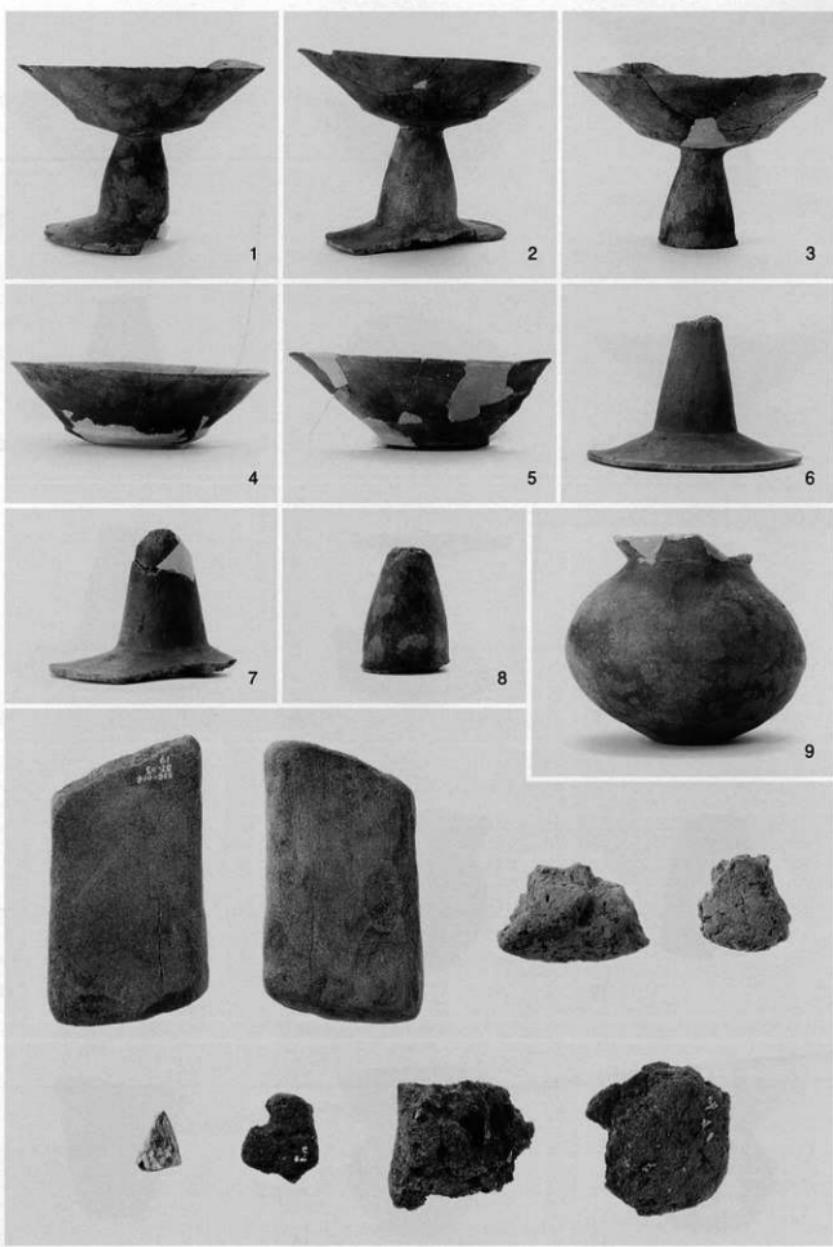


グリッド出土縄文時代石器

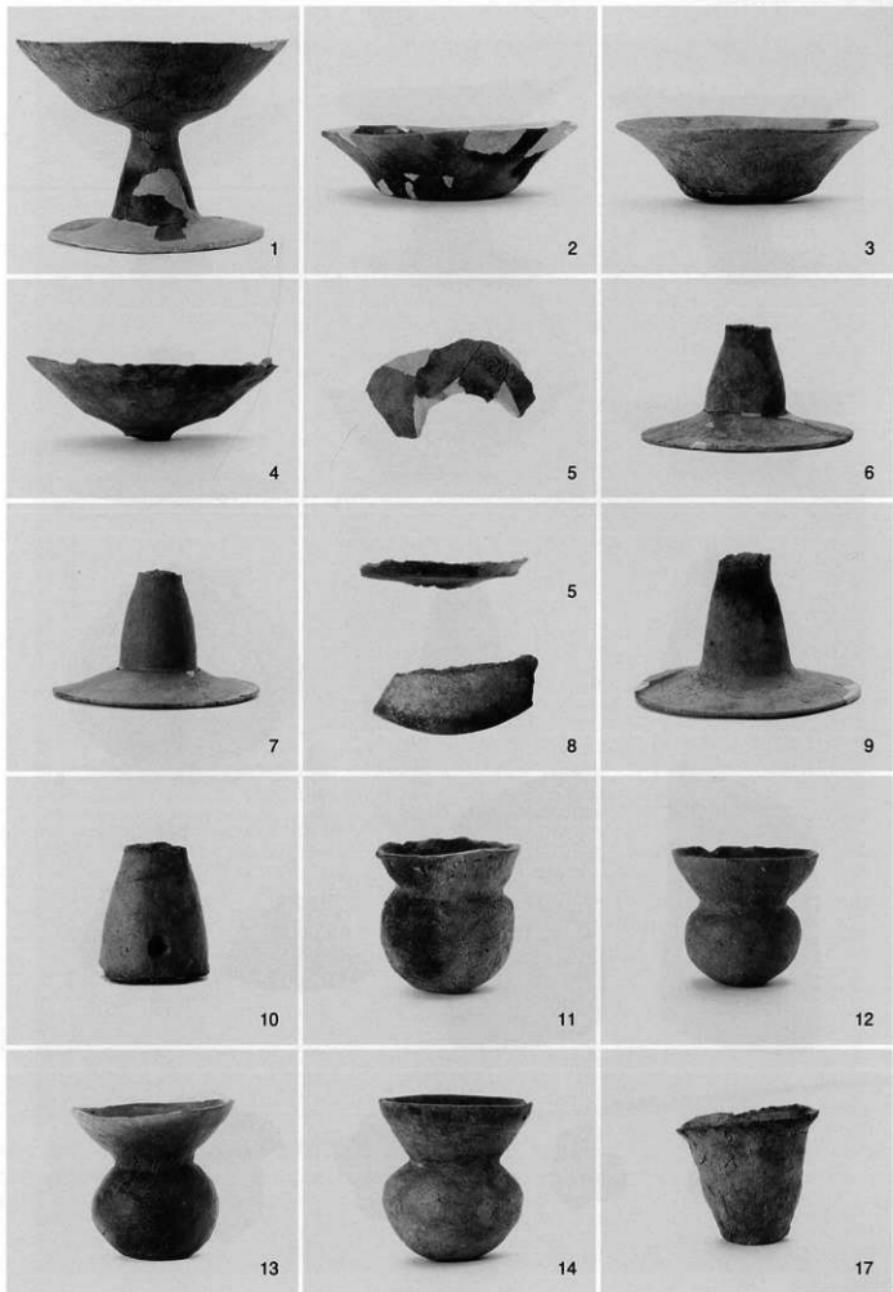


グリッド出土

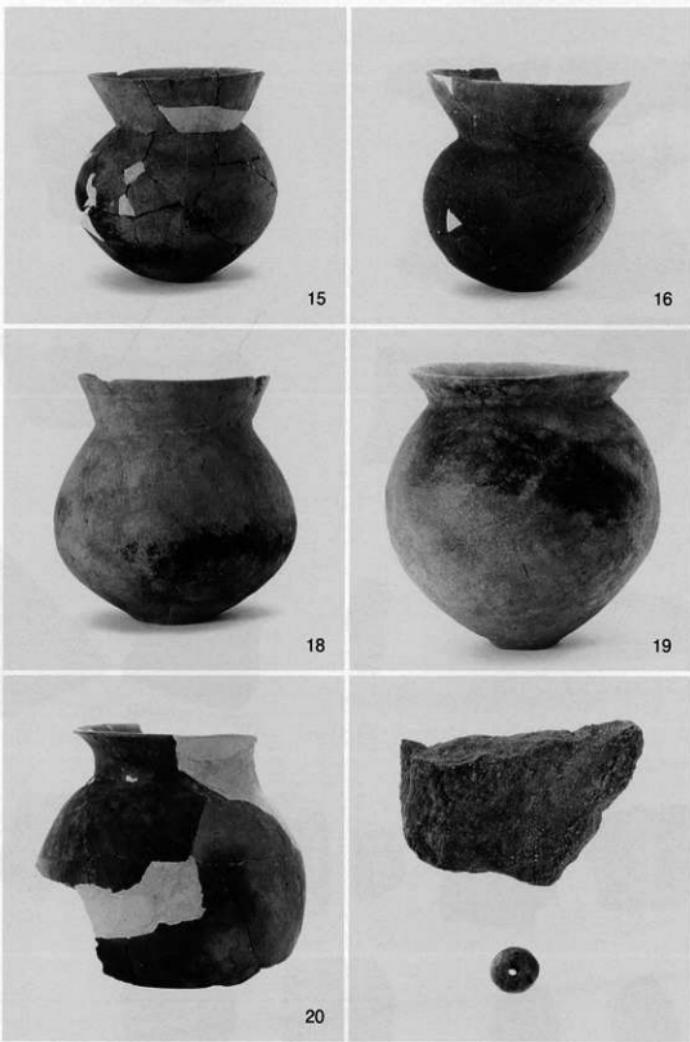
弥生時代出土遺物



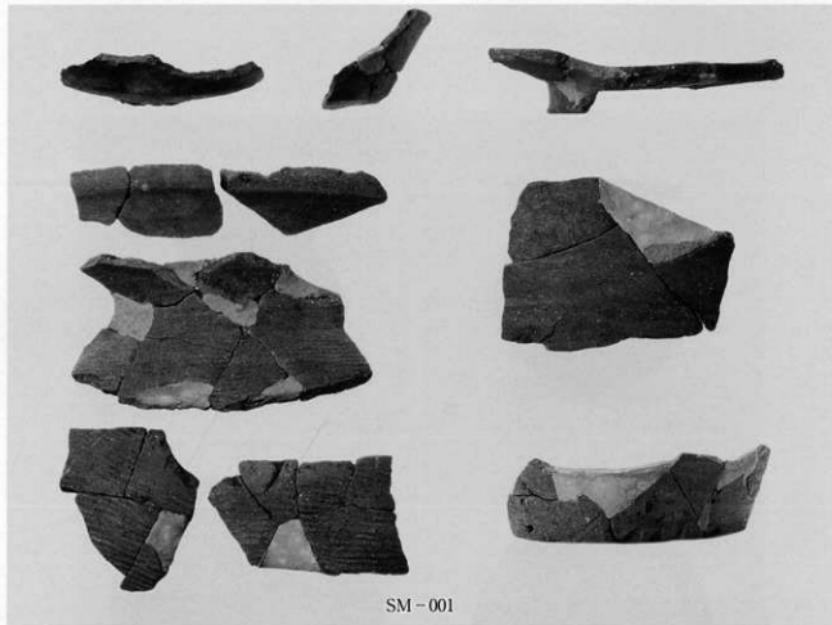
SI-003出土遺物



SI-004出土土器（1）



SI-004出土土器（2）、土製品、石器



SM - 001



2Dトレンチ

SD - 001

SD - 005

奈良・平安時代以降出土遺物



平成20年度調査出土縄文時代遺物

## 報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第620集  
成田新高速鉄道・北千葉道路  
埋蔵文化財発掘調査報告書2  
—印旛郡印旛村小原第1遺跡・小原第2遺跡・堀尻第2遺跡—

---

平成21年3月25日発行

編集 財團法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター

発行 成田高速鉄道アクセス株式会社  
船橋市本町2-10-14  
財團法人 千葉県教育振興財団  
四街道市鹿渡809番地の2

印刷 株式会社 エリート情報社〔印刷出版局〕  
成田市東和田415-10

---